

トセリ。然ルニ大正九年ノ現在勢力ハ前表ニ示セルガ如ク、第一期弩級艦二十三隻、巡洋戰艦三隻ニ過キズシテ、遙ニ造艦方針ニ及バザルガ如シ、蓋シ英國ハ平和條約締結後再ヒ大戰ナカ
ルベキヲ豫想シ、弩級前ノ舊式戰艦ヲ處分シ別ニ製艦ニ着手セザリシナリ。然ルニ最近、世界
ノ大勢容易ナラザルヲ見テ取り、再ビ製艦ヲ企ツルニ至レリ。

米國ノ造艦計畫ハ、其初メ戰艦八隻五隊ニ總指揮官ノ搭乘スル戰艦一隻ヲ加ヘ、四十一隻ヲ
造ラントセシガ、後之ヲ變ジ戰艦八隻、巡洋戰艦四隻ノ主力艦六隊計七十二隻ヲ造ルコトニ改
メリ。而シテ大正九年ニ於テハ前表ニ示スガ如ク、第一期弩級戰艦十二隻ヲ具フルガ上ニ建造
中ニ屬スル戰艦十隻、巡洋戰艦六隻アリ、計畫成テ未ダ起工セザル戰艦尙一隻ヲ存ス。此クシ
テ米國ノ海軍ハ將來遠カラズシテ英國ノ壘ヲ摩スルニ至ルベキナリ、以テ米國ガ海上ノ霸王タ
ラントスルノ雄圖ヲ窺フベシ。

我國ハ日露戰爭後夙ニ國防方針ヲ一定シ、主力二艦隊即チ戰艦八隻、巡洋戰艦八隻ヲ作ル
策ヲ立テリ、世人之ヲ八八艦隊ノ計畫ト云フ。然ルニ世界戰爭ノ開展スルニ從ヒ之ヨリ得タル
教訓ト世界大勢ノ變化トニ鑑ミ、大正七年國防方針ヲ變更シ、主力二艦隊ヲ改メテ主力三艦隊
ヲ建造スルコトニ決定セリ。畢竟八八艦隊ニ戰艦八隻ノ一艦隊ヲ加フルコトニ歸スベシ。此ノ
如ク國防計畫ハ立チシモ、其實現ハ容易ナラズ、明治四十四年ヨリ製艦費ハ繼續費トシテ定メ

ラレ、其後漸次之ヲ増シ來リシモ、實ハ其理想ヲ距ルコト頗ル遠ク、大隈内閣ハ八四艦隊ノ完
成ニ満足シ、寺内内閣ハ八六艦隊ノ完成ヲ期シ、原内閣ニ於テ八八艦隊ノ完成ヲ期スルニ至レ
リ。然レドモ是レ豫算上繼續費トシテ決定セルノミ、我國ガ事實戰艦八隻、巡洋戰艦八隻ヲ有
スルニ至ルハ實ニ大正十六年以後ニアリトス。

(註) 我海軍ノ歴史ヲ按ズルニ、明治二十五年頃迄ニ六六艦隊ヲ造リ、之ヲ以テ日清戰役ニ從ヒ、其後其力ヲ維持シ日露
戰役ニ及ンテ、新ニ日進春日ノ二艦ヲ購ヒ、八六艦隊ヲ以テ露國ノ艦隊ト戰ヒシナリ。然ルニ日露戰爭當時英國ガ率先シテ
弩級艦ノ建造ヲ創メ歐米諸國之ニ倣フヤ、從來ノ戰艦ハ第一戰線ニ立ツコトヲ得ザルニ至リ、世界ノ海軍均勢ハ大ニ變ジ來
リシノミナラズ、日露戰前ニ於テハ我レヨリモ弱少ノ海軍ヲ有スルニ過ギザリシ獨、米ガ急ニ多數ノ軍艦ヲ建造スルニ至リ
シヲ以テ、我國ノ國防計畫トシテモ、世界ノ大勢ニ順應シ製艦方針ヲ一定スルノ必要起リ、終ニ所謂八八艦隊ヲ造ルコトヲ
策定スルニ至レリ、時ハ明治四十年ノ頃ナリシガ、明治四十四年ニ至テ之ガ實現ニ着手セリ。尤モ之ニ先テ軍備補充費ノ繼
續費ハ存シタリシガ、明治四十四年ニハ之ニ追加シテ同年以降六箇年ニ亘リ繼續費八千二百萬圓ヲ得タレバ、之ニ依テ戰艦
扶桑、巡洋戰艦金剛、比叟、霧島、榛名ノ五隻ヲ建造スルノ見込確立スルニ至レリ。第二次西園寺内閣成ルヤ(明治四十四
年八月)海軍充實案ヲ立テ、三億五千萬圓ノ繼續費ニ依テ之ヲ實現セントセリ、是レ所謂三億五千萬圓案ナルモノナリ。五
億五千萬圓ト云フ數字ハ其當時ノ豫算ニ於テハ驚クベキ巨額ニシテ、之ニ應ズル財源乏シカリシヲ以テ一年延期ト決セリ。
是ニ於テ海軍當局ハ既定軍備補充費ノ割當額ヲ變更シ海軍部内ノ行政整理ニ依テ山城、伊勢、日向、三戰艦ヲ起工スルノ準
備費ヲ生ミ出シ一時ヲ糊塗セリ。大正元年十二月西園寺内閣倒レテ第三次桂内閣成ルヤ、大體三億五千萬圓案ヲ承認スルト
共ニ其第一次ノ實行トシテ九千三百萬圓ヲ以テ戰艦三隻ヲ追加建造スルコト、シ、大正二年度ニ於テハ其一部六百萬圓ヲ計
上フルコト、セシカ、幾許モナク桂内閣倒レテ山本内閣之ニ代ルヤ、大正二年度豫算ハ更正スルノ餘日ナキ故ヲ以テ大體桂

内閣案ヲ詰理シ併セテ海軍補充案ヲ踏襲セリ。次ニ大正三年度ノ豫算ヲ編製スルニ及ンデ一方ニ於テハ行政整理ヲ行ヒ且ツ増師ヲ延期スルト共ニ他方ニ於テハ海軍擴張費ヲ半減シ一億五千四百萬圓ヲ大正三年以降六箇年ノ繼續費トシ、戰艦四隻、驅逐艦十六隻、潜水艦六隻ヲ建造スルノ議ヲ決シ之ヲ三十一議會ニ提出セシモ、上下兩院ノ豫算ニ對スル意見合ハズシテ豫算ノ成立ヲ見ルニ至ラズ海軍案モ亦葬リ去ラレタリ、從テ大正三年度ニ割リ當テラルベキ戰艦三隻ノ工事費追加額六百五十萬六千圓モ亦協賛ヲ經ズシテ已ミヌ。大隈内閣組織セラレテ、戰艦建造ノ一日モ緩フスベカラザルヲ見ルヤ、臨時議會(第三十三議會)ヲ召集シテ、此戰艦三隻ノ工事費追加額ニ關スル豫算案ヲ提出シ、之ガ協賛ヲ經タリ。次ニ大正四年九月ノ防務會議ニ、八八艦隊ヲ縮少シテ八四艦隊ニ改メ、大正五年度ヨリ九年度ニ亘リ、戰艦四隻、輕巡洋艦五隻、驅逐艦十二隻、潜水艦八隻ヲ造ルコトトナセシガ。第三十七議會ハ更ニ之ヨリ縮少セル案、即チ大正五年度ヨリ八年度ニ亘リ、四千五百三十二萬圓ヲ以テ戰艦一隻(長門)、三萬四千噸級、輕巡洋艦二隻、驅逐艦四隻、潜水艦三隻ヲ建造スルノ案ヲ可決セリ。此ノ如クシテ造艦計畫ハ次第ニ退歩シ、八四艦隊ヲ完成スルノ見込モ立タザルニ至リシガ、寺内内閣ニ至リ、第三十九議會(大正六年臨時議會)ニ於テ、軍備補充費中ニ二億六千餘萬圓ヲ追加シ、大正十二年度ニ至ル迄ニ於テ、戰艦三隻(陸奥、加賀、十佐)巡洋戰艦二隻、輕巡洋艦八隻、井上驅逐艦、潜水艦若干ヲ建造スルノ案ヲ決シ、更ニ臨時費一千二百萬圓ヲ以テ、中型驅逐艦六隻ヲ建造スルコトヲモ可決スルニ及ビテ、初メテ八四艦隊ノ完成ヲ期待シ得ルニ至レリ。第四十議會ハ更ニ一歩ヲ進メ、造艦費ニ追加シ、大正七年度以降大正十二年度ニ亘リ、六年間ノ繼續費トシテ三億五十四萬八千四百三十七圓ヲ支出スルノ計畫ニ協賛ヲ與ヘ、新ニ巡洋戰艦二隻、中型巡洋艦三隻、大驅逐艦十一隻、中驅逐艦十六隻、潜水艦四十八隻、特務艦六隻ヲ建造スルコトトナリ、所謂八六艦隊ノ完成ヲ期待セラル、ニ至レリ。然レドモ尙進テ之ヲ觀察スルニ大正十二年ニ至ラバ、戰艦扶桑、山城、伊勢、日向、長門、陸奥、加賀、土佐ノ八隻并ニ巡洋戰艦榛名、霧島、天城、赤城、愛宕、高雄ノ六隻ヲ有スルニ至ルガ如シト雖ドモ、戰艦扶桑、巡洋戰艦榛名、霧島ハ共ニ大正十二年ヲ以テ第二期艦トナルガ故ニ、忽チ八六艦隊ヲ得テ忽チ七四艦隊ニ落ツルコト、ナルベキナリ。原内閣ニ至テ八八艦隊ノ完成ヲ期シ、之ニ要スル繼續費ノ協賛ヲ四十二議會ニ求メシガ議會ノ解散トナリシヲ以テ、更ニ四十三議會(大正九年七月臨時議會)ニ要求シ、終ニ其協賛ヲ經

タリ。是ニ於テ大正九年ヨリ十六年ニ至ル間ニ於テ戰艦四隻、巡洋戰艦四隻、巡洋艦十二隻、驅逐艦三十二隻其他潜水艦、特務艦若干ヲ建造スルコトトナリ、更ニ角ニモ大正十六年ニハ八八艦隊ノ形ヲ具フルコトヲ得ルニ至レリ。

列強ノ海軍現勢力并ニ造艦計畫ハ、以上述べタル如クナルガ、其計畫實現ノ程度如何ニ依リテ列強海軍勢力ノ優劣ハ變スルコトヲ免レズ、之ヲ例フルニ米國ハ急速力ヲ以テ造艦ニ從事スルモ、我國ハ然ラザルガ故ニ、大正十三年ニ至ラバ主力タルベキ弩級艦ハ米國ニ於テ二十五隻、我ニ於テ十三四隻(舊計畫十二隻新計畫二隻)尙一(一隻ヲ加ヘン)タラントス。彼我ノ勢力均衡ノ破ル、コトガ戰爭ノ原因ヲ爲スモノナリトセバ、平和ヲ好愛スル人程平和ノ爲ニ之ヲ憂慮セザルヲ得ザルベシ、而シテ八八艦隊ノ完成ヲ延バセバ延バス程此危機ハ永ク續クベキガ故ニ軍備制限論如何ニ喝采ヲ博スルモ八八艦隊ノ計畫ハ將來恐ラク變更スルコト能ハザラン。

二、海軍ニ於ケル國防計畫ニ基キ財政上ノ負擔ヲ考フルニ、實ニ驚クベキ巨額ニ上ル。八八艦隊即チ主力二艦隊ヲ基本トシ、其補助艦トシテ巡洋艦二十四隻、驅逐艦六十四隻、潜水艦ノ多クヲ要スルトセバ、年々戰艦一隻、巡洋戰艦一隻、巡洋艦三隻、驅逐艦八隻、潜水艦幾隻ヲ造ラザルベカラズ。今是等軍艦ノ建造費ヲ見ルニ、一噸當リ、主力艦ハ千二三萬圓、巡洋艦ハ其二三割増、驅逐艦ハ其二倍、潜水艦ハ其三倍ヲ要ス。故ニ三四萬噸ノ主力艦一隻ハ正ニ八千萬圓乃至一億圓ヲ要シ、四五千噸ノ巡洋艦三隻、千噸以上ノ驅逐艦八隻ハ、又五千萬圓ヲ要シ、

之ニ加ヘテ潜水艦十隻以上ヲ作ルトセバ更ニ二千萬圓ヲ要シ年々ノ製艦費總額約二億圓ニ上ルベシ。

現ニ我國ノ製艦費ニ就テ之ヲ見ルニ、大正九年七月ノ臨時議會ニ協賛セラレタル額ハ七億六千餘萬圓ニシテ、從前既定メラレタル額十億四百餘萬圓ノ中未ダ支出セラレザリシ年額四億餘萬圓之ニ加フルトキハ、十一億六千五百餘萬圓トナルベキナリ。今大正九年ヨリ大正十六年ニ至ル製艦費ノ年度割ヲ示セバ左ノ如シ。

年度	大正九年	同十年	同十一年	同十二年	同十三年	同十四年	同十五年	同十六年
既定額	10,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000
追加額	8,000,000	10,000,000	7,000,000	9,000,000	10,000,000	11,000,000	12,000,000	13,000,000
改定額	18,500,000	21,500,000	18,500,000	20,500,000	21,500,000	22,500,000	23,500,000	24,500,000

製艦費ハ從來戰前ノ物價ノ標準トシテ計上シ來リタルモノナルガ、大正九年七月ノ追加額ハ戰前ノ物價ニ對シテ計上セリ。戰後ニ至ルモ物價ガ戰前ノ水準若クハ其二割増ノ點ニ下ラザルコトハ、想像ニ難カラザルガ故ニ、此製艦費ニ對シテハ年々物價騰貴ノ増率ヲ見込マザルヘカラズ、既ニ大正九年度ニ於テモ物價騰貴率ハ二割ノ外ニ更ニ五割ヲ加算セリ、大正十年度ニ於テモ亦然リトス、是レ大正十年度ニ更ニ追加額ヲ要求セル所以ナリ。大正十一年度後ニ至ルモ亦同シ轍ヲ踏ムベキハ之ヲ豫想スベシ、從テ製艦費ハ年々二億圓前後ニ上ルベキナリ。

以上ハ製艦費ナルガ、之ニ附随シタル經費尙多ク存ス。水陸設備費ノ如キハ其主ナルモノトス、水陸設備費トハ海軍工廠其他ノ設備ヲ擴張スルガ爲メニ支出スルモノニシテ製艦能力ノ増進ヲ圖ルモノニ外ナラズ。水陸設備費ハ、大正十年度ヨリ、工作廳設備費、防備部隊設備費、教育機關設備費、病院設備費、軍港雜設備費、航空隊設備費、無線電信所設備費、火藥廠臨時設備費、潜水學校設備費、旅順港部宿舍改築費ト共ニ水陸整備費ノ下ニ統ヘラルルコトナレリ。海軍ノ爲メニ必要ナル設備ヲ整フル經費ト見ルベシ、水陸整備費モ亦繼續費タリ。大正十年度ヨリ十六年度ニ至ル年度割ハ左ノ如シ。

年度	大正十年	同十一年	同十二年	同十三年	同十四年	同十五年	同十六年
既定額	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
追加額	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
改定額	20,000,000	20,000,000	20,000,000	20,000,000	20,000,000	20,000,000	20,000,000

製艦費ト水陸整備費ヲ加算スレバ大正十年度ニ於テ約三億四千萬圓、一般會計總經費ノ四分一弱ヲ占ム。我國ノ財政ガ之ガ爲メニ壓迫ヲ受クルコトノ如何ニ大ナルカヲ知ルベシ。

三、陸軍ニ就テ之ヲ見ルニ、佛、伊ノ如ク大陸ニ國ヲ建ツルモノト、日英ノ如キ島帝國トハ、自然ニ國防計畫ヲ異ニスベク、米國ノ如ク近隣ニ強キ國ヲ有セザルモノニ至テハ更ニ趣ヲ異ニスベシ。從テ陸軍ノ計畫ニ就テ國際比較ヲ爲スコト容易ナラズ。

我國ノ陸軍ニ於ケル國防計畫ニ就テ之ヲ見ルニ、漸次兵數ヲ増シ來テ、現在二十一箇師團ヲ擁スルニ至レルガ、日露戰爭後、國防方針トシテ定メタル二十五箇師團ノ標準ヨリ見レバ、尙理想ヲ距ルコト遠シト謂フコトヲ得ベシ。然ルニ大正七年ニハ更ニ國防計畫ヲ高メ、戰時ニ於テ四十一軍團ヲ動カシ得ルコトヲ標準トスルニ至レリ、是ニ於テ現實ト理想トノ距離ハ愈々遠クナレリ。然レドモ我陸軍ハ最近ニ於テ師團増設コソセザレ、名ヲ陸軍充實ニ籍リテ、諸種ノ部隊ヲ増設シ又ハ其ノ編制ヲ改正シ、以テ師團ノ内容ヲ擴大シ、更ニ二年兵役制ヲ實行シテ大ニ兵員ヲ増加シツ、アリ。

我國ノ陸軍ハ明治維新ニ基礎ヲ据ヘタルモノナルガ、先ツ明治四年ニ御親兵ノ外ニ東京、大阪、熊本、仙臺ニ四鎮臺ヲ置キ、同六年ニ名古屋、廣島ニ二鎮臺ヲ増設シ。同十七年ニ御親兵及六鎮臺ヲ近衛、第一乃至第六師團ニ改編シ。日清戰役後更ニ六ヶ師團(旭川、前橋、金澤、姫路、善通寺、小倉)ヲ増設シ、日露戰役後更ニ又六ヶ師團(高田、宇都宮、豊橋、京都、岡山、久留米)ヲ増設セリ。日露戰役後ニ至リ海軍ガ八八艦隊ノ方針ヲ立ツルヤ、陸軍ハ之ニ對シテ二十五箇師團ヲ完成スル策ヲ立テシガ其實現容易ナラズ、漸ク大隈内閣ニ及ンテ、朝鮮ニ二箇師團(羅南、龍山)ヲ増設シ、茲ニ二十一箇師團ヲ有スルニ至レリ。大正七年度ニハ國防計畫ヲ改メ戰時ニ於テ四十一軍團ヲ動カシ得ルコトヲ方針トセリ。陸軍當局ハ増師ノ名ヲ避ケテ實ヲ學ゲントシ、陸軍充實ヲ口實トシテ大正六年度ニハ建制ノ機關銃隊ヲ步兵騎隊ニ附シ、航空隊ヲ増設シ、山砲兵隊ノ編制ヲ改メ。大正七年度ニハ、野砲兵隊、重砲兵隊、鐵道隊、電信隊、輜重兵隊ノ編制ヲ改正シ、騎兵旅團機關銃隊、航空大隊、自動車隊ヲ新設シ、砲兵工廠ヲ擴張シ。大正九年度ニハ、要塞整理ノ計畫ヲ立ツルト共ニ之ニ伴テ重砲兵隊ヲ増シ、重砲兵隊及ビ憲兵隊ノ改編ヲナシ、又航空隊、鐵道隊、電信隊ヲ増設スルニ至レリ。又二年現役制ハ初メ步兵ニ實現シ來リシガ、次ニ砲工輜重兵ニ實現シ(大正九年)、終ニ騎兵ニ實現スルコト、ナレリ(大正十年)。又師範學校卒業生ニ係ル六週間現役制ヲ一年現役制ニ改メリ。是等ハ皆兵員増加ノ方法ナルガ、兵器ニ關シテハ大ニ充實改其ヲ圖ラントセリ。

四、陸軍ノ計畫ニ基キ其經費ヲ考フルニ、其額ハ極メテ多カラザルヲ得ズ。陸軍費ハ師團ノ經費ヲ中軸トス。兵士多クケレバ多キ程、之ニ多クノ衣糧ヲ與ヘ、多クノ兵器ヲ給セザルヘカラス、騎兵輜重兵ニアリテハ更ニ馬匹ヲ給シ、馬匹ニハ糧秣ヲ給セザルベカラズ。豫後備ノ兵ニ對シテハ、食糧ノ要ナキモ衣服兵器ハ平時ニ於テモ亦之ヲ備ヘ置カザルベカラズ。是ガ故ニ師團ノ増加ハ現役兵并ニ豫後備兵ヲ増スコトニ歸シ、其之ガ爲ニ要スル經費ハ非常ニ巨額ニ上ルベシ、殊ニ兵器ガ精銳ヲ極ムルニ至テ其經費ハ更ニ増加セズンバ已マズ。巨砲ヤたんくハ云フモ更ナリ、自動車飛行機ノ如キ、最モ多クノ經費ヲ要スルモノトス。

我國ノ陸軍ニ就テ其經費ヲ見ルニ、大正十年度ニ於テ、衣糧費、兵器馬匹費ハ八千七百萬圓ヲ超エ、將校下士ニ對スル俸給并ニ雜給ハ約七千萬圓ニ上ル、其他ノ應費ヲ合スレバ所謂軍事費ハ一億七八千萬圓ノ巨額ニ達ス。蓋シ現役兵ノ數ハ約二十五萬ニシテ、現役將校下士ノ數ハ三萬六千ヲ超ユルカ故ニ、其衣糧費、兵器、馬匹費、俸給等ノ多額ニ上ルハ自然ノ勢ナリトス。思フニ所謂師團充實ノ方針ニ依リ、兵員ヲ多クスレバ多クスル程、此等經費ハ増加シテ已マザラン。以上ハ年々ノ經常費ナルガ、臨時費トシテハ國防充實費ガ中軸ヲ爲ス、大正十年度ニアリテハ其額四千百餘萬圓ニ上ル、其主ナルモノハ航空充備費八百七十七萬圓、部隊充備費二千百餘萬圓、要塞整理費四百餘萬圓、兵器充實費四百餘萬圓、整備費二百萬圓ナリ、是レ皆世界大戰ノ教訓ニ鑑ミ繼續費トシテ協贊セラレタルモノニ屬ス。是等ノ經費ハ繼續費ヲ爲スモノナルガ、大正十年度以後ニ於テ、更ニ増加スルモノ少カラズ、殊ニ兵器充實費、要塞整理費ニ於テ然リトス。是等ノ經費ハ海軍ガ八八艦隊ヲ完成シタル後即チ大正十六年後ニ於テ大ニ増加シ來ル豫定ナリ。今大正十年ヨリ同二十四年ニ至ル迄ニ於ケル國防充備費ノ額ヲ示セバ左ノ如シ。

總額	大正九年度		大正十年		同十一年		同十二年		同十三年		同十四年		同十五年	
	航空充備費	部隊充備費	航空充備費	部隊充備費	航空充備費	部隊充備費	航空充備費	部隊充備費	航空充備費	部隊充備費	航空充備費	部隊充備費	航空充備費	部隊充備費
總計	111,155,000	211,155,000	118,777,000	218,777,000	122,500,000	222,500,000	127,118,000	227,118,000	132,732,000	232,732,000	138,346,000	238,346,000	143,960,000	243,960,000
航空充備費	9,980,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	
部隊充備費	101,175,000	201,155,000	108,777,000	208,777,000	112,500,000	212,500,000	117,118,000	217,118,000	122,732,000	222,732,000	128,346,000	228,346,000	133,960,000	233,960,000

要察整理費	五、五七、三六、九八、九八五	一〇、〇一、一八、七三、七〇一	一、七、二〇、二〇一	—	—	—	—	—	—
兵器充實費	五、五七、三六、九八、九八五	一〇、〇一、一八、七三、七〇一	一、七、二〇、二〇一	—	—	—	—	—	—
整備費	—	—	—	—	—	—	—	—	—
計	一一、一四、八八、七三、七〇一	二〇、〇二、三六、九八、九八五	三、四、四〇、四〇二	—	—	—	—	—	—

以上ハ大正十年度迄ニ於ケル計畫ニ過ギズ、若シ夫レ四十一軍團ノ理想ヲ實現セントセバ、是等ノ國防充備費ハ非常ニ巨額ニ達セン、試ニ航空充備費ニ就テ考ヘンニ、四十一軍團ヲ動かス日アリトセバ、飛行機ハ少クとも二千四百機ナカルベカラズ、而シテ飛行機ノ平均命數ハ驟遂用ニアリテハ二ヶ月其他ニアリテハ三ヶ月ニ過ギズ、故ニ飛行機ハ年々補充スルヲ要ス、二千四百機ヲ維持セントセバ一年一萬一千三百餘臺ヲ製作セザルベカラズ、而シテ一臺ノ製作費ハ二萬圓ヲ要スルガ故ニ一年ノ製作費ニ億二千萬圓ニ上ルベキナリ。更ニ飛行機ニ至リテハ一時間千圓ヲ要スルガ故ニ一日二時間トシテ計算スルモ、毎日二千四百臺ヲ飛行セシムレバ一年間ニハ十七億餘萬圓ヲ要スベシ、コハ飛行機ヲ理想的ニ多クシタル場合ニ於ケル計算ナルガ今日ノ航空充備費ハ之ニ向フ初一步ニ過ギズ、又以テ陸軍費ガ如何ニ膨脹スベキカチ有スルカチ見ルベシ。

以上論ズル所ニ依テ之ヲ觀レバ我國ノ國防費ハ將來長ク我財政ヲ壓セズンバ已マズ、我財政ガ國防費ヲ中心トシテ廻轉スル所以ヲ知ルベシ、

第二款 法務費 (Ausgaben für die Durchführung des Rechtszwecks)

一、現今ノ文化國ハ皆法ヲ以テ國ヲ治ム、何レノ政務モ殆ト法ノ適用ナラザルハナシ、故ニ内治ニ關スル經費ハ法務費ト稱スルコトヲ得、啻ニ内治ニ關スル經費ノミナラズ、外交ニ關スル經費モ亦法務費ト稱スルコトヲ得ザルニアラズ、蓋シ外交官ハ國際法ニ依リテ國際事件ヲ處理

シ領事官ハ國內法ニヨリテ或ハ戶籍吏ノ事務ヲ司リ、或ハ領事裁判ヲ行フコトアルヲ以テナリ、然レトモ茲ニ謂フ法務費ハ猶狹義ニ解シ所謂法律目的 (Rechtszweck) ノ爲ニスル經費トシ福利目的 (Wohlfahrtszweck) 文化目的 (Kulturzweck) ノ爲ニスル經費ト區別セサルベカラズ。

法律目的ノ爲ニスル經費トハ公共ノ安寧秩序ヲ維持スルカ爲ニスル經費ナリ、蓋シ社會生活ヲ爲スニ當リ一人カ他人ニ對シテ不正ノ行爲ヲ爲シ又ハ暴力ヲ加フルコトアルニ之ヲ防クコト能ハスンハ共同生活ノ安固ハ得テ期スベカラズ、故ニ國家ハ此不正行爲并ニ暴力ニ對シテ人民ヲ保護セザルベカラズ、今日ノ語ヲ以テ云ヘハ法ヲ立テ公共ノ安寧秩序ヲ維持セサルベカラズ、公共ノ安寧秩序ヲ維持スルハ人民ノ生命財產ヲ保護スル所以ニシテ、又社會生活ヲ防衛スル所以ナリ、故ニ學者或ハ法務費ヲ社會防衛費ト云フ。

公共ノ安寧秩序ヲ維持セントセハ、人民ノ爭議ヲ決シ各人ヲシテ權利ヲ行ヒ義務ヲ果サシメサルベカラサルト同時ニ暴力ヲ制シ不穩ノ處置ヲ爲スモノヲ制セザルベカラズ、前者ノ爲ニ司法存シ後者ノ爲ニ警察存ス、今日ノ文明國ニ於テ警察權ノ行使ハ警察法規ノ運用ニシテ司法權ノ行使ハ私法并ニ刑法ノ適用ニ外ナラズ、是等ノ法規ガ巧ニ運用セラレ適用セラルルニ於テハ、個人ノ生命財產ハ安全ニ保護セラレ、個人ハ其堵ニ安スルコトヲ得テ圓滿ナル社會生活ヲ遂グルコトヲ得ベシ、故ニ警察并ニ司法ハ社會自存ノ根本條件ニシテ又社會發達ノ出發點ナ

リ。

二、警察并ニ司法ハ初メヨリ國家當然ノ職分ト認メラレシニアラズ、昔ハ私人又ハ其團體ガ之ニ當リシコトアリキ、其後次第ニ國家當然ノ職分ト認メラルルニ至リテモ國家ガ之ヲ獨占セズ或ハ之ヲ下級公共團體ニ委ネ或ハ之ヲ私團體ニ任カセシコトアリキ、今日ハ原則トシテ國家當然ノ職分ト認メラルルナリ。

社會防衛ガ國家當然ノ職分トナリタル後ト雖モ、此職分ヲ行フ國家ノ官吏ハ國家ヨリ十分ナル俸給ヲ得ズ却テ其行爲ニ對シテ個人ヨリ報酬ヲ得タリキ、殊ニ司法事務ニ於テ然リトス、是レ實ニ手数料ノ前身ナリ、然レトモ此ノ如キ時代ニハ其官吏ニ對スル俸給ハ少ク從テ社會防衛ノ經費モ亦少キヲ得タリキ、然ルニ國家觀念ノ進ムニ從ヒ官吏ガ國家ノ職分ヲ行フニ對シテ自ラ報酬ヲ得ルコトヲ許ササルニ及デ官吏ニハ相當ノ俸給ヲ與フルコトトナリ、社會防衛費ハ大ニ増加シ來レリ。

三、司法ニ關スル經費ハ之ヲ司法費トス、司法ハ民事ノ裁判ヲ主眼トス、裁判ハ其初ニ當リテハ慣習法ニ依リ部落會議ニ於テ之ヲ決セシモノノ如シ、其會長ノ權力確立スルヤ、會長ハ裁判官トナリシモ爭議ノ當事者ハ自由意思ニ依テ之ニ從ヒシガ、後國家ノ發達ニ伴ヒ裁判ニ強制力ヲ附スルニ至レリ、是レ主權ノ作用ノ當然ナル歸結トス、既ニ裁判ニ強制力ヲ附スル以上ハ

其裁判ハ愈々公平ナラサルベカラズ、從テ裁判官ハ法律ニ通スルノミナラズ又他ノ勢力ニ依テ動かサレザルモノタルヲ要ス、是ニ於テカ裁判所ノ組織アリ。

司法ハ裁判ヲ生命トスレトモ、判決ガ實際ニ行ハレサルトキハ裁判ハ其意義ヲ失フ、故ニ司法ハ裁判ヲ爲スト共ニ之ヲ執行セサルベカラズ、之ヲ裁判ノ延長ト云フモ不可ナシ、是ニ於テカ判決執行ノ機關アリ、監獄署ノ如キ即チ是ナリ。

司法費ハ裁判所監獄署等ノ經費ヲ包括ス、裁判所費ハ裁判所組織如何ニ依テ大ニ異レトモ大體ニ於テ世ノ進歩ニ伴レテ膨脹スベキモノトス、昔ハ法三章ヲ約シテ以テ天下ヲ治ムルコトヲ得タリシモ、今ヤ則チ然ラズ、年々歳々法律ハ新ニ制定セラレ、年々歳々判例ハ更ニ増加シ來ルガ故ニ有能ナル裁判官ヲ得ズンバ公平ナル處斷ヲ爲スコト能ハサルナリ、加之人口増殖シ交通取引繁キヲ加フルニ至テハ裁判所ノ數ヲモ増ササルベカカラズ、是レ裁判所費ノ膨脹セサルベカラサル所以ナリ。

監獄署費ハ起訴并ニ刑罰ノ主義制度ノ變スルニヨリテ大ニ異ル、一方ニ微罪不檢擧、執行猶豫等ノ制度ノ行ハルルニ從ヒ經費ハ減スルカ如ク見ユルモ、他方ニ流刑ノ廢ルルニ從ヒ、死刑宣告ノ少クナルニ從ヒ尙進テハ死刑制度ノ廢止セラルルニ伴ヒ監獄署費ハ次第ニ膨脹シテ已マズ、人道主義ニ基ク監獄署改良ガ企テラルレハ企テラルル程、其設備ヲ完美シ犯人ノ食物其他

生活必需品ノ給與ニ十分ノ注意ヲ拂フニ至ルガ故ニ監獄署費ハ愈々増加シテ已マザルベシ。殊ニ常習犯人ガ監獄署ヲ以テ第一ノ故郷トナスニ至テ甚シトス。此ノ如クシテ司法費ハ時ノ進ムニ從テ益々増加スルナリ。

四、警察ニ關スル經費ハ之ヲ警察費トス。蓋シ國家一日モ秩序ナカルベカラズ、若シ秩序ガ破レン乎、直ニ之ガ恢復ヲ圖ラザルベカラズ、從テ警察ノ制ハ自然ニ生ジ來ラザルヲ得ズ。昔ハ警察ノ制十分ニ整ハズ、各人或ハ自ラ護リ、或ハ小組合ニ依テ防衛ノ術ヲ講ズルコトアリシガ、今ヤ則チ然ラズ、何レノ國家モ進ンデ專ラ警察ノ任ニ當ラザルハナシ。故ニ個人ノ生命ニ迫害ヲ加フルモノアラバ警察ハ之ヲ救ハザルベカラズ。又昔ハ財産ト云ヘバ不動産ヲ主ナルモノトセシガ故ニ財産ニ對スル侵害ハ左程重大視スルニ及バザリシモ、今ヤ財産ト云ヘバ動産ヲ多シトスル時代ナルガ故ニ、財産ニ對スル犯罪ハ容易トナリシノミナラズ、交通ノ便大ニ開ケ來レル爲メ、又其罪跡ヲ晦ラマスコトモ困難ナラザルニ至レリ、警察ハ犯人ヲ逮捕スルニ敏活ナラザルベカラズ。又今ハ昔ト異リテ人口モ多ク群衆的運動モ盛トナレルガ故ニ警察ハ群衆ノ暴行ニ備ヘザルベカラズ。

此ノ如キハ今日ノ國家ガ警察ニ待ツ一例ノミ、亦以テ警察力が大ナラザルベカラザルノミナラズ、津々浦々迄周カラサルベカラサル所以ヲ知ルベシ、警察力ガ津々浦々迄周カラシニハ警察費ハ勢ヒ巨額ニ上ラサルベカラサルガ、又同時ニ獨リ國庫ニ於テ支辨セズ、地方ノ分擔スル所トナルベキナリ。

第三款 民福増進費 (Ausgaben für die Durchführung des Wohlfahrtszwecks)

民福増進費トハ福利目的 (Wohlfahrtszweck) ノ爲メニスル行政ノ經費ナリ、民福増進ハ種々ノ方法ニ依リテ之ヲ期スルコトヲ得ルモノナルガ、國民ノ經濟ヲ進捗セシムルヲ以テ其主ナルモノトス、故ニ之ヲ經濟行政費ト云フモ不可ナシ。

國民ノ經濟ヲ進捗スルニハ第一ニハ廣ク生産交易ヲ進メサルベカラズ、第二ニハ分配ヲ調和セサルベカラズ。生産交易ヲ進ムルノ方法ハ大體ニ於テ二トスベシ、個人ノ生産交易ニ關スル行爲ヲ監督シ保護シ獎勵スルハ其一ナリ、國家ガ自ラ營造物其他ノ設備ヲ供シ國民ノ利用ニ任カシ或ハ自ラ進テ之カ經營ノ任ニ當ルハ其二ナリ、前者ハ主トシテ農工商ニ關スルカ故ニ、之カ爲ニ要スル經費ハ勸業費ト名クベク、後者ハ主トシテ公企業ニ關スルカ故ニ之カ爲ニ要スル經費ハ營造物費并ニ公企業費ト名クベシ、分配ヲ調節スルハ所謂社會政策ノ實行ナリ、之カ爲メニ要スル經費ハ之ヲ社會政策費若クハ社會立法ニ關スル經費ト云フコトヲ得ベシ。

此クシテ民福増進費ハ大體ニ勸業費、營造物費并ニ公企業費、社會立法ニ關スル經費トスルコトヲ得。以下此二者ニ就テ略説スベシ。

第一項 勸業費

農工商ニ關スル行政ハ二方面ニ存ス、其一ハ消極方面ニシテ其二ハ積極方面ナリ。

一、消極方面トハ農工商其他經濟全般ノ發達ヲ期センガ爲メニ、其之ヲ害スルノ虞アルモノニ備フルヲ云フ、蓋シ個人ハ動モスレハ目前ノ利ニ走リテ國民經濟永遠ノ利益ヲ害スルモ之ヲ顧ミルニ遑アラザルコトアリ、國家ハ之ヲ放任スベカラズ、國民經濟ノ將來ノ發達ヲ期スルト云フ見地ニ立テ進テ之ヲ擁護スルノ策ヲ探ラサルベカラス。例ヘハ氣候ヲ調和シ、水害ノ豫防ヲ爲シ植林ヲ爲シ保安林ヲ定メ、沼池ノ排水ヲ爲スカ如シ、國家ハ之ニ由テ天然ノ富源ヲ保全スルコトヲ得ベシ。

二、積極方面トハ國家ガ生産交易ノ發達ヲ助クルカ爲ニ直接ニ獎勵シ保護シ誘導スルヲ云フ、農工商ノ各産業ニ亘テ之ヲ見ル、從テ各産業ニ就テソレソレ經費ヲ生ス。

(1) 農業ニ關スル經費。農業ハ多クノ國ニ於テ主要ノ産業ナリ。經濟ノ發達スルニ從ヒ、農業國ヨリ商工業國ニ進ムハ自然ノ勢ナリト雖トモ、商工業國ニ進メバトテ農業ヲ要セサルニアラス、商工業國ハ農業ノ生産ニカ、ル原料并ニ食料ヲ得テ初テ成立シ發達スルモノナレハナリ

殊ニ軍國多事ノ秋ニ際シテ食料品ヲ供給スル農業ノ健在スルモノナクンハ如何ニ多クノ軍隊ヲ擁スルモ兵士野ニ飢エテ亦如何トモスベカラザラン、殷鑑遠カラズ、今回ノ世界戰ニ在リ、故ニ農業ヲ維持スルハ進歩セル商工業國ニ於テモ亦必要ナリト云ハサルベカラズ。

農業ノ發達ヲ期セントセバ、國家ハ種々ノ方法ニ於テ之カ保護獎勵ヲ爲ササルベカラズ、或ハ農業教育ヲ盛ニシ、或ハ耕作ノ機械器具發明ニ獎勵金ヲ與ヘ、或ハ家畜并ニ植物ノ病疫傳染豫防ヲ爲シ、或ハ農事試驗場ヲ設クルカ如シ、此等ノ爲ニ費ス經費ハ次第ニ多キヲ加フルナリ。

(2) 工業ニ關スル經費。工業ニ關スル經費モ亦文明國ノ豫算ニ於テ重要ノ地位ヲ占ム、其經費ハ單ニ工業教育ヲ進ムルコトニ由テ生スルノミナラス、アラユル手段ニヨリテ直接ニ工業ヲ保護獎勵スルニ由テ生ス、産業權ノ保護、度量衡ノ檢定等ニ關シテ支出スル經費ノ如キ其一ナリ、工業ニ關スル試驗所研究所ヲ設ケ、工業品ノ輸出檢定ヲナスニ因テ生ズル經費ノ如キ亦其一ナリ、國ニ依テハ特殊工業ノ維持發達ヲ期スル爲ニ輸出獎勵金ヲ下附シ又ハ特別ノ利益ヲ與フルモノアリ、是レ工業品ヲ海外市場ニ於テ特ニ廉價ニ販賣シ得ル一因トモナルベク、Dumpingノ起ル所以ナリ、之ヲ工業ニ關スル重要ナル經費トス。

(3) 商業ニ關スル經費。商業ノ爲ニスル經費モ亦種々アリ、商業ヲ盛ニセントセバ、商品并

ニ其商品ノ販路ニ關スル智識ヲ擴メサルベカラズ、是ニ於テ各國ハ商業教育ニ力ムルノミナラズ、或ハ領事商務官ノ報告ヲ出版シ或ハ商品陳列館 (Handelsmuseum) ヲ設ケ畫策至ラサルナシ、是等ニ由テ生ズル經費ハ次第ニ多キヲ加フ。

(4) 以上ハ農工商ニ關スル經費ヲ別々ニ觀察セルガ、尙全般ニ亘リテ考フルニ、國家ハ國民經濟ノ實狀ヲ明ニスルカ爲ニ、經濟統計ヲ作ルノ必要アルベシ、故ニ文明國ニ於テ人口調査ヲ爲ス外、職業調査ヲ爲スヲ怠ラス、其調査ニ依テ農商工業カ如何ニ進ミツツアルカ、換言セハ勞働者カ如何ナル產業ニ集リツツアルカ、原動力ガ如何ニ増シツツアルカ、生産額ハ如何ニ高マリツツアルカ、生産ハ以テ自國ノ消費ニ充ツルニ足ラサルカ、若クハ之ニ反シテ剩餘ヲ生シテ苦シミツツアルカ、企業ノ規模ハ如何ニ變シツツアルカヲ知り得テ、以テ一國ノ經濟政策ヲ立ツルニ資スルコトヲ得。此ノ如キ調査ヲナシ且ツ統計ノ編製ヲナスニハ少カラサル經費ヲ要スベシ、サレトモ、國家ガ經濟ノ進歩發達ヲ計ルカ爲ニ政策ヲ立テントセハ又已ムヲ得サルノ經費ト云ハサルベカラズ。

農商工ヲ保護獎勵スル爲メニハ大國ニ於テハ特別ノ省ヲ置ク或ハ農商務省ヲ以テスルアリ或ハ農務省ト商務省トヲ分立セシムルアリ、茲ニ所謂農商工ニ關スル經費ハ前者ニ於テハ農商務省費ニ該當シ後者ニ於テハ農務省費商務省費ニ該當ス。

第二項 營造物并ニ公企業ニ關スル經費、

經濟ノ發達ヲ期セントセハ、アラユル設備ヲ完全セサルベカラズ、然ルニ設備ニヨリテハ非常ニ巨額ノ資本ヲ要シ、而モ何等ノ報酬ヲ得サルモノアリ、又之ヲ得テモ十分ナラサルモノアリ、此ノ如キモノハ、私人ガ進テ之ヲ起スコトナカルベキカ故ニ國家ハ營造物トシテ之ヲ供シ又ハ公企業トシテ之ヲ經營セサルベカラズ、是ニ於テ營造物并ニ公企業ニ關スル經費ヲ生ス、國家カ營造物トシテ提供シ又ハ公企業トシテ經營セサルベカラサルモノハ種々アレトモ、其最モ主要ナルモノヲ交通運輸ニ關スル機關并ニ設備トス、人道車道ノ陸路ヲ造リ、橋梁ヲ架シ鐵道ヲ敷設シ、港灣ヲ築キ、運河ヲ開キ、河川ヲ修ムルカ如キ是ナリ。

人道車道ヲ造リ橋梁ヲ架スルカ如キハ、私人之ヲ企テ得サルニアラサレトモ爾カスルトキハ通行料ノ徵收ヲ許ササルベカラズ、是レ交通自由ノ妨碍タラズンハアラス、故ニ是等ノ交通路ハ國家又ハ公共團體ニ於テ之ヲ供ヘサルヘカラス。運河ハ内地航行又ハ航海ノ上ニ於テ重要ナルモノナレトモ、私人ニ任ストキハ、容易ニ之ヲ企ツモノナカルベク、假令之ヲ企ツモ高キ使用料ヲ徵スベケレハ一般經濟ノ發達ヲ妨クベシ、故ニ國家ハ自ラ進テ之ヲ開整セサルベカラズ。港灣ヲ築キ、河川ヲ浚濬スルモ亦同シ。

鐵道ハ之ヲ敷設スルニ巨額ノ資本ヲ要ス、故ニ交通ノ極テ頻繁ナル所ニアラサレハ私人ノ進

テ之カ敷設ニ當ルモノナシ、然ルニ鐵道ハ交通ノ血脈トシテ隅カラ隅迄ニ行キ渡ラシメサルベカラス、一地方ヲ交通上孤立セシムルハ國民經濟ヲ發達セシムル所以ニアラサレハナリ、故ニ國家ハ自ラ計畫ヲ立テ、鐵道網ヲ完成スルニ力メサルベカラス、是ニ於テ鐵道モ國有トシ國營トセサルベカラズ、此見地ヨリスルトキハ、鐵道ハ他ノ陸路又ハ水路ト異ル所ナキカ如シト雖トモ、鐵道ニ於テハ、運輸ヲ爲ス毎ニ汽車ヲ動かササルベカラサルガ故ニ運搬費ヲ要シ、經營上多少異ル所ナキヲ得ズ。又人口増加シ交通發達スルニ從ヒ、鐵道ノ收入モ多クナリ行クカ故ニ、鐵道ノ經營ハ收入ヲ得ルコトヲモ考慮セサルベカラズ。現今文明國ノ國有鐵道經營ノ實際ヨリ云ヘハ、鐵道ヲ以テ收入ヲ齎ラス一財源ト見做ス、從テ鐵道ニ關スル經費ハ官營費ヲ形クルナリ。

先進國ニ於テハ是等ノ事務ニ關シテ、特別ノ省ヲ置クモノアリ、土木省或ハ公企業省ノ如シ是等ノ國ニ於テ土木省費又ハ公企業省費ハ大體ニ於テ、茲ニ所謂營造物并ニ公企業ニ關スル經費ニ該當ス、我國ニ於テハ土木省又ハ公企業省ナシ前ニ述ヘタルカ如キ事務ハ主トシテ遞信省ニ於テ之ヲ司ル内務省ニ於テモ之ヲ司ルモノナキニアラズ、鐵道ニ至テハ鐵道院ノ事務ニ屬ス、故ニ茲ニ所謂營造物并ニ公企業ニ關スル經費ハ主トシテ遞信省費鐵道院費ニ該當スレトモ、他ニモ散見スト云ハサルベカラズ。

第三項 社會立法ニ關スル經費

社會立法ニ關スル經費トハ分配ヲ調節セントスルカ爲メニ爲ス行政ニ關スル經費ナリ、社會立法ノ中心點ハ、經濟上ノ弱者即チ勞働者ヲ保護シ其地位ヲ確保セントスルモノナレハ社會立法ニ關スル經費モ亦勞働者ノ地位ヲ高メンカ爲メニ爲ス行政ノ經費ヲ主ナルモノト見ルベキナリ。

一、勞働者ヲ保護シ其地位ヲ確保セサルベカラザルハ、資本主義ノ盛ナル現代ニ於テハ絕對ニ必要ナリトス。蓋シ資本家ハ動モスレバ目前ノ利ニ走リテ心ヲ國家百年ノ將來ニ馳セス、漫ニ幼少年婦女ヲ酷使シ其身體ヲ弱メ其精神ノ發育ヲ妨テ顧ミス、工場ノ設備カ衛生ニ適セサルモ亦敢テ頓着セズ、是ニ於テ先進國ハ、夙ニ工場法ヲ設ケ勞働者ヲ保護スルコトヲ努ム、而モ其實ヲ舉クルニハ十分ニ工場ノ監督ヲナササルベカラズ、是ニ於テ工場法ノ存スル國ニハ工場監督官ヲ置カサルハナシ、此クシテ工場法施行ノ爲ニ少カラサル經費ヲ必要トス、是レ社會立法ニ關スル經費中、重要ナルモノノ一ナリ。

二、現代ノ資本主義ノ世ノ中ニ於テハ勞働者ハ事實勞働ヲ賣リテ衣食シ、多クハ資本家ノ地位ニ上リ得サルモノトス、故ニ一朝疾病ニ罹レハ衣食ノ資ヲ得ルニ窮スベク、老テ勞働ニ堪ヘサルニ至レハ、飢渴ヲ免ルルコト能ハサルベク、一ヒ死スルヤ、家族ハ路頭ニ迷ハサルヲ得サル

ベシ、此労働者ヲ脅カス危険ハ可成之ヲ取り除カサルベカラズ、是ニ於テ労働保險ノ制ヲ生ズ、労働保險ノ制ハ一八八三年獨逸ノ創始セシ所、今ヤ諸文明國モ亦漸ク之ニ倣ハントス。然ルニ労働保險ヲ實行セントセハ國家ハ巨額ノ經費ヲ支出セサルベカラズ、是レ社會立法ニ關スル經費中、重要ナルモノノ一ナリ。

三、労働者ノ中ニハ労働シ得サルモノアリ、労働シ得ルモノヲ欲セサルモノアリ、労働ヲ欲スルモ其機會ヲ得サルモノアリ、社會立法ハ是等ノ労働者ニ對シテ一々其所ヲ得セシムルコトヲ期セサルベカラズ。即チ

(1) 労働シ得サルモノハ之ヲ救ハサルベカラズ、是ニ於テ救貧費ヲ生ス。

(2) 労働シ得ルモノヲ欲セサルモノニ對シテハ、労働ヲナス様ニ導カサルベカラス、労働シ得ルモノヲ欲セサルモノハ不良少年、乞食ノ徒ナリ、故ニ國家ハ不良少年ヲ感化シ乞食ヲ労働ニ就カシムルコトニ力メサルベカラズ。

(3) 労働ヲ欲スルモノ之ニ就クノ機會ヲ得サルモノニ對シテハ國家又ハ公共團體ハ労働紹介ヲ爲シ又ハ自ラ公企^業ヲ營ミテ之ニ職ヲ與ヘサルベカラズ、

此ノ如クシテ救貧費ヲ生シ、感化費ヲ生ジ、労働紹介費ヲ生シ其他労働ニ就カシムル爲メノ諸種ノ經費ヲ生ス、是レ社會立法ニ關スル經費中、重要ナルモノノ三ナリ。

以上ハ社會立法ニ關スル經費ノ重ナルモノニ就テ云ヘルノミ、貧富懸絶ノ勢益々甚クナリ社會政策ノ必要更ニ切ナルニ從ヒ社會立法ハ愈々多キヲ加ヘ此種ノ經費ハ益々膨脹シテ已マサラントス。

社會政策ノ實行ニ關シテハ特別ニ一省ヲ設クモノナキニアラズト雖トモ、多クノ國ニ於テハ獨立ノ省ヲ置カズ我國ニ於テモ亦然リ、我國ニ於テハ社會立法ハ未タ端緒ヲ開ケルニ過キズ、社會立法ニ關スル經費ハ未タ大ナラス只農商務省費、遞信省費、内務省費中ニ散見スルノミ然レトモ將來大ニ膨脹シ來ルハ疑ヲ容レス、

第四款 文化費 (Ausgaben f. Unterricht u. Kultus)

文化費ハ教育學藝并ニ宗教ニ關スル經費ナリ、此種ノ經費ハ國ニ依リ時代ニ依リ大ニ異ル、蓋シ教育并ニ宗教ニ關スル國家ノ政策ニ變動ヲ生スレハナリ。

一、教育費ハ其昔ニアリテハ殆ト見ルニ足ルモノナカリキ、其故何ソヤ曰ク他ナシ、其當時國家ハ教育ヲ以テ國家當然ノ職分トセサリシヲ以テナリ、蓋シ昔シノ君主ハ多ク黔首ヲ愚ニスルノ方針ヲ採リ、民ハ依ラシムベク知ラシムベカラズトセシカバ、民ヲ教育スルコトヲ欲セサリシナリ、甚シキハ佛國ノ君主專制時代ニハ皇太子ヲ教育スレハ足レリトスルモノスラアリキ、

其一步ヲ進テ民ヲ教育スルコトヲ許スモノニアリテモ、國民ノ一般ニ普カラスシテ、之ヲ一定ノ階級ノミニ限り、而モ國家自ラ之ニ任セズシテ多クハ私人ニ委テリ、然リ而シテ其教育ト云ヘハ古代ノ學藝ヲ授クルヲ以テ趣旨トシ、東洋ニアリテハ孔孟ノ教ヲ究メ、西洋ニアリテハ希臘羅馬ノ學ヲ修ムルニ外ナラズトセシカ故ニ、一國民智ノ程度ハ極テ卑キヲ免レサリシナリ。

1 今日ノ國家ハ昔時ノ國家ト異リ民智ヲ開發スルコトヲ以テ治國ノ第一要義トス、其故他ナシ、蒙昧ナル人民ヲ以テシテハ國力ヲ進メ富力ヲ増スコト期シ難キノミナラス立憲政治モ圓滿ニ之ヲ行フコト能ハサレバナリ。既ニ民智ヲ開發スルヲ以テ治國ノ第一要義トセハ國家ハ進テ教育ノ爲ニ畫策スル所ナカルベカラズ、而シテ其教育モ一階級ニ偏セズ、國民全般ニ普ク行キ亘ラシメサルベカラズ、是ニ於テ今日ノ文明國ニ於テハ多ク初等教育ハ國民ノ義務教育トシテ、之ヲ一般ニ強制ス、強制ト云ヘハ自由ヲ制限スルカ如ク見ユレトモ、亦已ムヲ得ズ、若シ之ヲ自由ニ放任スルトキハ蒙昧ナル父母ハ自ラ其子ヲ教育スルヲ知ラスシテ其子ヲモ亦愚昧ナルモノトシテ怪マサルベケレバ國家ハ社會全體ノ利益ノ爲メニ之ヲ座視スルコト能ハサレハナリ、既ニ國民教育ヲ強制セハ其教育ハ原則トシテ無月謝タラサルベカラズ、若シ月謝ヲ徵セハ貧民ハ其子弟ヲ學校ニ送ルコトヲ肯セサルヘケレハナリ、*Où il n'y a rien, le roy perd son droit* トハ佛人ノ既ニ古ニ於テ道破セシ所ナリ、此ノ如クシテ國家ハ無月謝ニテ學校ヲ維持セ

サルベカラズ、月謝ヲ徵セズシテ學校ヲ維持セントセハ勢ヒ巨額ノ經費トナラサルヲ得ズ、是ニ於テ國ニ依テハ此原則ヲ認メ乍ラ財政難ノ爲メニ之ニ例外ヲ設ケテ月謝ヲ徵ス、尤モ多クノ國ニアリテ是等普通教育ハ之ヲ地方團體ニ委ヌルカ故ニ其教育費ハ地方費ヲ形クルヲ常トス、然レトモ地方費トナレルカ爲メニ如上ノ理論ニ變更ヲ見ルコトナシ。

普通教育ハ一般人民ヲ向上セシメ生産ヲ盛ニシ經濟上ノ發達ヲ助クルコト少シトセサルガ、又之カ爲ニ貧民ハ其自己ノ地位ヲ自覺シ、社會ニ對スル不平ヲ増シ、爲ニ社會問題ヲ惹起シ又政治上ニ於テハ民衆政治ノ弊ヲ大ナラシムルコト亦少シトセズ、然レトモ、コハ形ニ伴フ影ノミ、影ノ黒キヲ見テ形ヲモ呪フベカラサルナリ。

2 中等教育高等教育ニ至テハ固ヨリ之ヲ總テノ國民ニ義務的ニ課スベカラズ、然レトモ國家ガ人智ノ開發ヲ要求スルナラバ國民教育ヲ終ヘタルモノニ更ニ高等ナル普通教育ヲ施スコトニモ力メサルベカラズ、是ニ於テ中學ノ設備アリ。然レトモ國家ハ中學教育ニ於テ之ヲ獨占スルノ要ナケレハ私設ヲモ許スベキハ論ナキ所トス、何レニセヨ國家カ中學ヲ建テ之ヲ維持スル以上ハ之カ爲ニ要スル經費ハ少シトセサルナリ。

中學教育ハ多クノ國ニ於テ府縣等ノ地方團體ニ委ヌルヲ例トス、從テ其經費ハ府縣費ヲ形クルナリ、然レトモ國ニヨリテハ國庫ガ少カラサル補助ヲ爲スモノアリ。

3 大學ハ學術ノ蘊奧ヲ窮ムル所ナレハ一國ノ文化ノ中心トナルベキモノナリ、故ニ國家ハ大學ヲ設立シテ文化ノ向上ヲ計ラサルベカラズ、然レトモ大學教育ハ必スシモ國家カ之ヲ獨占スルヲ要セス、私人ノ之ヲ企ツモノアラハ固ヨリ之ヲ許ササルベカラズ、只大學設備ハ巨額ノ經費ヲ要スルカ故ニ私人如何ニ志篤シト雖モ私資ヲ以テ之ヲ經營シ得ベカラズ、偶々富豪ガ巨萬ノ資ヲ投シテ之ヲ寄附スル場合ニ於テ完全ナルモノヲ得ルニ過キズ、米國大學ノ如キ即チ是ナリ、然レトモ斯ノ如キ寄附ハ常ニ存スルモノニアラス、故ニ國家ハ自ら進テ大學ヲ起シ又之ヲ維持セサルベカラズ、是ニ於テ大學ノ經費ガ國家豫算ノ上ニ重要ナルモノトナリテ現ハルナリ。

4 近世ノ國家ハ何レモ商業學校工業學校其他ノ專門學校ヲ起スコトニ怠ラス、蓋シ近世ノ國家ハ經濟上ニ於テ大ニ争ハントスルカ故ニ專門ノ技術ニ長スル人ヲ要スルコト切ナレバナリ、現ニ是等ノ學校ノ能ク整ヘル國ハ、經濟上ニ於テ發展シテ己マズ、獨逸ノ如キ其好例ナリ、故ニ學校教育ヲ私人ニ任スベシトスル國ニ於テモ、近頃ニ至テ識者漸ク長夜ノ眠ヲ醒マシ專門教育殊ニ工業教育ノ緊切ナルコトヲ説キ國家自ら先シテ之ニ任セサルベカラズト切論スルモノアルニ至レリ、亦以テ世界ノ文明諸國カ相競テ此種ノ專門教育ニ熱中スルノ情ヲ知ルベシ、是レ亦教育費ノ膨脹スル一因タラスンハアラズ。

二、高等教育ニ關スル學校ハ同時ニ學藝ノ蘊奧ヲ究ムルコトヲ趣旨トスルカ故ニ國家ハ教育ノ振興ト共ニ學藝ノ獎勵ヲナシ得サルニアラズ、然レトモ、學藝ノ獎勵ハ又學校教育ヲ離レテ之ヲ企テ得ベシ、學術研究所ヲ設ケテ専ラ學者ノ研究ニ資シ、博物館、美術館、圖書館ヲ設テ庶民ノ智識ヲ開キ、藝術ノ作品ニ關スル展覽會ヲ開キテ、間接ニ作家ヲ激勵スルカ如キ其方法タリトス、此ノ如クニ現今ノ文明國ガ學藝美術ノ爲メニ苦心スルコトモ亦決シテ少カラズ、從テ藝術獎勵費ナルモノヲ生ズ。

三、宗教ニ關スル經費ハ何レノ國ニ於テモ今日多少之ヲ存セサルナシ、只此經費ハ昔ニ於ケルカ如ク重要ナラサルノミ、蓋シ今日ノ文明國ハ皆信教ノ自由ヲ認メ深ク宗教ノ事ニ立チ入ラサレバナリ、獨リ國教ヲ存スル國ニアリテハ國教ニ關スル寺院ヲ維持スルガ爲メニ巨額ノ經費ヲ投スルモノアリ、之ヲ寺院費トス。國教ヲ存セサル國ニアリテモ苟クモ寺院カ存シ宗教カ存シ人民カ之ヲ信仰シツツアル以上ハ國家ハ全ク之ト没交渉タルコト能ハズ國家ハ人ノ靈的生活ニ入リテ干涉スルコトヲ得サレトモ其形式ノ上ニ於テ之ヲ監督シ得サルベカラズ、殊ニ寺院等ノ行爲ニ於テ然リトス、故ニ何レノ國ニ於テモ宗教ニ關スル經費ヲ存スルナリ。

第三節 財 務 費

(Ausgaben der Finanzverwaltung)

財務費トハ國家カ政務ヲ執行スルニ必要ナル經費ヲ支辨センカ爲ニ收入ヲ得ル場合ニ之ニ附隨シテ起ル經費ナリ、故ニ財務費ハ政務費ニ相對スルモノトス。

一、財務費ハ之ヲ大別シテ四トナス、徴收費、經營費、出納費、公債費是ナリ。

(a) 徴收費トハ國家公共團體ノ公經濟的收入ヲ得ル爲メニ要スル經費ヲ云フ、徴稅費ヲ以テ最モ重ナルモノトス。

(b) 經營費トハ國家カ私經濟的收入ヲ得ンカ爲メニ財産ヲ管理シ若クハ事業ヲ經營スルニ要スル經費ヲ云フ、官有ノ土地森林鐵山ニ關スル經費、官工商業ニ關スル經費、鐵道其他交通機關ノ經營ニ要スル經費等ノ如キ之ニ屬ス。

(c) 出納費トハ現金出納保管計算等ノ事務ニ要スル經費ヲ云フ、豫算決算ニ關スル經費ヲモ包括ス。

(d) 公債費トハ公債ノ利拂并ニ元金償還ニ要スル經費ヲ云フ、公債ノ種類性質ニヨリテハ償還ハ年々之ヲ必要トセサルモ利拂ハ歳々之ヲ繰返サザルヘカラズ。

二、財務費ノ中ニ是等ノ區別ヲ爲スコトハ極テ重要ナリ、殊ニ各國ノ經費ヲ比較セントスル時ニ於テ然リトス。

經營費ニ就テ之ヲ見ルニ私經濟的收入多キ國ニアリテハ頗ル巨額ニ上ルベク、然ラサル國ニ在

リテハ其額極メテ少シ。從テ前者ニアリテハ總經費多キモ本來ノ政務費ハ必ズシモ左程多カラザルコトアルベク、後者ニアリテハ總經費ノ割合ニ本來ノ政務費多キコトアルベキアリ。故ニ經費ノ國際比較ヲ爲サントセバ經營費ヲ斟酌セザルベカラズ。

徴收費ニ就テ之ヲ見ルニ、租稅制度ノ如何ニ依リ若クハ徴收方法ノ如何ニ依ツテ其額ヲ異ニスベシ、從テ徴收費ハ一國ノ總經費ヲ形クルニ於テ影響スル所少シトセズ、之ヲ他ノ方面ヨリイヘバ總經費同ジキ國ノ間ニアリテモ徴收費ノ多少ニ依テ國家ノ目的ヲ遂クルニ必要ナル政務費ノ額ハ大ニ異ラサルヲ得ズ、是ガ故 經費ノ國際比較ニハ徴收費ヲ斟酌セザルベカラズ。

經營費ト徴收費トハ共ニ財務費ヲ形リノ政務費ト區別セラル、モノナルガ、人民ノ負擔ノ上ヨリ見ルトキハ多少異ル所アリ、即チ經營費ハ人民ノ負擔ニ沒交渉ナルヲ常トスレドモ徴收費ハ人民ノ負擔ヲ増スコト、ナルナリ。

出納費ニ就テ之ヲ見ルニ、出納制度ノ如何ニ依テ其額ヲ異ニスベシ、蓋シ官吏ヲシテ現金ノ管理出納ニ任セムシル國ニアリテハ其出納費ハ勢ヒ大ナルベキモ、金庫ニ關スル事務ヲ擧ゲテ中央銀行ニ委託スル國ニアリテハ出納費ハ比較的少シ。經費ノ國際比較ヲナサントスルモノハ又之ヲ注意セザルベカラズ。

公債費ニ就テモ亦同ジク論ジ得ベシ。現今ノ文明國ハ何レモ巨額ノ公債ヲ負擔ス。故ニ其利

子ハ年々ノ經常費トナリテ現ハレ豫算面ヲ壓スルコト大ナリトス。甚ダシキニ至ツテハ文政費國防費ニ對立シテ相下ラザルモノアリ。然レドモ國ニ依テ各其額ヲ異ニスルモノアレバ經費ノ國際比較ヲ爲スニ當リテハ之ヲ斟酌考量セザルベカラズ。

以上諸財務費ノ中ニ於テ最モ巨額ヲ占ムルモノハ公債費ナリ、其詳ナルコトハ之後節ニ讓リ、茲ニハ經營費徵收費ニ就テ一言スルニ止メン。

經營費徵收費ガ如何ナル程度ニ於テ存スルカハ之ヲ總經費ニ割リ當テテ對照スルヲ要ス。今世界戰前ニ於ケル文明諸國ノ國費總額ト經營費、徵收費ノ割合ヲ見ルニ左ノ如シ。

國名	國費總額	經營費		徵收費	
		絕對額	百分比	絕對額	百分比
獨及聯邦	三、七三五、五七〇 ^(千円)	一、五六一、六二六 ^(千円)	四四、三	六八、三五四 ^(千円)	二、二五
澳	七六六、二三四	二二三、七〇四	二五、六	六一、一八四	五、二六
露	二、三九三、三四六	六二四、二六八	二六、〇	二六九、五九二	三、七二
英	二、五八一、二〇〇	一七二、〇八〇	一一、五	二八、六八〇	一、四六
伊	六五四、八六〇	六四〇、五二〇	九、八	五七、三六〇	三、五八
佛	一、四八〇、八四四	一一六、一五四	七、九	八八、九〇八	四、七五

第四節 各省經費

一國ノ經費ヲ各省別ニ觀察スルコトハ既ニ述ベタルガ如ク立憲國ニ於テ肝要ナリ、何トナレバ立憲國ニ於ケル豫算ノ編製ハ各省ヨリ出發シ經費ノ支出ハ各省長官ノ命令ニ依ツテ實行セララルヲ常トスレバナリ。省別ニ依ル經費ノ區分ハ機械的ニ見ユレドモ、由來各省ハ國家ノ特殊ノ職分ヲ行フモノナルガ故ニ省別ニ依ル經費ノ區分モ亦學理的分類ヲ距ルコト遠カラズ。即チ大體ニ於テ陸海軍省費ハ國防費ニ、司法省內務省等ノ經費ハ法務費ニ、農商務省遞信省ノ經費ハ經濟行政費ニ、文部省ノ經費ハ文化費ニ、大藏省費ハ財務費ニ該當ス。然レドモ個々ノ政務ハ彼是錯綜シテ省別ヲ以テ截然之ヲ分ツコトヲ得ザルモノアリ。畢竟行政機關ノ組織ハ便宜ニ從フモノナレハ、同一目的ヲ有スル政務ニシテ數個ノ官省之ヲ分掌スルモノアレハナリ。各省費ノ中、海陸軍省費ハ國防費ノ款ニ於テ詳論シタレバ再ビ贅スルノ要ナシ、仍テ余ハ茲ニ外務省費、司法省費、內務省費、農商務省費、遞信省費、文部省費、大藏省費ニ就テ論ゼントス。

第一款 外務省費

一、外務省ハ外國ニ對スル政務ヲ掌ルガ故ニ、外務省費ハ外國ニ對スル政務ノ經費ニ外ナラズ換言セハ一國カ國際間ニ國トシテ存在シ他國トノ交渉ヲナスコトニ關スル經費ナリ。外國トノ

交渉ハ政治問題ニ關スルモノヲ主トス、政治問題ハ干戈ニ訴ヘテ解決スルコトナキニアラザレトモ、多クハ國際法ニ遵ヒ條約ニ據ツテ之ヲ解決ス、干戈ニ訴フルニ及ンデモ戰時國際法ニ據ルモノナルガ故ニ、外務省費ハ其本質ヨリ見テ法務費ナリト云フコトヲ得ベシ。然レトモ反面ヨリ觀ルトキハ國防費ガ戰爭ノ準備タルコトアルト同時ニ戰爭ノ防止タルコトアルガ如ク、外務費モ亦多クハ戰爭ノ防止タルコトアルト同時ニ戰爭ノ準備タルコトアリ、故ニ學者或ハ外務費ヲ國防費ニ準ス。¹⁾

然レドモ現今諸國ハ政治問題ノミニ於テ外國ト交渉セズ、外國ニ於ケル自國ノ臣民ヲ保護シ自國ノ經濟的利益ヲ進ムルコトニ關シテモ亦之ト交渉ス、是等ノ目的ヲ遂グル爲メニ何レノ國モ皆領事館ヲ置ク。又國ニ依ツテハ領事ノ外ニ商務官 (Handelsattaché) ヲ置クモノアリ。此等ノ領事館商務官ノ爲ニ要スル經費ハ、或ハ内務費ニ該當シ、或ハ經濟行政費ニ該當ス。是ガ故ニ外務省費ハ自然異レル性質ノ經費ヲ包括スルモノト謂ハザルベカラズ。

外務省ハ上述ノ如キ理由ニ依リ、外國ニ大使館公使館領事館ヲ置ク、故ニ外務省費ハ自ラ外務本省費ト在外公館費ノ二ヨリ成ル。殖民地ヲ外務省ニ於テ管轄スル國ニ於テハ殖民地費モ亦外務省費ヲ形クルベシ。故ニ外務省費ノ比較研究ヲ爲サントセバ、須ラク先ヅ之ヲ詳ニセザルベカラズ。蓋シ外國ニ於ケル特殊地方又ハ未開ノ國ガ或ル一國ノ勢力範圍トナリ又ハ保護國ト

1) Roscher-Gerlach F.-W. Bd. II. S. 197

ナルハ其初メニ於テハ外交ノ關係ニ外ナラザレドモ、ソガ發達シテ殖民地トナルヤ、國際的關係ヨリ轉ジテ國內的關係トナリ、其統治ハ外務省ノ所管ヲ離レテ或ハ拓殖局ノ所管トナリ或ハ内務省ノ所管トナルベケレバ、殖民地費ハ外務省費ヨリ獨立スルコトトナルナリ。

我國外務省ノ組織ヲ見ルニ、本省ニ亞細亞局、歐米局、通商局、條約局ヲ置キ、又臨事平和條約事務局ヲ置ク。大公使館、領事館、專管居留地經營事務所、臨時條約改正調査準備委員會ヲ附屬機關トス。故ニ外務省費ハ本省費ト在外公館費ト諸支出金ヨリ成ル。專管居留地經營ハ特別會計ヲ爲ス。

我國ニテハ殖民地ハ拓殖局ノ所轄ニカカル、拓殖局ハ内閣直屬ニシテ外務省ト交渉ナシ、從テ殖民地ノ監督費ハ外務省費ナシトシ、只明治四十一年及ヒ大正二年乃至六年ニ於テ關東州ノ總費ガ外務省費中ニ見エタルコトアリシノミ。

二、列強ノ外務省費ヲ見ルニ左ノ如シ。(國ニ依ツテハ不換紙幣本位トナレルモノアレドモ、姑ク硬貨純分ニ依リ平價ヲ以テ邦貨ニ換算ス、以下之ニ準ス)

	一九一三年	一九二〇年	一九一三年	一九二〇年
日	2,828,875,000圓	1,828,875,000圓	佛	7,928,875,000圓
英	7,828,875,000圓	3,828,875,000圓	伊	2,928,875,000圓
米	10,828,875,000圓	11,828,875,000圓	獨	2,028,875,000圓

諸國ノ外務省費ハ戰前ニ於テ互ニ懸絶スル所ナキヲ見ルベシ。戰後ニ至ツテ獨佛ノ外務省費ガ特ニ多クナルルハ平和ノ結果ニ外ナラザルベシト雖ドモ、亦貨幣價格ノ下落ニモ因ルナリ。

三、文明諸國ノ趨勢ヲ見ルニ、外務省費ハ次第ニ増加ス。蓋シ内國人ノ外國ニ赴クモノ増加スルニ從ヒ、通商航海ノ盛ナルニ伴ヒ、領事ヲ置クノ必要起ルベク、又同時ニ國際間ノ交渉モ多クナリ來ルベキガ故ニ、大公使館并本省ノ事務ヲモ繁クスルニ至レバナリ。

我國ノ外務省費モ次第ニ増加シ來レルガ、之ヲ統計ニ徴スルニ左ノ如シ(千圓單位、*豫算)。

年度	經費額	年度	經費額	年度	經費額	年度	經費額
明治二〇	七二	明治二九	一、三九〇	明治三八	五、〇二〇	大正三	七、四九七
二一	七三	三〇	一、五三四	三九	四、八六一	四	六、四一五
二二	七四	三一	一、七三七	四〇	八、八六七	五	五、〇三三
二三	七五	三二	一、九〇一	四一	九、〇三三	六	六、八六九
二四	七六	三三	二、〇七六	四二	九、二九〇	七	一〇、八九五
二五	七七	三四	二、二七六	四三	九、八一九	八	* 七、八四五
二六	七八	三五	二、六五六	四四	五、六五八	九	* 一四、八六四
二七	七八	三六	四、三七七	大正元年	八、〇九八	一〇	* 三三、七六八
二八	七八	三七	五、二二三	二	七、四二八		

此表ニ依テ證スルガ如ク我外務省費ハ日清戰爭當時ヨリ激増シ百萬圓臺ニ上レルガ、コハ在外公館費中修給電信料ノ増加并ニ朝鮮事件費ヲ支出シタルガ爲メナリ。明治三十二年ヨリ二百萬圓臺ヲ超ユルニ至リシハ、北清事變ノ爲ニ在外公館ノ機密費并ニ修給ノ増加セルガ爲メナリ。明治三十六年度以降更ニ倍加シ四百萬圓五百萬圓ニ突進セシハ、日露戰爭ノ影響ニモ因ルベクレドモ、本省ノ機密費ノ新設、在外公館ノ修給并ニ電信料ノ増加ニ因ル。明治四十年度并ニ四十一年度ニ於テ例外

的增加ヲ爲セルハ、關東都督府機密費三百萬圓ノ外、樺太漁業、交附金百二十萬圓(四十年度)鴨綠江採木公司資金百五十萬圓(四十一年度)加ハリシガ爲メナリ。明治四十二年度以降ハ此等巨額ノ臨時費ノ原因タリシ事務ハ他省ノ管轄ニ歸セシガ故ニ獨來外務省費ハ減シ來リシガ、世界戰爭ノ末頃ニ至ツテ又大ニ増加シ忽チ二千萬圓ヲ超エ、又忽チ二千萬圓ヲ超ユルニ至レリ。是レ一ハ修給并ニ電信料機密費等ノ増シタルニ因ルモ、亦一ハ本省ニ於テハ局が増サレ、外國ニ在リテハ公館が増サレタルニ因ルナリ。

第二款 司法省費

一、立憲國ニ於テハ多ク司法省ヲ設ク、而シテ司法省ハ司法ノ事務ヲ掌ル。故ニ司法省費ハ司法費ニ該當ス。元來司法費ハ警察費ト共ニ法務費ヲ形クルモノナレドモ、三權分立ノ主義ニ從ヒ司法事務ト警察事務トハ異レル國家機關ニ依ツテ之ヲ分掌スルヲ立憲ノ常道トスルガ故ニ司法費ハ警察費ト區別ヒザルベカラズ。從テ司法省費ハ裁判并ニ裁判執行ニ關スル經費ヲ主ナルモノトシ、之ニ關聯シテ生ズル行政費ヲ包括ス。換言スレハ司法省費ハ本省費、裁判所費、監獄費等ヨリ成リ立ツモノトス。

裁判所費ハ裁判所ノ組織如何ト裁判官ノ多少トニ依ツテ異リ、裁判ノ迅速ヲ期スル爲ニ商事裁判所其他特別裁判所ヲ設クルト否トニ依ツテ異リ、陪審制度ヲ設クルト否トニ依ツテ異ル。故ニ諸國ノ司法費ヲ比較セントセバ先ヅ之ヲ知ラザルベカラズ。

監獄署費ハ司法省費ノ中ニ重要ナル地位ヲ占ム。監獄署ハ事ノ性質ヨリイヘバ司法省ノ管轄
 タラザルベカラズ、然ルニ國ニ依ツテハ、内務省ノ管轄トナスモノアリ。司法費ノ國際比較ヲ
 ナサントセバ又之ヲ知ラザルベカラズ。

我司法省ノ組織ヲ見ルニ、本省ニ民事局、刑事局、監獄局ヲ置キ、別ニ裁判所、監獄署、特殊權利審査會ノ設ケアリ。故ニ
 我國ノ司法省費モ經常費トシテハ本省費、裁判所費、監獄費、諸支出金ヨリ成リ、臨時費トシテハ特殊審査會費并ニ營繕費
 ヨリ成ル。要スルニ我國ノ司法省費ハ司法費ニ該當シ他種ノ經費ヲ混スルコト少シ。

二、列強ノ司法省費ヲ見ルニ左ノ如シ。

	一九一三年	一九二〇年	一九一三年	一九二〇年
日	11,948,675	22,865,350	佛	33,659,518
英	32,011,311	32,801,722	伊	11,825,117
米	110,202,602	117,200,600	普	102,117,710
				118,777,730

此表ニ依テ之ヲ觀レハ諸國ノ司法省費ハ戰前ニ於テ貳千餘萬圓、戰後ニ至テ參四千萬圓トナ
 リ、各國間ニ大差ナシ。只我國ノ比較的少キト、普國ノ比較的多キト、伊國ノ戰後ニ増イザリ
 シコトヲ例外トスルノミ。司法省費ノ相違ハ國情ニモ因ルベケレトモ、其所管事務ノ範圍ニ於
 テ異レルニモ因レリ。

英國ニテハ由來司法省ナケレハ司法省費モナキ筈ナレドモ、豫算ニ現ハレタル裁判所暨監獄署費感化院費ヲ併セテ之ヲ司法
 費トシテ計上シタルナリ。英國ノ司法機關ハ他國ト異リ、貴族院ヲ以テ最高上告裁判所トシ、其下ニ諸種ノ裁判所アリ、陪

審官ノ制度ヲモ存ス。監獄署ハ内務省所管ニ屬ス。

米國ニテハ司法ノ事務ハ中央政府ト州トノ間ニ分掌セラレ、中央政府ノ司法事務ノミガ、米國ノ司法費ヲ形クル。中央政府
 ノ裁判所ハ上下兩級ヨリ成リ。下級裁判所ハ全國ヲ六十區ニ分チ、米國ニ對スル總テノ犯罪ヲ裁判シ。上級裁判所ハ控訴ヲ
 受ケ又外國使臣領事又ハ州ガ當事者タル事件ヲ裁判ス、其首席裁判官ハ一萬五千弗、他ノ裁判官ハ一萬四千五百弗ノ俸給ヲ
 受ク。

佛國ノ司法省ハ民事裁判所ノ外、權限裁判所、會計検査院ヲ所管トス、其重罪裁判所ニハ陪審官ヲ附ス、普通裁判所ノ外
 商事裁判所ヲ存ス。監獄署ハ内務省ノ管轄ニ屬ス。

獨逸ハ帝國ニ司法省アリテ最高裁判所タル帝國裁判所 (Reichsgericht) ヲ管轄ス。地方裁判所以下ノ裁判所ハ各支分國ノ司
 法省ノ管轄ニ屬ス、故ニ獨逸ノ司法費ハ帝國ノソレヨリモ寧ロ支分國ノソレヲ重ンズベキナリ。

三、司法費ハ時世ノ進歩ニ伴テ膨脹スベキコトハ既ニ第二節第二欸ニ述ベタルガ如シ、之ヲ我
 國ノ實際ニ徴スルモ亦然リトス。

我國ノ司法省費ハ本省費、裁判所費、監獄署費ノ二トス。其膨脹ノ跡ヲ見ルニ左ノ如シ。

(千圓單位・豫算)

年度	經費	年度	經費	年度	經費	年度	經費
明治二〇	1,311	明治二三	1,711	明治二六	2,511	明治二九	3,311
一一一	1,012	一一四	1,411	一一七	1,811	一二〇	2,211
一一二	1,111	一一五	1,511	一一八	1,911	一二一	2,311

三二	五、四、四	三八	10,113	四四	13,338	六	18,011
三三	八、三、三	三九	10,673	大正元	13,550	七	19,844
三四	10,933	四〇	11,538	二	11,860	八	18,733
三五	11,831	四一	11,860	三	11,357	九	* 23,865
三六	11,831	四二	11,357	四	11,611	一〇	* 29,819
三七	10,878	四三	13,089	五	11,622		

1100

我司法省費ハ明治三十三年頃ニ至テ急増シ殆ド從來ノ經費額ニ倍スルニ至レリ、是レ監獄制度改革ノ結果ナリ。從來内務省所管ニ在リシ集治監ヲ司法省ノ所轄ニ移シ、府縣ノ支辨タリシ監獄費ヲ國庫支辨トシ司法省費ニ移セルハ此明治三十三年ニアリトス。爾來司法省費ハ漸次増シ來リシガ、大正二年以來地方裁判所支部ノ權限ヲ減縮シ進ンテ、百二十八箇所ノ區裁判所ヲ廢止シタリシカバ、司法省費膨脹ノ勢ヲ多少喰ヒ止メシ感ナキニアラザリキ。然ルニ大正六年ノ追加豫算ニ於テハ、既ニ四十六箇所ノ區裁判所ヲ復舊新設シ、二十六箇所ノ地方裁判所支部ノ權限ヲ擴張シ、尙新ニ四箇所ヲ新設シ。大正七年度ノ豫算ニ於テハ、更ニ十八箇所ノ區裁判所ヲ設置シ、十一箇所ノ地方裁判所支部ノ權限ヲ擴張シ、尙新ニ四箇所ヲ新設シ。大正八年度ノ豫算ニ於テ、尙進ンテ三十一箇所ノ區裁判所ノ内二箇所新設)ヲ復舊シ、五十箇所ノ區裁判所出張所、十四箇所ノ地方裁判所支部ヲ設置シ、十六箇所ノ地方裁判所支部ノ權限ヲ擴張シ。大正十年度ノ豫算ニ於テハ、又更ニ百箇所ノ區裁判所出張所、三箇所ノ地方裁判所支部ヲ設置シ、二箇所ノ裁判所支部ノ權限ヲ擴張セシテ以テ近年ニ到リ司法省費ハ激増セリ。

第三款 内務省費

一、行政機關ノ組織ヲ標準トシテ内務省費ヲ内務費ト云フベクンバ諸國ノ内務費ハ非常ニ懸絶

スルモノトナルベシ、蓋シ内務省程 國ニ依ツテ其組織ヲ異ニスルモノナケレバナリ。小國ニ於テハ内務省ハ概テ内治ニ關スル政務ヲ總括シ經濟行政教育行政ヲモ統ブ、大國ニ於テハ内治ニ關スル特殊政務ノ爲メニ、獨立ノ省ヲ設ケ、獨リ警察、衛生、地方行政、救貧事務等ヲ内務省ニ掌ラシムルヲ常トス。尤モ是等ノ政務ニ就テモ權限ノ廣狹一ナラズ、從テ内務省費ノ國ニ依テ大ニ異ルコト、ナルナリ。例ヘバ地方ニ自治ヲ許ス程度如何ニ依ツテ非常ニ相違ヲ來スガ如シ、内務省費ノ比較研究ヲ爲サントセバ先ヅ之ヲ知ラザルベカラズ。

我國ノ内務省ノ組織ヲ見ルニ、神社地方行政議員選舉警察土木衛生出版著作權賑恤救濟ニ關スル事務ヲ管理スルガ爲ニ本省内ニ神社局、地方局、警保局、土木局、衛生局、社會局ヲ置キ。警視廳、北海道廳、府縣廳、神宮、中央衛生會、衛生試驗所、國立感化院、警察講習所、防疫職員、諸委員會調査會(東京市區改正委員會、都市計畫調査會、港灣調査會、救濟事業調査會、日本藥局方調査會、保健衛生調査會)等ヲ附屬トス。故ニ我内務省費ハ本省費并ニ是等附屬機關ノ經費ヲ含ム。豫算ニ依テ之ヲ觀ルニ、内務省費ハ經常費トシテハ本省費、地方廳費ノ外、神宮費、神社費及國幣社例祭幣帛料、衛生試驗所費、營養研究所費、國立感化院費、警察講習所費、徴兵費、軍事救護費、連帶支辨金及補助費ノ諸支出金ヨリ成リ。臨時費トシテハ水道其他ノ補助費、治水事業費、河川改良費、港灣改良費、道路改良費、道路港灣調査費、都市計畫調査費、北海道拓殖費、營繕費、傳染病豫防費、民力涵養費、災害費、其他神宮神社ニ關スル臨時費、諸種ノ調査及曉諭ニ關スル經費ヨリ成ル。從テ我内務省費ハ實ニ法務費、民福増進費ノミナラズ、國防費、文化費ノ一部ヲモ含ムト謂ハザルベカラズ。然リ而シテ是等經費ノ中最モ重キヲ爲スモノハ臨時費ニアリテハ、治水事業費、河川改良費、港灣改良費、道路改良費等ノ土木費

ニシテ、經常費ニアリテハ地方廳發トス。地方廳ハ北海道三府四十三縣ニ亘ルガ故ニ其經費ノ極テ巨額ニ上ルハ當然トスベシ。尙之ニ關聯シ巨額ノ經費ヲ占ムルモノハ警察費、運送支辨金ナリトス。警察費ハ地方支辨トナスモ、國庫モ亦其一部分ヲ負擔シ、東京府ニハ其總高ノ六割他ノ府縣并ニ北海道ニハ六分一ヲ下附ス。此外警察官吏ノ諸給與警視廳ノ廳費、並ニ警察講習所費ハ國庫支辨ナルガ故ニ我國家ガ警察費トシテ支拂フ額モ亦決シテ少シトセザルナリ。

二、列強ノ内務省費ヲ見ルニ左ノ如シ。

	一九一三年	一九二〇年	一九一三年	一九二〇年
日	五三、四一、四八八	一〇三、八六、九七五	五五、二五五、六五三	五七、一六四、三三六
米	四四、〇〇、一八二	七四、〇〇〇、三二〇	四六、三三六、四三九	八四、九、五五、九六三
佛	五五、九三九、〇七〇	五五、五八、四〇、二六六	七五、三三、一九、一〇〇	七三、一八、〇、〇〇〇
伊				
普				

右表ニ依テ之ヲ觀レハ、戰前ニ於テハ、列強ノ内務省費ハ四五千萬圓ノ間ニ在リテ、差シタル徑庭ナシ。戰後ニ至テ列強ノ内務省費ハ互ニ懸絶スルコト、ナレリ、殊ニ佛獨ノ内務省費ハ他ノ諸國ノソレヨリモ非常ニ増加セリ。是レ一ニハ貨幣價格ノ下落ニモ因ルベシト雖ドモ、又戰後ノ事情ニモ因ルベキナリ。

三、内務省ノ執ルベキ政務ノ内容如何ヲ問ハズ、何レノ國ニ於テモ内務省費ハ膨脹シテ已マズ、蓋シ人口ノ増加スルニ從テ内治上ノ事務ヲ繁クスレバナリ。我國ノ實際ニ徴スルモ亦然リトス、今、明治二十年來ノ内務省經費ノ膨脹ヲ示セバ左ノ如シ。(千圓單位*豫算)

年度	經費	年度	經費	年度	經費	年度	經費
明治一〇	一一、〇〇〇	明治二九	元、五八八	明治三八	一四、五九二	大正三	五九、五三三
一一	一一、三三六	三〇	三、九〇一	三九	一六、〇〇八	四	五、五三三
一二	一三、五五六	三一	三、七二七	四〇	二一、〇八〇	五	四、七〇〇
一三	一三、九三二	三二	二、六〇六	四一	二八、八八六	六	四、四七三
一四	一六、八六九	三三	三、六、三三	四二	三、一、一三	七	四、四〇〇
一五	一〇、四九〇	三四	三、三、七四	四三	三、七、七九	八	三〇、一、九七
一六	一三、一、三三	三五	三、九、三三〇	四四	三、三、八、八	九	一〇、一、一、七
一七	九、九、九、四〇	三六	三、六、九、三三	大正元	六、九、四、六	一〇	一、一、一、一、一
一八	一一、一、一、一	三七	三、七、三、七	二	五、三、三、三	*	一、一、一、一、一

此表ノ示ガ如ク、我内務省費ハ日清戰爭後ヨリ膨脹シ初メ、明治ノ末年ヨリ大正ノ初ニカケテ更ニ大ニ進ミ、世界戰ノ終頭ヨリ一大飛躍ヲ爲セリ。日清戰爭後、膨脹シタルハ、一方ニハ新ニ臺灣ニ關スル經費ヲ加ヘタルニモ因ルベク、他方ニハ明治二十九年大水害費其翌年ヨリ土木事業費、同補助費、北海道鐵道敷設費ノ加ハリ來リタルニモ因ル。明治四十四年ヨリ更ニ膨脹シタルハ、一ニハ官吏増俸ノ爲メ、并ニ感化地方改良等ノ事業ノ爲メ要スル經費ノ増加シタルニモ因リ、又一ニハ治水事業、港灣改良ノ計畫成リテ其經費ガ計上セラレタルニモ因レリ。大正元年以後尙進ンテ經費ノ激増シタルハ、殖民地ガ内務省ノ管轄ニ移リテ、其補充金、繰入金若クハ貸付金等ガ巨額ニ上リシニ因ル。而シテ是等殖民地ニ關スル經費ハ大正七年度ヨリ更ニ大藏省所管ニ移レルガ故ニ内務省費ハ形式的減少ト來セルモ、其當時ヨリ俸給其他ノ人件費大ニ進ミ、警察費等ノ連帶支辨金モ亦非常ニ増加シ來リシノミナラズ、治水事業費激増シ、河川改良費新ニ加ハリ、港灣改良費、北海道拓殖費モ亦急ニ増加シ、最近ニハ道路改良費モ豫算ニ表ハレ來リ、茲ニ内務省ノ新時期ヲ劃スルニ至レリ。

第四款 農商務省費

一、農商務省費ハ大體ニ於テ農工商ニ關スル經費、即チ勸業費ナリ。農工商ヲ保護獎勵スル爲メニハ大國ニ於テハ或ハ特別ノ一省ヲ置キ、或ハ二省三省ヲ置ク。我國ハ單一省ヲ置キ、名ヅケテ農商務省ト云ノ。故ニ我國ノ農商務省費ハ他國ノ農務省費商務省費等ヲ合セタルモノニ該當ス。蓋シ產業ガ發達スルニ從テ一省ヲ以テ之ヲ管轄スルコトノ困難ナルニ及ンデ分科シテ二省トナシ、三省トナスナリ。其省ノ多キハ偶々以テ其事務ノ繁ク、經費ノ多キヲ證スルニ足ル。

農務商省ハ大體ニ於テ農工商ニ關スル政務ヲ統フルモノナルガ、工業ノ盛ナルニ伴テ勞動問題ヲ生シ、社會立法ヲ必要トスルニ至テ更ニ是等ノ政務ヲモ掌ル、是ニ於テ農商務省費ハ社會立法ニ關ル經費ヲモ含ムコト、ナルナリ。國ニ依ツテハ、是等政務ノ爲ニ勞動省ト云フ特別ノ省ヲ設クルモノアリ、是等ノ國ニ在リテハ勸業費ト社會立法費トハ全然之ヲ區別シ得ベシ。

我農商務省ノ組織ヲ見ルニ農務局、商務局、工務局、山林局、鑛山局、水産局、食糧局ヲ置キ、更ニ特許局、農業試驗場、園藝試驗場、茶業試驗場、畜産試驗場、種羊場、植物検査所、蠶業試驗場、絹業試驗場、生糸検査所、工業試驗場、陶磁器試驗所、臨時審察研究所、燃料研究所、花産検査所、工藝審査委員會、製鐵所、鐵務署、林區署、水産講習所等ヲ附屬トス。故ニ農商務省費ハ本省費ト是等ノ附屬機關ノ經費トヨリ成ル。但シ製鐵所ハ特別會計ヲ爲スガ故ニ、其經費ハ一般會計ニ計

上セズ其擴張費ガ一般會計ノ臨時費トシテ表ハルルノミ。

新クノ如ク我農商務省費ハ種々ノ性質ヲ帶アル經費ヲ含ムモ、大體ニ勸業費并ニ社會立法費ナリト云フコトヲ得、然レトモ勸業費并ニ社會立法費ヲ盡セルニアラズ、蓋シ内務省費通信省費大藏省費中ニモ尙此種ノ經費ヲ存スレハナリ。

二、農商務省ノ組織ハ各國ニ於テ異ルガ故ニ、列國ノ農商務省費ハ正確ニ比較スルコトヲ得ザレドモ、大體ニ就テ之ヲ試ムレハ左ノ如シ。

日農商務	一九一三年	一九一〇年
米(農務)	1,277,711,000	1,111,277,711
佛(農務)	1,111,277,711	1,000,000,000
佛(農務)	1,111,277,711	1,000,000,000
伊農工商	1,111,277,711	1,000,000,000
普(農務)	1,111,277,711	1,000,000,000
獨(勞働)	1,111,277,711	1,000,000,000

此表ニ依テ觀レハ、諸國ノ農工商費ガ互ニ相懸絶スルヲ知ルト同時ニ、我國及伊國ノ農商務省費ガ他ノ列強ノソレニ比シテ如何ニ僅小ナルカヲ知ルベシ。偶々其經濟發展ノ幼稚ニシテ産

業行政ノ未ダ大ニ振ハザルヲ反證スルモノト謂フベキカ。

三、農工商ハ次第ニ進歩シ發達スルモノナルガ故ニ、農商務省費ハ其農工商ノ進歩ニ伴ツテ膨脹スルコト疑ナシ。我國ノ農商務省費ハ遙ニ列強ノソレニ劣レリト雖モ、是レ亦發展ノ結果タラズンバアラズ。

今我農商務省費ガ如何ニ膨脹シ來リシカヲ見ルニ、左ノ如シ。(單位千圓*豫算)

年度	經費	年度	經費	年度	經費	年度	經費
明治二〇	1,001	明治二九	1,331	明治三八	8,922	三	19,111
二一	1,202	三〇	1,872	三九	11,872	四	16,992
二二	1,331	三一	2,522	四〇	12,622	五	19,002
二三	1,102	三二	3,111	四一	11,332	六	20,121
二四	2,222	三三	3,333	四二	12,802	七	22,821
二五	1,333	三四	4,444	四三	14,444	八	26,821
二六	1,444	三五	5,555	四四	17,774	九*	31,774
二七	1,555	三六	6,666	四五	21,114	一〇*	37,114
二八	1,666	三七	7,777	大正元	23,554		
				二	26,554		

此ノ表ニ依テ之ヲ觀レハ、我農商務省費ハ不規則ナル弧ヲ畫キテ激増シ來レルナリ。大體ヨリイヘハ明治三十年頃ヨリ急激ニ進ミ、日露戰後ニ更ニ大ニ進ミ、大正六七年頃ヨリ又益々進メルモノトス。其主ナル原因ハ製鐵所ノ創立擴張費并ニ林野經營費其他森林費ノ大ニ膨脹シタルニ存ス。即チ製鐵所ハ明治二十九年ニ創立シ、同三十一年ヨリ當初豫算ニ追加シ、三十

三年ニハ五百餘萬圓、三十四年ニハ三百六拾餘萬圓ヲ投資シ、明治三十九年ヨリ第一期ノ擴張ヲ爲シ初メ三年間ハ年々四百餘萬圓ヲ投セリ。明治四十四年ヨリ第二期擴張ニ移リ、大正二年ニハ五百參拾餘萬圓、同三年ニハ貳百五拾餘萬圓、同四年ニハ百五拾餘萬圓ヲ投セシガ。大正五年ヨリ第三期擴張ニ入り、同年ニハ四百參拾餘萬圓、六年以後ハ年々千萬圓内外ノ巨資ヲ投セリ。森林費モ之ト並行シ、明治三十二年ニ國有林野經營ノ計畫ヲ定メ不要ノ林野ヲ賣却シテ森林資金ヲ作リ之ニ依ツテ造林ヲ爲スト同時ニ他方ニ輪伐ヲ爲シテ森林費ヲ省辨シ且ツ收入ヲ得ルコトトセシヨリ、明治三十四年以降年々歲々國有林野經營費トシテ百萬圓乃至四百餘萬圓、森林費トシテ百五拾萬圓乃至約五百萬圓ヲ支出セリ。是ガ故ニ農商務省費ハ製鐵所擴張費并ニ森林費ヲ控除スレハ、著シク其額ヲ減スベク、不規則ナル増減ノ弧モ規則正シキ増加ノ弧ト變セン。然リ而シテ農商務省費ガ大正六七年ヨリ激増セシハ、上述ノ原因ノ外ニ人件費ノ増加、諸産業獎勵費及諸調査費ノ増加等ニモ因レ

第五款 遞信省費

一、遞信省費ハ主トシテ交通運輸ニ關スル行政費ナリ、交通運輸ニ關スル行政ハ之ヲ道路運河河川港灣ニ關スルモノト、鐵道ニ關スルモノト、船舶ニ關スルモノト、郵便電信電話ニ關スルモノトニ分ツテ得ベシ。我國ニ於テハ第一ノモノヲ内務省ノ管轄トシ、第二ノモノヲ鐵道省ノ管轄トシ、其他ヲ遞信省ノ管轄トス。尤モ鐵道行政ハ從前ニ在リテハ遞信省ノ管轄ニ屬セシガ、今日ハ鐵道省ノ管轄トナレリ。斯クシテ鐵道費ハ之ヲ遞信省費ヨリ分離セザルベカラズ。

我遞信省ノ組織ナレルニ、通信局、管船局、電氣局、經理局ヲ置キ。別ニ貯金局、簡易保險局、臨時電信電話建設局、遞信官吏練習所、電氣試驗所、地方遞信官署、海事委員會、海員審判所、航路標識管理所、商船學校等ヲ附屬トス、從テ遞信

省費ハ本省費ノ外此等附屬機關ノ經費ヲ包括ス。我國ノ豫算ニ依レハ經常費トシテハ通信本省費、通信費、電氣試驗所、航路標識費、商船學校費、年金及恩給諸支出金ヨリ成、臨時費トシテハ補助費、營繕費、電話交換擴張費、電信擴張及改良費、發電水力調査費、無線電信局設置費等ヨリ成ル。別ニ簡易生命保險費ヲ特別會計トス。是カ故ニ通信省費ハ通信運輸ニ關スル政務費ヲ骨子トシ、産業費、教育費、財務費ヲモ含ムモノト謂ハザルベカラズ。

二 列國ノ通信運輸ニ關スル行政組織ハ必ズシモ我國ト同シカラズ、故ニ經費ノ比較ヲ精確ニナスコトヲ得ズ、只郵便電信電話ヲ中心トスル經費ニ就テ比較スレハ左ノ如シ。

	一九一三年	一九二〇年	一九一三年	一九二〇年
日	七七,七七七,六六八	二一〇,一〇七,四一〇	佛	一四八,九五六,八八九
英	三三,七八五,三三八	四六九,四八八,八三三	伊	五三,九二二,六三三
米(郵便事務費)	六,四二二,五九八	四,九五六,一九五	獨	五三,四二八,二〇六
米(郵便事務費)	五,二五七,七〇〇,四〇一	七,七二一,八三三,五七三		六七二,二八八,九四三

右表ニ依テ之ヲ觀レハ、諸國ノ通信費、非常ニ懸絶スル所アリ、蓋シ此種ノ經費ハ人口ノ多少ト文明進歩ノ程度ニ依ツテ異ル。其人口多クシテ文明進メル國ニ於テ多キハ自然ノ數ト謂ハザルベカラズ。

コハ啻ニ國際間ニ於テ眞理ナルノミナラズ、一國ニ於テモ亦眞理ナリトス。即チ一國社會ノ文明ガ進ミ人口ガ増加スルニ從テ此種ノ經費ハ増加スベキナリ。

三、我國ノ通信省費ニ就テ此膨脹シ來レル跡ヲ尋ヌルニ左ノ如シ。(千圓單位*豫算)

年度	經費	年度	經費	年度	經費	年度	經費
明治二〇	四,五六八	明治二九	一〇,〇〇〇	明治三八	三六,三三三	大正三	八〇,〇一七
一一	四,五七〇	三〇	三〇,一〇四	三九	四八,一四〇	四	七八,五七八
一二	四,八四九	三一	三三,三三三	四〇	五二,三三三	五	八三,五六五
一三	六,四四七	三二	三六,七二九	四一	五九,一八一	六	九七,四四五
一四	七,九七九	三三	四一,一〇一	四二	七三,八八三	七	一二八,七七八
一五	〇二,〇二二	三四	四六,五九三	四三	七六,四〇六	八	一三九,八三三
一六	六,八七一	三五	四六,四四元	四四	七六,四四四	九	二一〇,一一一
一七	七,六〇〇	三六	四六,五八八	大正元	七九,〇一七	*	二二〇,〇〇〇
一八	八,四六八	三七	五九,八三五	二	七九,七三三	*	二二五,〇〇〇

此表ニ依テ之ヲ觀レハ、通信省費ハ年々逐テ膨脹シ、日清戰役當時ニハ明治二十年頃ノ二倍シ、其戰役後ニ非常ニ増加シ、明治三十三年頃ニ至テ殊ニ甚シク、終ニ日清戰役當時ニ六倍スルノ勢ヲ示シ、日露戰争後ニ於テ更ニ激増シ、明治四十二年以後ニ至テハ、日清戰役當時二十倍シ、更 大正七八年頃ヨリ一層激増シ、日清戰役當時ニ三十倍スルニ至レリ。其主要ナル原因ハ、經常費ニアリテハ通信費ノ増加ト、明治四十二年以降大藏省ヨリ移サレタル年金并ニ恩給ノ増加トニ存シ、臨時費ニアリテハ、海軍補助費、鐵道改良建設費、電話擴張費、電信擴張費ノ膨脹ニ在リトス。今是等臨時費ニ就テ其發達ノ跡ヲ尋ネントス。

(1)海軍補助費ハ明治二十九年頃、航路擴張ノ必要ニ迫ラレテ膨脹シ、三十一年度ヨリハ造船獎勵費、又翌三十二年ニハ航海獎勵費、(三十年度三十一年度ハ經常費ニ計上)ノ新ニ加ハリ來ルアリテ、其額六百五十拾萬圓ヲ數ヘシガ、爾來年ト共ニ進ミ、

明治三十五年ニ七百八拾八萬圓トナリ、日露戰役當時激減シテ參百萬圓トナリシモ、戰後直ニ復舊セシノミナラズ、次第ニ増加シテ明治四十一年ニハ既ニ約千萬圓ニ近ヅキ、明治四十二年以降年々千貳百萬圓内外ヲ往來スルニ至レリ。只大正四年度ノ八百餘萬圓ヲ河外トスルノミ。

(2) 鐵道改良建設費モ、日清戰役後大ニ進ミ、明治二十九年ノ百拾六萬圓ハ、其翌年ニ五百九拾萬圓トナリ、三十二年ニハ八百貳拾萬圓、三十五年ニハ千五百餘萬圓トナリシガ、日露戰役中半減セリ。日露戰役後ニ鐵道國有政策實現セラレテ、鐵道ニ關スル經費ハ鐵道特別會計ニ移サレタルガ、帝國鐵道資本勘定資金ニハ明治四十年度ニ貳千貳百八拾七萬餘圓ヲ繰入レ、韓國鐵道資本勘定資金ニハ明治三十九年ニ百四拾貳萬餘圓、四十年ニ千貳拾參萬餘圓、四十一年ニ七百六拾六萬餘圓ヲ繰入レリ、爾來鐵道費ハ逕信省費ト絶縁セラレタリ。

(3) 電話電信擴張費モ日清戰役後大ニ膨脹シ初メタルモノニシテ、電話擴張ハ明治二十九年ノ約六十萬圓ヨリ翌年ニハ二百四十六萬圓ニ突飛シ三十二年ヨリハ電信線ノ營繕費力増加シ來リシガ、日露戰役中ニ中止セラレ、戰後ニ至テ復活セリ。電話交換擴張費ハ明治四十二年ヨリ年々左ノ如ク増加セリ。

明治四二	三、八、八、五、七、一、一	大正三	三、八、〇、一、一、三、一	大正八	三、一、〇、〇、〇、〇、〇
四三	五、〇、〇、〇、〇、〇、〇	四	三、〇、〇、〇、〇、〇、〇	九	三、〇、〇、〇、〇、〇、〇
四四	五、八、八、八、八、八、八	五	三、〇、〇、〇、〇、〇、〇	一〇	* 三、〇、〇、〇、〇、〇、〇
大正元	六、〇、〇、〇、〇、〇、〇	六	三、八、八、八、八、八、八		
二	三、八、八、八、八、八、八	七	一〇、〇、一、二、七、三、三、〇		

電信擴張及改良費モ大正九年度ヨリ豫算ニ少カラサル額ヲ計上スルニ至レリ、即チ同年ハ八百萬圓ニシテ大正十年度ハ九百八拾萬圓ニ上レリ。

第六款 文部省費

一、文部省費ハ文化費ヲ骨子トス、只諸國ノ文部省ノ組織如何ニ依ツテハ文化費外ノ經費ヲ含ムコトモアルベク、又文化費ノ全部ヲ包括セザルコトモアルベシ。從テ各國文部省費ニ非常ノ相違ヲ生ズ。例ヘハ文部省ガ總テノ學校ヲ統一スルカ否カニ依ツテ文部省費ハ大ニ異リ、文部省ト地方團體トノ間ニ教育費ヲ分擔スルカ否カニ依ツテ文部省費ハ大ニ異ル、又私立學校主義ヲ採ルト否トニ依ツテ文部省費ハ懸絶スベシ、故ニ文部省費ノ國際比較ヲ爲サントセバ先ヅ之ヲ詳ニセザルベカラズ。

我國ノ文部省モ教育宗教學藝ニ關スル事務ヲ掌ルガ故ニ文部省費ハ大體ニ文化費ト云フコトヲ得レドモ、神社ニ關シテハ内務省之ヲ管掌シ、特殊教育ニ關シテハ他ノ省ガ自ラ學校ヲ管理スルモノアレバ、我文部省費ハ文化費ヲ悉サザルナリ。

我國ノ文部省ノ組織ヲ見ルニ、専門學務局、普通學務局、實業學務局、宗教局、圖書局ヲ置キ。維新史料編纂會、帝國大學、官立大學、直轄學校、帝國圖書館、臨時教員養成所、帝國美術院、醫師試驗委員、齒科醫師試驗委員、藥劑師試驗委員、學校職員恩給審査委員、測地學委員會、理學文書目錄委員會、教員檢定委員會、臨時教育評議員會、工藝審査委員會、教科書圖書調查委員會、震災豫防調查會、學術研究會、傳染病研究所、氣象臺測候所、臨時緯度觀測所ヲ附屬ス。故ニ文部省費ハ本省費ノ外ニ是等附屬機關ノ經費ヲ包括ス。我國ノ豫算ノ編成方法ニ依レハ、其經常費ハ本省費、中央氣象臺費、

緯度觀測所費、醫師藥劑師試驗費、大學及學校圖書館支出金、普通教育費、實業教育費、中等諸學校及實業學校々長教員年功加俸分擔金、諸支出金ヨリ成リ、臨時費、營繕費、學校創設及擴張費、臨時調查會費、維新史料編纂費、臨時教員養成所費、臨時在外研究員費、臨時試驗費、補助費等ヨリ成ル。其中最モ重キヲ爲スモノハ大學、直轄學校并ニ圖書館、支出金及ビ普通教育費トス。蓋シ我國ニ於テハ高等教育ハ多ク文部省ノ直轄トシ中等教育普通教育ハ之ヲ地方團體ニ委スルガ故ニ從來文部省費ノ骨子ヲ爲スモノハ高等教育費ナリキ、普通教育費ニ至リテハ從來單ニ地方費ヲ爲スニ過ギザリシガ、其額頗ル大ナルガ爲ニ地方財政ヲ壓迫スルコト甚シキノミナラズ、小學校教員ハ薄給ノ爲ニ其堵ニ安ズルコトヲ得ザルモノアルガ故ニ、文部省ハ小學校教育費ヲ補助シ、小學校教員ノ俸給ヲ分擔スルニ至レリ、是レ普通教育費ガ、重キヲ爲スニ至レル所以ナリ。

二、諸國ノ文部省費ハ既ニ述ベタル理由ニ依リ互ニ異ラサルヲ得ザルガ、姑ク文部省組織并ニ管轄ノ如何ヲ問ハズ、豫算ニ表ハルル數字ニ依テ比較センニ、左ノ如シ。

	一九一三年	一九二〇年	一九一三年	一九二〇年
日	10,868,110圓	16,626,110圓	伊	6,820,812圓
英	1,179,939圓	3,386,939圓	普	1,377,810圓
佛	1,065,855圓	1,707,111圓		1,341,815圓

諸國ノ文部省費ハ相當ニ巨額ニ上レルガ、我國文部省費ハ之ニ比シテ大ニ遜色アリトス、是レ一ニハ中小學教育費ヲ地方負擔トセルニ因ラズンバアラズ。大正七年以降小學校教員俸給ノ分擔トシテ千餘萬圓ノ支出ヲ爲スニ至リシモ未ダ以テ大ナリトスベカラズ。

三、文部省費ハ教育ノ盛ナルニ從ツテ増加ス、教育ハ人口増加シテ、而モ其多數ガ向學ノ念ヲ抱クニ至ツテ愈々盛ナルベキナリ、故ニ文部省費モ亦時世ノ進ムニ從ツテ増加スルモノト謂フコトヲ得ベシ。我國ニ於テモ亦然リトス。

今、文部省費ノ年々増加シ來レル跡ヲ見ルニ、左ノ如シ(千圓單位、*豫算)

年度	經費	年度	經費	年度	經費	年度	經費
明治二〇	1,100	明治二九	1,426	明治三八	5,622	大正三	10,010
一一	1,111	三〇	1,431	三九	6,251	四	10,367
一二	1,122	三一	1,436	四〇	6,891	五	10,724
一三	1,133	三二	1,441	四一	7,521	六	11,081
一四	1,144	三三	1,446	四二	8,151	七	11,438
一五	1,155	三四	1,451	四三	8,781	八	11,795
一六	1,166	三五	1,456	四四	9,411	九	12,152
一七	1,177	三六	1,461	四五	10,041	一〇	12,509
一八	1,188	三七	1,466	大正元	10,671	*	12,866
				二	11,301	*	13,223

此表ニ依テ之ヲ觀ルニ、文部省費モ日清戰役後ニ至テ大ニ進ミ、其後年々増加シテ己マザリシガ、日露戰爭中一時頓挫シ、戰後ニ至テ直ニ復活シ更ニ漸進ノ勢ヲ示シ、明治四十四年ヨリ千萬圓ノ額ヲ奪ヒシガ、大正七年ニハ既ニ其ニ倍餘トナリ爾來二三年ノ間ニ其五倍餘トナレリ。其主ナル原因ハ學校ノ増設擴張并ニ之ニ伴フ年々ノ學校支出金ノ増加、小學教育補助費ノ増加、小中學校教員俸給分擔等ニ在リトス。直轄學校増設ノ第一期ハ日清戰役後明治三十一年ニ初マリ、第二期ハ日露戰後

ノ明治三十九年ニ初マリ、第三期ハ實ニ大正七年度ヨリ初マレリ。小學教育補助費ハ小學校教員ノ年功加俸ニ充ツルモノニシテ、明治三十三年ノ法律ニ依テ定マリ、其額ハ百五十拾萬圓ナリシガ、明治四十四年ヨリハ二百五十萬圓ニ進ミ、大正十年ニハ二百萬圓トナレリ。小學校教員俸給分擔ハ大正七年度ヨリ初マル、其額ハ千萬圓トス、尙最近ニ至リ小學教育補助ノ精神ヲ擴張シテ之ヲ中學ニ及ボシ、大正九年度以來、公立中等諸學校及實業補習學校ノ校長及ビ教員ニ對シ年功加俸ヲ支給スルノ制ヲ設ケ、其地方團體ノ負擔ニ屬スル部分ニ對シ、國庫之ヲ分擔スルコトトナリ、大正九年度ニ二十萬五千三十八圓、大正十年度ニ八四十一萬七十六圓ヲ支出セリ。

第七款 大藏省費

一、大藏省ハ財務行政ヲ掌ルモノナルガ故ニ、大藏省費ハ財務費ニ該當スルモノトス。然レドモ諸國ニ於ケル官廳組織ハ必スシモ理論的タラズ、官有財産ノ管理、官業ノ經營ハ多ク特別ノ官廳之ヲ管掌ス、故ニ經營費ハ其之ヲ管掌スル官廳ノ經費ニ編入スルヲ自然トスベシ。我國ニ於テモ然リトス、此ノ如キハ大藏省費外ニ在ル財務費ト云フベキナリ。又國ニ依レハ公債費支出ヲ大藏省所管ニ屬セシメザルモノアリ、我國ガ年金ヲ逋信省所管トナセルガ如キ亦一例トスベシ、是等ハ共ニ大藏省費外ニ在ル財務費トス。

之ニ反シテ大藏省費ハ財務以外ノ經費ヲ含ムコト稀ナリトセズ、殊ニ財務ヲ行フニ當リテ併

セテ他ノ經濟行政ヲ管掌スルヲ便宜トスル場合ニ於テ然リトス。我國ニ於テ金融ニ關スル行政事務ガ大藏省所管トナレルハ其好適例トスベシ。

我大藏省ノ組織ヲ見ルニ、主計局、主稅局、理財局、銀行局ヲ置キ。別ニ造幣局、專賣局、稅關、稅務監督局、稅務署、鹽務試驗所、海外駐劄財務官、臨時議院建築局、關稅訴訟審查委員會、臨時秩祿處分調查會、官有財産調查會、臨時神戸港設備委員會ヲ附屬機關トス。故ニ大藏省費ハ本省費ノ外是等諸機關ノ經費ヲ包括ス。主トシテ財務費ニ關スルモノナレドモ財務以外ノ經費モ其中ニ存スルコトヲ知ルベシ。

尙我國ノ豫算ニ於テハ、他省ニ直屬セザル政務ノ經費ハ之ヲ大藏省ヨリ支出シ、大藏省費トス。内關直屬ノ國勢院、法制局、恩給局、賞勳局ノ經費ノ如キ。又憲法上ノ機關タル樞密院、行政裁判所、會計検査院、貴族院、衆議院ノ經費ノ如キ是ナリ。次ニ特別會計ヘノ繰入、并ニ特別會計經費補充金ハ大藏省ヨリ支出スルガ故ニ大藏省費ヲ形クルモノトス。試ニ最近ノ豫算ヲ取テ大藏省費ヲ檢スルニ經常費トシテハ本省費、預金利息及手数料、内閣、樞密院、貴族院、衆議院、會計検査院、行政裁判所、國勢院、稅關、內國徵稅費、醸造試驗費、諸拂戻及缺損補填金、國債整理基金繰入、臺灣關稅諸收入繰入、煙草專賣益金轉太廳特別會計繰入、諸支出金、國庫豫備金等アリ。臨時費トシテハ罹災救助基金補助、營繕費、調査費、特別會計經費補充金、內國圖書保存費、恩給更正諸費、森林資金返償、朝鮮總督府特別會計繰入、小額紙幣製造費等アリトス。故ニ大藏省費ハ憲法費、政務費、財務費ヨリ成レルモノト謂フコトヲ得ベシ。而シテ此中最モ重キヲ爲スモノハ國債整理基金繰入、預金利息、內國徵稅費、殖民地特別會計繰入金等トス、最後ノモノハ殖民地費ニ屬スレドモ、其他ハ悉ク財務費タリ、故ニ大藏省費ハ財務費ヲ中心トスルモノト云フモ不可ナシ。

二、我國ノ大藏省費ハ此ノ如ク異種ノ經費ヲ含ムモ公債費ヲ最モ多シトス、諸國ノ大藏省ニア

ウテモ公債費最モ多クヲ占ム、故ニ大藏省費ノ國債比較ハ公債費ノ比較トモ見ルベク、公債費ヲ除外スル大藏省費ハ殆ト比較スルノ價值ナシ、今試ニ最近ノ統計ニ徴スルニ左ノ如シ。

	一九一三年	一九二〇年
日	一九、三七一、五〇〇	三二、五七、〇三三
英(徵稅費)	四四、二五五、六九九	九一、九八、九八〇
英(公債費)	三九、一九三、五〇〇	三、三三、〇〇〇
米(大藏省費)	一四、六〇〇、五八一	三、〇〇〇、〇〇〇
米(公債費)	四三、九三、六一〇	二、〇〇〇、〇〇〇
佛(大藏省費)	一三、八、九三、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
佛(公債費)	四九、七、八、〇〇〇	四、〇〇〇、〇〇〇
伊(大藏省費)	三、五、八、九、〇〇〇	九、五、七、七、九、〇〇〇
伊(財務省費)	一、六、五、二、七、〇〇〇	一、七、七、六、六、〇〇〇
獨(財務省費)	一、六、三、三、三、三、三	九、八、八、八、八、八
獨(國庫省費)	一、一、一、一、一、一	三、三、三、三、三、三
獨(公債費)	一、一、一、一、一、一	三、三、三、三、三、三

戦前ト戦後トノ大藏省費ニ激變ヲ來セルハ、主トシテ公債費ノ増加ニ因ル、公債費ト大藏省費トヲ區別スル國ニ於テハ、兩者ノ差ノ大ナルヲ見ルベシ。

三、大藏省費ハ時世ノ進歩ニ伴テ膨脹ス、殊ニ公債費ヲ大藏省中ニ包括スル國ニ於テ然リトス、我國ノ大藏省費モ亦其例ニ漏レズ。今明治二十年來ノ膨脹ヲ示セバ左ノ如シ。(千圓單位*豫算)

年度	明治二〇	明治二九	明治三八	大正三
經費	三三、三三七	四〇、九七四	三〇、三三九	二六、六八八
公債費	三、〇〇〇	四、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇
國庫省費	三、〇〇〇	四、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇
財務省費	三、〇〇〇	四、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇
大藏省費	三、〇〇〇	四、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇
總計	三三、三三七	四〇、九七四	三〇、三三九	二六、六八八
公債費	三、〇〇〇	四、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇
國庫省費	三、〇〇〇	四、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇
財務省費	三、〇〇〇	四、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇
大藏省費	三、〇〇〇	四、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇

此表ニ依リテ觀レハ、大藏省費モ日清戰、日露戰、世界大戰ニ因テ一段ノ膨脹ヲ爲セリ、從テ大藏省費膨脹ノ主ナル原因ハ戰爭并ニ其成果ニ歸スベシ。我國ハ日清戰役ニ因テ臺灣ヲ領有シ、日露戰役ニ因テ南樺太ノ領土權、關東洲ノ租借權、朝鮮ノ宗主權ヲ得タレバ、殖民地費ナルモノ新ニ加ハリタルハ、自然ノ結果トス。殖民地費ハ補充金トシテ豫算ニ現ハレ、初メ外務省所管ナリシガ明治四十二年以後大藏省ノ所管トナレリ。但シ大正二年乃至六年ヲ除キ、此期間ハ内務省所管ニ屬セシナリ。次ニ日清日露ノ兩戰役ハ公債ヲ増加シ租稅其他ノ收入ヲ増加スルニ至リシカハ公債費并ニ徵稅費ヲ増加セシコト少カラズ、殊ニ明治三十九年ニ國 整理基金ヲ設ケ年々壹億數千萬圓ノ金額ヲ該基金特別會計ニ繰入ル、ニ至ツテヨリ大藏省ノ支出ハ額ニ増加、來レルナリ。大正七年以來大藏省費激ノ増セシハ、世界大戰ノ餘響ニ外ナラズ。即チ日獨開戰以來戰費トシテ臨時軍事特別會計ヘ繰入レ來リシガ、大正七年ニハ其繰入額急ニ増加シテ一億千五百餘萬圓ニ及ベリ。又戰爭ノ餘波トシテ物價騰騰シ來リシガ故ニ廳費其他物件費ニ臨時追加チナシ、官吏ニ臨時手當ヲ給スル必要起リ、大正三年臨時事件豫備費ナルモノ設ケラレ大正八年九年ハ各一億圓ヲ支出セリ。大正十年ヨリ之ヲ廢シ、其經費ヲ各省ニ分配スルコト、ナレリ。

第五節 文政費、國防費、公債費

一、一國ノ經費ハ、學理上ヨリ見テ、憲法費政務費財務費ニ分ツベク、豫算ノ編成并ニ執行ノ上ヨリ見テ、各省經費ニ分ツベキコト前述ノ如クナルガ、尙一步ヲ進メテ觀察スルトキハ、一國ノ經費中ニ於テ國防費ト國防費外ノ經費トヲ對立セシムルコトヲ得。國防費外ノ經費ハ國防費ニ對シ之ヲ文政費若クハ文治費ト稱ス。從テ文政費ハ法務費經濟行政費文化費ヲ含ムノミナラス憲法費財務費ヲモ包括ス。思フニ現代ノ文化國ハ文化進歩、民福増進ト云フ國家ノ目的ヲ高潮シ來レルニ拘ラズ、何レノ國ニ於テモ國防ノ爲メニ費ス額ヲ最モ多シトス、是ニ於テ文武ノ爲ニ費ス經費ヲ互ニ比較スルノ必要ヲ生ズ。

又近來ノ國家ハ、頻リニ債ヲ起シテ已マザルガ故ニ公債累増シ、其元利ノ支拂ニハ莫大ナル經費ヲ要スルコトナレリ。由來公債ハ文政ノ爲メニモ起シ、戰爭ノ爲メニモ起スモノナレドモ、其利拂カ毎年ノ經常費トシテ現ハルルニ至テハ、之ヲ文トシ之ヲ武トスルノ劃然タル區別ヲ立ツルコト能ハズ。故ニ公債費ヲ財務費ヨリ割テ第二ノ地位ニ置キ、文武ノ經費ト對立セシムルコト亦意味ナキニアラズ、是ニ於テ吾人ハ經費ヲ文政費、國防費、公債費ニ三分セントス。二、之ヲ實際ニ徵スルニ、文明諸國中巨額ノ公債ヲ負フモノニアリテハ、公債費ハ文政費國防費ニ對峙シテ鼎立ノ姿ヲナサントスルノ勢ナキニアラズ、是ニ於テ此區別ハ重大ナル意義ヲ有スルコトトナルナリ。余ハ今之ヲ世界大戰ノ前後トニ於テ徵セントス。

世界戰勃發前ニ於ケル列強ノ公債費ト國費總額トヲ比較スレバ左ノ如シ。(一九一三年決算)

國名	公債額(圓)	公債費(圓)	國費總額(圓)	公債費ノ國費總額ニ對スル百分比	備考
日	2,666,112,112	339,911,010	5,733,333,933	5.9%	1) 無利子公債等ヲ包括シタル額
英	2,222,111,111	1,111,111,111	1,111,111,111	100%	2) 郵便費ヲ含メル額
米	1,234,567,890	1,234,567,890	1,234,567,890	100%	3) 一九一四年七月三十一日現在
佛	1,111,111,111	1,111,111,111	1,111,111,111	100%	4) 一九一四年豫算
伊	1,111,111,111	1,111,111,111	1,111,111,111	100%	5) 償還額四三、一
獨	1,111,111,111	1,111,111,111	1,111,111,111	100%	三九、五〇〇圓ヲ含ム
普	1,111,111,111	1,111,111,111	1,111,111,111	100%	
露	1,111,111,111	1,111,111,111	1,111,111,111	100%	

我國ノ公債費中ニハ一億二千餘萬圓ノ公債償還額アリ、*ハ之ヲ除去シタル殘額ナリ。然ルニ此殘額中ニハ殖民地及ビ鐵道等ノ特別會計ノ公債費ヲ含ム、故ニ一般會計ノ經費ト特別會計ノ經費ヲ通算シ之ニ對シテ公債費ノ割合ヲ見ザルベカラズ**ハ即チ是ナリ。

右表ニ依ツテ之ヲ觀ルトキハ、戰前ニ於ケル公債費ハ國ニ依ツテ異レドモ、經費總額ノ四分一乃至十分一前後ヲ占ム。之ヲ國防費ガ經費總額ノ二分一ヲ占ムルニ比スレバ、尙及バザルコト遠シト雖ドモ、其間ニ國防費ト文政費ト公債費ガ鼎立ノ勢ヲ示サントスルヲ見ルベキナリ。世界戰ハ交戰國ヲシテ莫大ナル公債ヲ負ハシムルコトトナリ、其公債費ヲ膨脹セシメシコト頗ル大ナルモノアリ。從テ戰後ニ於ケル公債費ノ國防費文政費ニ對スル關係ハ大ニ變ジ來レリ。試ミニ戰時ニ増加シタル國債ノ額ト戰後ニ於ケル公債總額并ニ其利子トシテノ公債費ヲ見ルニ

左ノ如シ。

國名	戰時ノ公債增加額	戰前戰時公債合計	一九二〇年		公債費ノ國費總額ニ對スル百分比
			公債總額	公債費	
日	五六九、三九一、〇二七	三、〇九三、五五九、七三七	一、四八五、五五九、七三七	一、三三三、三三三、〇〇〇	一〇、八〇〇
英	六一、五六七、四四〇、三六三	六八、五六〇、五六四、二二七	七六、九三二、九六六、〇〇〇	三、三三三、三三三、〇〇〇	二、八〇〇
米	三五、三三三、三三三、三三三	四一、〇七六、六六六、〇三三	一、〇一一、〇一一、〇〇〇	一、〇一一、〇一一、〇〇〇	二、四〇〇
佛	五三、三三三、三三三、三三三	六五、〇五九、六七三、〇八〇	九、〇四五、三三三、〇〇〇	四、七九七、三三三、〇〇〇	四、六〇〇
伊	一五、三三三、三三三、三三三	二〇、九二二、五二六、二九九	三、三三三、三三三、〇〇〇	一、〇七〇、〇七〇、〇〇〇	三、三三三
獨	五六九、三九一、〇二九	五八、一〇〇、五五三、九二二	九、一三三、〇〇〇、〇〇〇	五、八三三、七三三、〇〇〇	二、三三三

右表ニ依テ之ヲ觀レバ、戰後ノ公債費ハ戰前ノ國費總額ヲ超エ甚シキハ一倍シ(佛)若シクハ四倍獨)スルモノアリ。公債費ノ國費總額ニ對スル割合ハ大體三分一乃至四分一ノ間ヲ往來ス。之ヲ戰後ニ於ケル國防費ガ國費倍額ノ二割以下ニ下レルニ比スレバ、公債費ト國防費トノ地位ハ大戰ノ前後トニ於テ全ク顛倒セルヲ知ルベシ。

以上述ブルガ如ク、公債費ト國防費トノ地位ハ大戰ノ前後ニ於テ全ク顛倒シタレドモ、兩者ヲ合セ考フルトキハ、依然トシテ多クハ國費總額ノ四割五分内外甚シキハ六割餘ヲ占ム。國民ノ膏血ヲ絞リテ得ル所ノモノガ、殆ンド半バ公債費ト國防費トニ注ガレテ文政ノ爲メニ費サルルモノハ残りノ半ニ過キズトセバ、國家生活モ高價ナリト謂ハザルヲ得ズ。偶々文政費國防費

公債費ノ區別ノ必要ナル所以ヲ證スルモノト謂フベキナリ。

第五章 經費ノ物體

現今ノ文明國ハ貨幣經濟ヲ基礎トスル信用經濟ノ時代ニ進メルガ故ニ國家公共團體ノ財政モ亦之ニ影響セラレ經費ハ金錢ニ依テ支出セラル、ヲ常トス、從テ經費ハ形式ヨリ見レハ金錢的經費ノ一ニ歸ス、其金錢ガ如何ナル物體ニ向テ支出セラル、カラ尋ヌルニ人ノ勤勞ト財トノ二ニ出デズ、人ノ勤勞ニ對シテ金錢ヲ支出スル場合ニハ之ヲ人件費ト云ヒ、財ニ對シテ金錢ヲ支出スル場合ニハ之ヲ物件費ト云フ。

一國ノ經費ハ前章ニ述ヘシカ如ク、憲法費政務費財務費ヨリ成リ、政務費ハ更ニ國防費法務費民福増進費文化費ヨリ成ルモノナルガ、是等ノ經費ヲ分析シテ已マサレハ、何レモ人件費ト物件費ニ到達ス、人件費ト物件費トハ是等ノ諸經費ノ元子ト云フコトヲ得、若シ前章ニ述ヘタル經費ノ組織ガ、國家ノ目的若クハ國家ノ行動ヨリ觀タル經費ノ縱斷的分析ト云フベクンハ、茲ニ論セントスルハ經費ノ物體ヨリ觀タル經費ノ橫斷的分析ト云ハサルベカラズ、豫算ノ術語ヲ以テスレハ前者ハ所謂經費ノ縱割ニシテ後者ハ所謂橫割ナリ。從テ政務ノ目的性質若クハ之ヲ行フ機關ニ依テ分テタル經費ガ款ヲ爲セハ人件費物件費ハ項ヲ爲シ、之ニ反シテ前者ガ項ヲ爲

セハ後者ハ目ヲ爲ス。之ヲ人件費物件費ヨリ見レハ、両々相對時シテ下ラザルモノトス。
 人件費ト物件費トハ人ノ勤勞ト財トヲ經費ノ物體トスルモノナルガ、貨幣ノ形ニ於テ支出セ
 ラル、トキハ人件費ハ人ニ對スル俸給トナリ勞賃トナリ、物件費ハ財ニ對スル物價トナルベク、
 煎シ詰ムレハ人ノ價格ト物ノ價格トニ歸ス、人ノ價格ト物ノ價格トハ、貨幣價值ノ變スルニ依
 テ大ニ動クモノナレトモ、其動ク程度時期必ズシモ一ナラズ、例ヘハ貨幣價值減少スルトキハ
 物件費ハ直ニ其額ヲ増スベキモ人件費ハ一定ノ時期ヲ經テ増俸ヲ爲スニアラサレハ差シタル影
 響ヲ被ラサルカ如シ、是レ人件費ト物件費トガ、財政上性質ヲ異ニスルモノトシテ取扱ハル、
 所以ナリ。

人件費ト物件費トハ此ノ如ク性質ヲ異ニスル所アルガ故ニ互ニ之ヲ混淆スベカラズ、財政ノ
 調整ヲ保タントセハ彼此流用ヲ禁セサルベカラズ、流用禁止ノ原則ガ欸ニ止マラズシテ項ニ迄
 及ヘルハ之ガ爲メノミ。

第一節 物件費 (Der Realbedarf)

第一款 物件費ノ種別

國家ハ其職分ヲ遂クル爲ニ有形財ヲ要ス、其有形財ニ關シテ生スル經費ヲ物件費ト云フ。

一、國家ハ有形財ヲ必要トスルガ故ニ先ツ之ヲ獲得セサルベカラズ、既ニ獲得シタル以上ハ之
 ヲ保管シ保存シ長キニ亘リテ使用ニ堪ヘシメサルベカラサルノミナラズ、其使用スベキ地ニ運
 送セサルベカラズ、是ガ故ニ物件費ハ時ニ獲得費タリ時ニ保管費タリ時ニ運送費タルモノト
 ス。

國家ノ要スル有形財ハ千種萬様ナレトモ大體ニ分テ不動産ニ準スベキ軍艦船舶ト其他ノ動産
 トナスコトヲ得ベシ、故ニ物件費ハ不動産費艦船費動産費ニ別ツベキモノトス。

1 不動産費、國家ガ政務ヲ行フニハ官衙其他ノ設備ヲ要ス、官衙其他ノ設備ハ建物ヲ要シ、
 土地ヲ要ス、從テ不動産費ハ土地建物ニ關スル經費ト謂フベキナリ。

(1) 土地ハ建物ノ敷地トシテ必要ナルノミナラズ、建物ニ附屬シ若クハ建物ト離レテ之ヲ必
 要トスルコトアリ、例ヘハ公園鐵道練兵場ノ敷地ノ如シ、何レニスルモ國家公共團體ハ土地ヲ獲
 得セサルベカラズ、是ニ於テカ土地買收費アリ、然ルニ土地ハ時ニヨリテ買上ケ得サルモノナキ
 ニアラズ、此ノ如キ場合ニハ之ヲ借上クルヨリ外ナシ、是ニ於テカ借地料アリ、近來我邦ニ於
 テハ學校裁判所兵營停車場等ヲ新設スルニ當リ其關係地方ガ其要スル所ノ土地ヲ寄附スルヲ常
 トスルカ如シ、然レトモ豫算ニ於テハ寄附ハ收入ノ部ニ編入シ、土地買收費ハ之ヲ經費ノ部ニ
 計上セサルベカラズ、從テ此ノ如キ場合ニ於テモ土地買收費ヲ缺クコトナシ。

(2) 建物ハ政務ヲ執ルベキ廳舎トシテ之ヲ要スルノミナラズ、官吏ノ住居スベキ官舎トシテ、兵士ノ起臥スベキ兵營トシテ、學生ノ學フベキ校舎トシテ、患者ノ收容セラルベキ病院トシテ、犯人ノ監禁セラルベキ監獄トシテ之ヲ要ス、猶動産的諸物件ヲ保管スルカ爲ニハ倉庫ヲ必要トシ、官業ヲ營ムニハ工場其他ノ建物ヲ必要トス、而シテ茲ニ建物ト云フモ、單ニ家屋ノミニ止ラス、瓦斯電燈給水排水等ノ裝置ハ勿論門、垣塀等周圍ノ境界ヲモ包括スルモノトス。

國家公共團體ハ此必要ニ應スルカ爲ニ既ニ存スル建物ヲ借ルコトアリ。是ニ於テ借家料ナルモノヲ生ズ、在外公館ニ於テ其例ヲ見ルコト乏シカラズ、然レトモ普通ノ場合ニ於テハ新ニ建築ス、之カ爲ニ要スル經費ヲ新營費ト云フ。一ヒ建築シタル後一部ヲ改築シ又ハ増築ヲ要スルコトアルベシ、此改築費増築費モ亦廣義ノ新營費ノ一部ヲ爲スモノトス。建物ハ風雨霜露ニ晒ラサレテ腐朽破損ノ虞アルガ故ニ、年々歲々保存ノ道ヲ盡ササルベカラズ、之カ爲ニ要スル經費ヲ修繕費ト云フ、屋根天井壁垣塀等ノ修理皆之ニ屬ス。

2 艦船費、軍艦ハ海上ノ城砦ニシテ船舶ハ水上ノ家屋ナリ、動産ニシテ而モ寧ロ不動産ニ準スベキモノトス、從テ軍艦船舶ニ關スル經費ハ殆ト建物費ト殆ト同一視スルコトヲ得。

國家ハ有事ノ日ニ於テ兵士并ニ軍需品運送ノ爲ニ船舶ヲ借リ上クルコトアリ、又平和ノ時ニ於テモ船舶ヲ借リ上クルコトナキニアラス、此目的ノ爲ニスル經費ハ船舶借上費ヲ爲ス。然レ

トモ普通ノ場合ニハ船舶ヲ國家ノ所有トナス、殊ニ軍艦ニ於テ然リトス、是ニ於テ艦艇獲得費ナルモノヲ生ズ、軍艦ハ既ニ述ヘタルカ如ク我國ニ於テハ二十四年ヲ以テ生命トス、他ノ船舶モ亦一定期間ノ生命ヲ有ス、其間時々船渠ニ入レテ修繕ヲ爲シ以テ保存ノ道ヲ講セサルベカラズ、是ニ於テ艦船修繕費ヲ生ズ。

3 動産費、國家ノ要スル動産ハ長ク使用ニ堪フル財ト一時的消費スベキ財トニ分ツベシ、前者ヲ使用品ト云ヒ後者ヲ消耗品ト云フ、使用品ハ更ニ之ヲ分テ、畜産類、機械器具、圖書トナスベシ。

(1) 國家ノ要スベキ畜産類ハ馬匹ヲ主トス、陸軍ニ騎兵隊ヲ存スル以上ハ馬匹ノ需要ハ頗ル大ナラサルベカラズ、之ニ要スル經費ヲ馬匹費トス、又我國ニテハ農商務省ニ於テ畜産獎勵ノ爲メ畜産試驗場并ニ種羊場ヲ設クルカ故ニ相當ノ畜産費ヲ要スベシ。

(2) 機械器具ハ大體ニ官廳ノ備品ト兵器ト作業用機械器具トニ分ツベシ。

(イ) 官廳ノ備品ハ卓、椅子、書籍、謄寫版、石版機械、種々ノ試驗用具、洒掃具等ニシテ之ニ要スル經費ヲ備品費トス。

(ロ) 兵器ハ銃砲并ニ其附屬具工兵器具輜重器具ノミナラズ、廣ク飛行機氣球軍用自動車等ヲモ包括ス、是等ニ要スル經費ヲ兵器費トス、兵器費ハ新調費ト修理費トニ分ツベシ。

(ハ) 作業用機械器具ハ其官業ノ種類ニ依テ異ルベク一々茲ニ之ヲ列擧スルコトヲ得ズ、是等ニ要スル經費ヲ作業用機械器具費トス。

(3) 諸官廳又ハ營造物ハ圖書ヲ必要トス、新聞雜誌報告書等モ其中ニ含ム、是等圖書ニ關スル經費ヲ圖書費トス、圖書ハ先ツ之ヲ買入レサルベカラス、又之ヲ製本セサルベカラス、故ニ圖書費ハ圖書購買費製本費タルベキモノトス、然ルニ官廳ハ自ラ又報告書其他ノ印刷物ヲ發行セサルベカラス、是ニ於テ印刷費ヲ生ス、圖書費ハ廣ク解スルトキハ印刷費ヲ含ム。

(4) 消耗品ハ其種類極テ多キモ被服、食糧、燃料、點燈、文房品、彈丸彈藥、原料品等ヲ其主ナルモノトス、是等ニ關スル經費ヲ消耗品費トス。

被服ハ廣ク身體ヲ纏フモノヲ總稱ス、被服ニ要スル經費ヲ被服費トス、陸海軍ニ於テハ兵士ニ被服ヲ給スルヲ以テ其經費ハ巨額ニ上ル監獄ニ於テモ亦然リトス、巡查其他ノ警察官モ亦夏冬服靴劍等ノ給與ヲ受ク是レ亦被服費ノ一トスベシ。

食料ニ要スル經費ヲ食糧費トス、多クノ人士ヲ養フ所ニ於テ之ヲ要スルコト多シ、陸海軍監獄ノ如キ是ナリ、陸軍ニ於テハ畜ニ人ヲ養フニ止ラス馬匹ヲ飼養セサルベカラス、故ニ之ヲ糧秣費ト云フ、人ノ食料ハ精米精麥其他副食物等ニシテ馬糧ハ大麥、燕麥、干草藁等トス、故ニ食糧費ハ米麥ノ價ニ依テ大ニ變動ス。

我國ニ於ケル陸海軍并ニ監獄署ノ需要スル米麥及賄料ヲ見ルニ左ノ如シ。(大正十年ノ豫算)

陸軍				海軍			
區分	一日定額	人馬數	數量	價	人數(士官及兵)	數量	價格
精米	(四合二勺)	營內下士 二二九,一〇九	二二,八〇三	一三,七五五,一九	六三,八四七	二,〇〇六,三八一	二,〇〇八,九九一
精麥	(一合八勺)	同	一,九七五	一,一五九,三三	同	六七,一五八	四八〇,四八九
賄料	(各埠平均十五錢七厘)	同	二四,七〇九	一,四〇九,三三	同	一	一〇,一七六,四三
小計				一五,三二三,八二			一五,三二三,八二
馬糧	將校	大麥 一貫三百匁	八,八〇三	一四,八八八,八三			
	校	高梁 一貫	一	一,〇〇〇,〇〇〇			
	將	燕麥 一貫	一	一,〇〇〇,〇〇〇			
	校	干草 一貫	一	一,〇〇〇,〇〇〇			
	校	藁 一貫	一	一,〇〇〇,〇〇〇			
	校	燕麥 一貫	一	一,〇〇〇,〇〇〇			
	校	高梁 一貫	一	一,〇〇〇,〇〇〇			
	校	干草 一貫	一	一,〇〇〇,〇〇〇			
	校	藁 一貫	一	一,〇〇〇,〇〇〇			
保管馬	大麥 一貫百匁	三六、	一	一,〇〇〇,〇〇〇			
	燕麥 一貫	一	一	一,〇〇〇,〇〇〇			
	高梁 一貫	一	一	一,〇〇〇,〇〇〇			
	干草 一貫	一	一	一,〇〇〇,〇〇〇			
	藁 一貫	一	一	一,〇〇〇,〇〇〇			
合計				一五,三二三,八二			一五,三二三,八二

監獄		人員		數量		價格	
一日定額	人員	數量	價	數量	價格	數量	價格
精米	二合四勺	五,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇
精麥	三合六勺	同	同	同	同	同	同
菜代	平均三錢	同	同	同	同	同	同
總計							

右表ニ依テ之ヲ觀レハ、陸海軍及ヒ監獄ニ於ケル兵卒囚徒ノ爲ニ供スル食糧費ハ約六千四百萬圓ニ達シ、米ヲ要スルコト約五十萬石、麥ヲ要スルコト亦二十五萬石ニ上ル。又以テ巨額ノ需要トセザルベカラス。

外務省	10,402	司法省	226,796
内務省	81,083	文部省	1,817,096
大藏省及内閣直轄	287,000	農商務省	263,800
陸軍省	1,827,733	逓信省	1,497,457
海軍省	233,673	計	5,136,327

逓信省、逓信事業費及ヒ海底電線敷設費中ニ於ケル薪炭油費ハ瓦斯電氣料ト區別セズ、其總額チ一、一一七、八四五圓ト計上セルガ故ニ、右表ノ合計額ヨリ多少差引カサルベカラズ。又鐵道省ノ各目明細書ニハ燃料費ハ汽車運轉費ノ中ニ於ケルモノ、外、之ヲ明記セズ、備用品費ノ中ニ混入ス。而シテ備用品費ノ總額ハ三、三二〇、三九九圓ニ上ル。其三分一チ薪炭ト見ルモ尙百餘萬圓ニ達スベシ。

以上述べル所ニ依テ之ヲ觀レバ、官業并ニ海軍艦船用ノ燃料費ト諸官廳用ノ燃料費ノ總計額ハ二億圓ニ達ス。以テ燃料費ガ我國總經費中ニ於テ占ムル地位ヲ想フベキナリ。最近各年度ニ於ケル官業ニ要スル石炭ノ消費量ヲ示セハ左ノ如シ。(噸單位)

大正元	1,023,880	同	五	5,853,472
同 二	1,177,111	同	六	1,133,810
同 三	1,137,001	同	七	1,263,767
同 四	523,012	同	八	1,273,800

1) 鐵道院、製鐵所ノ消費量ヲ關テ 2) 東京砲兵工廠、大阪砲兵工廠消費量ヲ關テ

斯クノ如ク國家ノ重要スル燃料ハ頗ル巨額ニ上ル。國家ガ如何ニ燃料市場ヲ動かカスノ力ヲ有スルカラ知ルベシ。

點燈ハ燃料ニ準ズベキモノニシテ之ニ要スル經費ヲ點燈費トス。瓦斯電燈料是ナリ。夜間執務スル場合、并ニ特定ノ設備中ニ晝夜、人ヲ收容スル場合ニ此經費ヲ要ス。郵便電信局、鐵道、兵營、軍港、艦船、病院等ニ之ヲ見ル。

文房品ハ諸帳簿、諸用紙、筆墨硯、墨汁、印肉、繪具、其他ノ文具類ヲ總稱シ、之ニ要スル經費ヲ文房費ト云フ。嚴格ニイヘバ筆墨硯等ハ備品トモ見ルコトヲ得ザルニアラザレトモ、紙類等ノ消耗品ト之ヲ離スベカラズ、故ニ文房費ノ中ニ之ヲ加フ。何レノ官廳ト雖トモ文房費ヲ要セザルハナシ。

彈丸彈藥ハ兵器ノ食料トモ見ルコトヲ得ベク、軍事上ニ於テ必須品タリ、之ニ關スル經費ヲ彈丸彈藥費ト云フ。戰時ハ勿論、平時ニ於テモ實彈射擊又ハ演習ヲ爲ス場合ニ於テ多ク彈丸彈藥ヲ消費スルガ故ニ其經費少カラザルモノトス。戰時ニ備フルガ爲ニ平時ヨリ彈丸彈藥ヲ相當ニ貯ヘ置クトキハ亦同一ノ結果ニ到着スベシ。

原料ハ官業ヲ爲ス所ニ於テ需要スルコト多シ、其品目ハ官業ノ種類ニ依ツテ異ル、之ニ要スル經費ヲ原料費ト云フ。

以上ハ國家ノ需要スベキ物件ニ就テ、主トシテ其獲得費保管費ヲ觀察シタルモノナルガ、是等ノ物件ハ其之ヲ使用スベキ所ニ運ハレザルベカラズ、是ニ於テ運送費ヲ生ズ。運送費ニ準スベキモノハ通信費ナリ。通信費トハ郵便電信電話料ニ外ナラズ。國家ガ郵便電信電話ヲ經營スルニモ拘ラズ國家政務ノ爲メニスル通信ニ關シテ料金ヲ徵スルハ矛盾ノ嫌アルノミナラズ一方ニ取テ他方ニ支拂ノ煩ヲ増スニ過キザルガ如ク見ユ。又實際ニ於テモ歐洲諸國ニテハ其初メ官廳用ノ通信ヲ無料トセシコトアリキ。然レトモ官廳用ノ通信ヲ無料トスルトキハ、官吏ハ官廳ノ名ヲ籍リテ漫ニ通信シ以テ徒ニ其通數ヲ増スノ虞アルノミナラズ、國庫統一主義ニモ反スルコトトナルベシ。苟モ收入ハ總テ國庫ニ入り經費ハ總テ國庫ヨリ支出スルノ主義ヲ採ル以上ハ郵便電信電話局ノ當然得ベキ通信料ハ之ヲ收入トシテ計上シ其他ノ官廳ノ當然支出スベキ通信料ハ經費トシテ計上セザルベカラズ。是レ近世ノ文明國ガ官廳用通信無料ノ制度ヲ改メタル所以ナリ。我國ニ於テモ各官廳ノ通信料ヲ支拂フモノトス。

二、物件費ノ學理的分類ハ以上述べタル如クナルガ、豫算ノ編成ニ際シテハ其費額ノ大小ニ依ツテ或ハ之ヲ一項トシ、或ハ數種ノ經費ヲ併セテ一項トス。例ハ被服費糧秣費ハ我陸軍省費ニ於テハ各一項ヲ爲スモ海軍省費ニ於テハ二者ヲ併セテ衣糧費ノ一項ヲ設ケ、其他ノ省ノ經費ニ於テハ雜費ノ一目ヲ爲スニ過ギズ。又新營費、修繕費ハ各一項ヲ形ヅクルヲ例トスルモ、或

ハ之ヲ併セテ營繕費ト名クルコトアリ、或ハ修繕費ヲ他ノ經費ト結び付クルコトアリ。

物件費ノ結合ハ此ノ如ク種々ナルガ、茲ニ各官廳ニ通シテ同一ノ編成方法ニ出ツルモノアリ、之ヲ廳費ト爲ス。

廳費 (Amtsbedürfniss; Bureaukosten)

トハ官廳ニ於テ政務ヲ行フニ伴フテ必ず要スベキ物件費ヲ云フ。蓋シ官廳事務ノ執行ニハ種々ノ動産ヲ必要トス。備品ハ其一ナリ、圖書ハ其二ナリ、消耗品ハ其三ナリ、又之ト同時ニ運輸通信ヲ爲スノ要アリトス。故ニ廳費ハ備品費、圖書費、消耗費、運輸通信費等ヨリ成ラサルベカラズ。

我國ノ豫算ニ依レハ、廳費ハ多ク備品費、圖書費及ヒ印刷費、文房費、消耗費、運輸通信費ヨリ成ル。筆紙墨其他ノ文房具費ハ何レノ官廳ニモ必要ナルノミナラズ、其額ニ於テ少カラザレハ之ヲ他ノ消耗品ト離シテ一目トスルハ理由ナシトスベカラズ。

第二款 物件獲得方法

物件費ニ於テハ物件獲得費ガ重キヲ爲スガ故ニ少シク物件獲得方法ニ就テ考察セントス。

國家ガ其需要ナル物件ヲ獲得スル方法ハ之ヲ三トス、買上法、請負法、自己生産法是ナリ。

一、買上トハ國家公共團體ガ其需要スル物品ヲ民間ヨリ買上グルヲ云フ。此買上ゲノ爲メニ支出スル經費ヲ購入費トス。國民經濟ガ發達シ諸種ノ物件ガ多量ニ生産セララルトキハ國家ガ

何時ニテモ市場ニ出テテ買上ルコト難キニアラズ。然レドモ國家ハ其買上ニ際シ、一方ニ於テハ國民經濟政策ト調和ヲ保タザルベカラサルト同時ニ、他方ニ於テハ經濟主義ニ從ヒ廉價ニテ獲得スルコトヲ努メザルベカラズ。是ニ於テ二ノ買上方法ヲ生ズ。物價下落ノ時期ヲ選ンデ定期取引ニ於テ先物ヲ買取ルハ其一ニシテ、供給者ヲシテ競争入札ヲナサシメ最モ廉價ナル申込ヲナス者ヨリ買取ルハ其二ナリ。

定期取引ハ總テノ物件ニ就テ行ハルモノニアラズ、我國ニ就テ之ヲイヘバ定期市場ヲ利用シ得ルハ米ノミ。是レ理論ニ於テハ行ハルベキモノナレドモ實際ニ於テハ國家ノ官吏ハ定期市場ノ事情ニ暗ケレバ、之ヲ利用スルコト頗ル困難ナリトス。

競争入札方法ハ供給者ヲシテ競争セシムルコトヲ趣旨トス。此方法ハ自由競争ノ經濟界ニ於テ最モ自然的ニシテ、財政ニ於テ殊ニ正當ナル理由ヲ有ス。蓋シ隨意契約ニ任ストキハ會計ノ局ニ當ル官吏ハ巧ニ奸商ト結ヒ高價ニテ物品ヲ買上ゲ、國家公共團體ノ不利益ヲ顧ミサレバナリ。是レ我會計法ガ競争入札ヲ以テ原則トスル所以ナリ（改正會計法第三十一條、舊會計法第八章）。

競争入札ハ隨意契約ノ弊ヲ矯ムルコトヲ得レドモ、又必ズシモ缺點ナシトスベカラズ。競争入札ニ於テハ、落札者ハ價ヲ廉ニセンコトノミヲ慮リ、物ノ品質ヲ低下シテ顧ミル所ナシ。是レ生産ノ標準ヲ低落セシムルコトニ歸シ、一國國民經濟ノ發達ヲ期スル所以ニアラズ。加之競

争入札法ハ自由競争ヲ前提トス、若シ自由競争ガ制限セラレルトキハ競争入札ノ利益ハ之ヲ收ムルニ由ナシ。夫ノかるてる、とらすこノ如キ企業聯合、企業合同ガ成立シテ企業家ノ團體ガ市場ヲ制スルニ至ラバ競争入札ノ制度ハ有レドモ無キガ如クナルベシ。又假令是等ノ企業聯合企業合同ガ成ラサルモ、入札者ガ互ニ協定シ其一人ヲシテ比較的高價ニテ落札セシメ、後其利益ヲ分配スルコトヲ圖ラバ競争入札ノ制度ヲ精神的ニ殺スコトヲ得ベキナリ。

競争入札ハ公告ヲ競争ニ附スルモノナルガ、前述ノ如ク却テ國家ノ爲メニ不利ヲ招クコトナキニアラズ。此ノ如キ場合ニ於テハ政府ハ指名競争ニ附シ又ハ隨意契約ニ依ルコトヲ得ベキナリ。（改正會計法第三十一條二項）

二、以上ハ專ラ物件ノ買上ニ就テ論シタルガ、**工事ノ請負モ亦同様ニ論スルコトヲ得ヘシ、**我會計法ニ於テハ工事請負モ買上ト同シク原則トシテ競争入札ニ依ルモノトス（改正法三十一條）

元來工事ハ勞働ヲ用フルモノナルガ故ニ人件費トモ見ラレザルニアラズト雖トモ、一定ノ建築物其他出來上レル物件ヲ眼中ニスルモノト見ルヲ正當トス。是ガ故ニ工事ハ理論ニ於テ物件ノ買上ト異ルヘカラス。殊ニ國家ガ私人ニ請負ハシムル場合ニ於テハ、國家ハ其竣工シタル建物又ハ其他ノ物件ヲ受取ルニ過ギザルガ故ニ、工事費ガ物件費タルコト一點ノ疑ナシ。

工事ハ主トシテ建物、軍艦船舶等ニ就テ存ス。從テ工事費ナルモノハ新營費修繕費ヲ形クルモノトス。何レノ國ニ於テモ、年々工事ヲ爲スコト少カラザルガ、我國ニ於テモ各省ガ年々營

繕費トシテ支出スル額ハ頗ル多シ、思フニ各省分立シテ營繕費ヲ支出スルノ制ハ却テ其絕對額ヲ大ナラシメズンバ已マズ、故ニ若シ中央工。事。局ナルモノヲ設ケ、卓越セル技師ヲ任用シ、諸省諸官衙ノ工事ニ從事セシメ以テ自己生産ノ方法ヲ探ラハ一方ニハ入札制度ノ弊ヲ除キ他方ニハ各省分立ノ爲ニ生スル損失ヲ省キ却テ好成績ヲ得ベケン、蓋シ材料ヲ大口ニ購買スルコトヲ得テ比較的廉價トナルノミナラズ、一ノ官衙ニ於テ用フル材料ニ剩餘ヲ生スルモ之ヲ他ノ官衙ニ用フルコトヲ得テ、材料ノ過不及ヲ節スルコトトナルベケレハナリ。

三、自己生産トハ國家公共團體ガ其需用スル物品ヲ製造シテ自給ヲ計ルヲ云フ、故ニ又一種ノ官業ヲ形クルナリ、官業トナル以上ハ其物品ノ完成スル迄ニハ人件費ヲ要スルコトヲモ忘ルベカラズ。

國家ガ自給ノ方法ヲ採ルニハ種々ノ理由ナクンバアラズ、其物ガ製造上秘密ヲ要スル場合ハ其一ナリ、兵器製造ノ如シ、民間ノ工業幼稚ニシテ未タ國家ノ需要スル財ヲ迅速ニ完全ニ而モ有利ニ生産シ得サル場合ハ其二ナリ、製鐵ノ如シ、國家ノ需要スル財ガ巨額ニ達シ買上ヨリモ自己生産ニ依ルヲ廉トスル場合ハ其三ナリ。從テ國家ガ自己生産ヲ爲ス範圍ハ狭シトスベカラズ、國家カ自己生産ヲ爲ストキハ其何レノ理由ヨリスルヲ問ハズ、時々刻々ノ物價變動ノ影響ヲ受クルコト比較的少シトス、但シ材料品ノ買上ハ此限ニアラズ。

我國ニ於テモ上述ノ理由ニ依テ國家ノ自己生産ヲ爲スモノ少カラズ、即チ第一軍艦ハ海軍工廠ニ於テ自己製造ヲ爲ス、從前ニアリテハ主トシテ外國會社ニ注文セシモ今ヤ然ラズ、勿論今日ト雖トモ海軍工廠ノ造船力ニ限アレハ一部ハ之ヲ内國ノ造船所ニ請負ハシムルヲ例トス、次ニ兵器ハ海軍工廠并ニ東京大坂ノ砲兵工廠等ニ於テ自己製造ヲ爲スヲ原則トス、其他ノ動産ノ獲得ニ就テハ被服ノ材料タル絨ハ之ヲ製絨所ニ、軍艦兵器鐵道ノ材料タル鐵ハ製鐵所ニ、海軍ノ要スル石炭ハ其採炭所ニ、印紙切手葉書紙幣公債證書官報法令全書等ノ印刷ハ印刷局ニ仰ク、皆自己生産ノミ。是等ノ物件ニシテ自己生産ノミヲ以テ足ラサルモノニアリテハ其一部ヲ民間ヨリ買上クルコト論ヲ談タズ。只茲ニ一言スベキハ是等ノ官業ハ各特別會計ヲ爲スガ故ニ、其製品ハ其特別會計ヨリイヘバ賣拂トナリ之ヲ要スル官廳ヨリ云ヘハ買入トナルコト是ナリ、コハ計算ノ上ノミ、國家ガ自己生産ヲ爲シ、事實ニ於テ物件費ヲ節スルコトハ之ヲ爭フベカラズ。

要之、物件費ハ自己生産ノ方法ニ依ラサル以上ハ物價變動ノ影響ヲ被ルコト甚タシ、物價ノ騰貴ニ伴ヒ國費ノ膨脹スルハ、主トシテ物件購入費ノ高マルニ依ルト謂フベキナリ。

第二節 人 件 費 (Der Personalbedarf)

第一款 人件費ノ種別

國家ハ其職分ヲ遂クル爲ニ人ノ勞働ヲ要ス、從テ人ヲ使用セサルベカラズ、其人ニ關スル經費ヲ人件費ト云フ。

一、國家ノ需要スル勞働ニハ官吏ノ勤務アリ、普通勞働アリ、強制勞働アリ、臨時ノ場合ニ於ケル精神的勞働アリ、人件費ハ此等ノ勞働ニ對スル報酬ヨリ成ル、故ニ此四者ニ就テ別々ニ觀察セサルベカラズ。

(1) 國家カ官吏ノ勤務ヲ得ルニハ官吏ノ任命ニ依ル、官吏ノ任命ハ公權ノ作用ニ外ナラズト雖トモ、官吏トナル人ノ意思ヲ無視シテ之ヲ爲スモノニアラズ。故ニ學者或ハ之ヲ公法上ノ契約ト云フ、然レトモ官吏ノ任命ハ私法上ノ契約ト異リ、個人ト國家トハ同等ノ地位ニ立ツモノニアラス、一ヒ官吏トナレバ一般臣民ノ義務ノ外ニ官吏タル特別義務ヲ負フ、換言スレハ特別服從關係ニ入ルナリ、從テ官吏ノ勤務ニ服スルハ契約ノ結果ニアラズシテ官吏タル身分ノ結果ナリトス、是レ官吏ノ勤務ガ他ノ勞働ト大ニ趣ヲ異ニスル所以ナリ。

(イ) 官吏ハ特別服從關係ニ因リ職務ニ忠實ナル義務ヲ有ス、素ヨリ他ニ營利ヲナシ生活ノ資料ヲ得ル暇ナシ、故ニ國家ハ官吏ニ對シ其一生ノ生活ヲ保障セサルベカラズ、是ニ於テ在官中ニ

俸給アリ、退官後ニ恩給アリ、死後ニ遺族扶助料アリ、之ヲ總稱シテ廣義ノ俸給トス。

今日ノ國家ニアリテハ官吏ノ數極テ多ク其俸給費ハ巨額ニ上ル、是ニ於テ國ニ依テハ官吏ヲ或ハ名譽職トシ或ハ一時的任命トシテ俸給費ヲ輕フセントスルモノナキニアラズ、然レトモ素養アルモノヲ官吏トシ、長ク其地位ヲ保障シテ國家ノ事務ヲ執ラシムルハ却テ國務ヲ進捗セシムル所以ニシテ、其效果タル、名譽職ヤ一時的官吏ノ企及スル所ニアラズ、文明ノ進歩ハ分業ヲ要求ス、專問的官吏ノ發生ハ實ニ此分業ノ結果ニ外ナラズ、俸給費ノ巨額ニ達スルハ寧ロ現代文明ノ精神ヲ表現スルモノト謂ハザルベカラズ。

之ヲ要スルニ俸給費ハ人件費ノ中軸ヲ爲スモノナルカ故ニ余ハ欸ヲ改テ少シク詳ニ説カントス。

(ロ) 官吏ノ俸給ハ官吏ノ生活ヲ保障スルモノナルガ、官吏ガ勤務ヲ爲スニ際シテハ諸地方ニ出張シ或ハ實情ヲ調査シ或ハ事務ノ打合ヲ爲スノ必要ヲ生ス、是ニ於テ國家ハ官吏ニ對シテ旅費ヲ給セサルベカラズ、官吏カ轉勤ヲ命セラレシトキニ於テモ亦然リトス。

旅費ノ類ハ官吏ガ旅行ヲ爲スニ自費ヲ投スルノ要ナキヲ以テ程度トセザルベカラズ、薄キニ過クレハ官吏ニ對テ課スルト同シ結果ニ陷ルベク、多キニ過クレハ官吏ガ不必要ノ旅行ヲ爲サントスルノ弊ヲ生ズベクレハナリ。

我國ニ於テハ旅費ハ之ヲ外國旅費ト内國旅費トニ分ツ。
 外國旅費ハ船舶料、汽車料、客舎料、食卓料、日當支度料ヨリ成ル。船舶料汽車料ハ高等官列任官ニハ一等トシ、備員ニハ二等トシ。其他ノ經費ハ親任勅任奏任列任備員ノ五等ニ分チテ支給ス。
 内國旅費ハ鐵道賃、船賃、車馬賃、日當、宿泊料、食卓料ヨリ成リ、親任勅任奏任列任ノ四等ニ分チテ支給ス。但シ奏任列任ハ更ニ二階級ニ分ツ。尙赴任ノ場合ニ於テハ別ニ赴任手當、移轉料、家族移轉料ヲ給ス。而シテ實際其旅費額ナ如何ニ定ムルカト云フニ、鐵道賃及船賃ハ大藏大臣ノ定ムル所ニ從ヒ實際料金ニ依リ。車馬賃、日當、宿泊料、食卓料、移轉料ハ左表ニ依ルモノトス(内國旅費規則二條(括弧ハ舊規則))

官等階級	區分				
	親任	勅任	奏任(五等以上)	奏任(六等以下)	列任(五級俸以上)
車馬賃一里	1,400(圓)	1,100(圓)	700(圓)	500(圓)	300(圓)
宿泊料一夜	1,000(圓)	1,000(圓)	700(圓)	500(圓)	300(圓)
日當二日	11,000(圓)	8,000(圓)	6,000(圓)	4,000(圓)	2,000(圓)
食卓料一夜	2,000(圓)	1,500(圓)	1,000(圓)	700(圓)	500(圓)
移轉料	200圓以内(100)	150圓以内(100)	100圓以内(50)	70圓以内(50)	50圓以内(30)

右ノ定額ハ大正九年五月改正ニカカル、舊規則ニ比スレバ車馬賃宿泊料日當移轉料ハ大體三倍トナリ、食卓料ハ二倍強トナレリ。戰時以來物價ノ騰貴スルヤ、官吏ノ旅費ハ以テ實費ヲ支辨スルニ足ラザリシガ、此改正ニ依リ著シク改善セラルニ至レリ。

(ハ)官吏ノ勤務ヲ爲スニ當リテハ之ニ全力ヲ傾注セザルベカラザルハ論ヲ談タザルコトナルガ。國家ニ大功ヲ立テ事績ヲ擧グルコト顯著ナルモノニ至ツテハ、國家ハ之ヲ褒賞シ以テ之ニ酬ヒ

ザルベカラズ。勳位并ニ勳章ヲ授クルガ如キハ其一ナルガ、更ニ進ンデ或ハ一時金ヲ與ヘ或ハ年金ヲ給スルコトアリ。年金ハ之ヲ國家ヨリ見レバ年々一定額ヲ支拂ハザルベカラザルガ故ニ一種ノ公債ト見ルコトヲ得ベシ、是レ年金ガ恩給ト同様ニ公債費ニ準セラルル所以ナリ。一時金モ公債證書ヲ以テ支給スルトキハ同ジ結果ニ歸ス。

我國ニ於テ勳章ニ年金ヲ附スルハ、旭日勳章ト金鷄勳章ノ二ナリ。金鷄勳章年金ノ定額ハ、功一級千五百圓、功二級千圓、功三級七百圓、功四級五百圓、功五級三百圓、功六級二百圓、功七級百圓ニシテ、年金受領者死亡スルモ仍一年間遺族ニ之ヲ賜フ。

今最近ノ統計ニ就テ勳章年金ヲ受クル人員ト金額トヲ見ルニ左ノ如シ(大正九年十年ハ豫算、人員不詳)

年區分	旭日勳章		金鷄勳章		年金合計(圓)
	人員	金額(圓)	人員	金額(圓)	
明治三六	7,216	1,142,112	1,126	1,126,000	2,268,112
三七	7,116	1,126,000	1,126	1,126,000	2,252,000
三八	7,116	1,126,000	1,126	1,126,000	2,252,000
三九	7,116	1,126,000	1,126	1,126,000	2,252,000
四〇	7,116	1,126,000	1,126	1,126,000	2,252,000
四一	7,116	1,126,000	1,126	1,126,000	2,252,000
四二	7,116	1,126,000	1,126	1,126,000	2,252,000
四三	7,116	1,126,000	1,126	1,126,000	2,252,000
四四	7,116	1,126,000	1,126	1,126,000	2,252,000

大正元	六,028	三,四二二	六六,八五九	八,八五〇,七〇〇	八,八九三,九八三
二	六,020	三,三三三	六六,三九一	八,四三三,九〇〇	八,七九七,三〇七
三	五,九二七	三,二二二	六六,四二一	八,四三三,九〇〇	八,七八八,二九八
四	五,七九三	三,一三三	六六,二四三	八,二九四,一〇〇	八,六〇七,六七一
五	五,六六〇	三,〇四四	六六,九七七	八,五七二,〇〇〇	八,八七一,八九六
六	五,五二二	二,九五五	六六,四〇六	八,四九〇,三〇〇	八,八七一,八九六
七	五,三九〇	二,八六六	六六,八五九	八,四〇〇,〇〇〇	八,七八五,七四二
八	五,二五九	二,七七五	六五,五一九	八,三〇〇,〇〇〇	八,六八八,三三三
九	—	二,八二二	—	八,三〇〇,〇〇〇	八,六〇五,九三三
一〇	—	二,八二二	—	九,三三三,九〇〇	九,六三三,四四四
	—	二,八二二	—	九,九四八,七〇〇	一〇,三〇六,九四四

旭日勸業年金ハ漸次減少シ行クモ、金勸業年金ハ世界戦ニ依ツテ再ヒ増加シ來リ、大正十年ニハ兩年金ノ總額千萬圓ヲ越
 ニルニ至レリ、又少額トスベカラズ。

(2) 普通労働ヲ得ルニハ概ネ雇傭契約ニ依ル。故ニ國家ハ私人ト私法上ノ契約ヲ結フモノニ
 シテ私人ハ國家ト對等ノ地位ニ立チ自由意思ニ依ツテ之ヲ決ス。斯クノ如キ雇傭契約ニ依ツテ
 労働者ノ得ベキ報酬ハ普通ノ給料ナリ。給料ハ勞賃ノ理論ヲ以テ之ヲ律セザルベカラズ。

普通労働ト云フモ、其労働ノ性質種類其人ノ素養如何ニ依ツテ大ニ異ルモノアリ、故ニ主ト
 シテ機械的ノ労働ニ服スルモノト然ラザルモノトヲ區別セザルベカラズ、前者ヲ傭人ト云ヒ後
 者ヲ雇員ト云フ。

傭人ハ小使、給仕、守衛、巡視、電話交換手、番人、馭者、運轉手、職工、定傭人夫女等ヲ
 總稱シ、之ニ對スル報酬ヲ傭人料ト云フ。傭人料ハ多ク日給トス、此種ノ労働ハ何レノ官廳ニ
 於テモ多少之ヲ要セサルハナキガ、官業ヲ營ム所ニ於テハ職工人夫ヲ要スルコト殊ニ多シトス、

從テ其職工人夫給ハ勢ヒ巨額ニ上ルベシ。

雇員ハ事務處辨雇、技術勤務雇ヲ總稱シ、之ニ對スル報酬ヲ雇員給ト云フ。雇員ノ地位ハ官
 吏殊ニ判任官ニ近カク、雇員給ハ下級判任官ノ俸給ニ近似ス。

我國ニ於テハ豫算上、雇員給ト傭人料トヲ異レル目トナスナ例トスルモ、其區別ハ省ニ依ツテ必ズシモ一定セズ。而シテ其
 雇員給并ニ傭人料ノ額ニ至テハ、官廳并ニ營造物ノ全國ニ普ク行キ巨ルモノニ於テ頗ル多ク、多クノ職工人夫ヲ使用スル官
 業ニ於テ更ニ多シトス。

今大正十年ノ豫算ニ依テ其主ナルモノヲ示セバ左ノ如シ。(官業ノ職工人夫給ハ便宜上、之ヲ傭人料ヨリ區別ス、)

普通	官廳		官業		
	雇員給	傭人料	雇員給	傭人料	職工人夫給
外務省	108,474	28,079	43,800	21,733	2,832,843
内務省	576,000	219,511	46,800	46,733	11,133,293
大藏省	1,125,000	100,133	79,800	49,988	1,338,883
陸軍省	1,110,000	311,666	96,768	207,488	10,328,221
海軍省	1,110,000	311,666	96,768	207,488	7,212,210
司法省	1,517,805	82,886	—	—	—
其他	1,517,805	82,886	—	—	—
合計	10,874,000	3,874,000	2,832,843	1,133,293	28,328,221

文部省(一般會計)	八五,〇八〇	六六,四五一	一〇,一三九	一〇,一三九	一〇,一三九	一〇,一三九	一〇,一三九
農商務省(官業ヲ除ク)	一,〇〇,六二五	二〇,三三三	七,八〇〇	七,八〇〇	七,八〇〇	七,八〇〇	七,八〇〇
逓信省(官業ヲ除ク)	八七五,〇〇〇	一,一八二,九七一	一,一八二,九七一	一,一八二,九七一	一,一八二,九七一	一,一八二,九七一	一,一八二,九七一
計	七,七三六,四三三	一三,九九九,九六三	一三,九九九,九六三	一三,九九九,九六三	一三,九九九,九六三	一三,九九九,九六三	一三,九九九,九六三

更ニ雇員備人并ニ諸官廳直轄工場ニ於ケル職工ニ就テ其員數及ヒ給料ノ増加シ來リシ跡ヲ尋ヌルニ左ノ如シ。(* 戰時中陸海軍所管官業ノ調査ヲ關ク)

年 度	雇 員 及 備 人		職 員		工 人		總 計	
	人 員	備 人	人 員	一ヶ年給料總額	人 員	一ヶ年給料總額	人 員	一ヶ年給料總額
明治 三六	五二,九三三	九,〇〇三,五八六	六,一七三	九,三三九,七五七	一,一七九	一,一七九	一八,八二二,八三三	
三七	四八,六三七	八,八八一,〇〇〇	* 一〇,五八二	* 一,六三一,四七七	五九,三三九	一〇,〇七二,七二七	一〇,〇七二,七二七	
三八	四一,六二五	八,八八七,〇〇〇	* 一五,五八八	* 三,五三〇,六六八	六七,二〇八	一三,一七九,七三〇	一三,一七九,七三〇	
三九	三八,三〇六	八,八三三,五〇〇	一五,八二二	三,一五八,一〇一	一六九,一四九	一三,一七九,七三〇	一三,一七九,七三〇	
四〇	三三,三三〇	八,七〇〇,〇〇〇	一四,七七一	三,一五八,一〇一	一六九,一四九	一三,一七九,七三〇	一三,一七九,七三〇	
四一	九八,一八八	八,一〇三,〇〇〇	一〇,七九七	三,一五八,一〇一	一六九,一四九	一三,一七九,七三〇	一三,一七九,七三〇	
四二	一〇〇,五八八	八,一〇三,〇〇〇	一〇,七九七	三,一五八,一〇一	一六九,一四九	一三,一七九,七三〇	一三,一七九,七三〇	
四三	一六六,六六七	八,一〇三,〇〇〇	九,九八八	三,一五八,一〇一	一六九,一四九	一三,一七九,七三〇	一三,一七九,七三〇	
四四	二二四,六七六	八,一〇三,〇〇〇	一〇,八八八	三,一五八,一〇一	一六九,一四九	一三,一七九,七三〇	一三,一七九,七三〇	
大 正 二	三三,八三六	七,〇七二,八七六	一三,七〇八	三,一五八,一〇一	一六九,一四九	一三,一七九,七三〇	一三,一七九,七三〇	
元 二	二八,三三三	七,〇七二,八七六	一三,七〇八	三,一五八,一〇一	一六九,一四九	一三,一七九,七三〇	一三,一七九,七三〇	

八	一八,一八六	七,〇七二,八七六	一三,七〇八	三,一五八,一〇一	一六九,一四九	一三,一七九,七三〇	一三,一七九,七三〇
七	一五,〇〇三	七,〇七二,八七六	一三,七〇八	三,一五八,一〇一	一六九,一四九	一三,一七九,七三〇	一三,一七九,七三〇
六	一四,〇〇三	七,〇七二,八七六	一三,七〇八	三,一五八,一〇一	一六九,一四九	一三,一七九,七三〇	一三,一七九,七三〇
五	一四,〇〇三	七,〇七二,八七六	一三,七〇八	三,一五八,一〇一	一六九,一四九	一三,一七九,七三〇	一三,一七九,七三〇
四	一四,〇〇三	七,〇七二,八七六	一三,七〇八	三,一五八,一〇一	一六九,一四九	一三,一七九,七三〇	一三,一七九,七三〇
三	一四,〇〇三	七,〇七二,八七六	一三,七〇八	三,一五八,一〇一	一六九,一四九	一三,一七九,七三〇	一三,一七九,七三〇

此表ニ依テ之ヲ觀ルモ、我國ノ政府ガ如何ニ多數労働者ノ雇主ニシテ其年年支拂フ給料ノ如何ニ巨額ニ達スルカヲ知ルベシ。

(3) 強制労働ヲ得ルハ權力關係ニ依ル。之ヲ人民ノ方ヨリ見レバ、其勞務ニ就テハ、臣民タル一般義務ニ基クモノニシテ、自由意思ニ依ツテ決スルモノニアラズ。例ヘバ徵兵ノ如シ。既ニ臣民タル一般義務ニ服ストセバ、必ズシモ之ニ對シテ報酬ヲ期待スベキニアラズ。然レドモ今日ノ國家ハ此ノ如キ労働ニ對シテモ尙多少ノ給料ヲ與フルヲ常トス。其給料ハ公法的规定ニ依ツテ定マルモノニシテ、契約ニ依ツテ定マルモノニアラズ、從テ普通労働者ノ得ル給料ヨリモ遙ニ低シ、是レ徵兵制度ヲ採ル國ノ國防費カ比較的少キヲ得ル所以ナリ。此ノ如ク給料低キモ其強制労働ニ就ク人ノ數ノ加ハルニ從ヒ、之カ爲ニ費ス額ハ決シテ少シトセザルナリ。我國ノ陸海軍ニ於ケル卒ノ給料ハ、豫算ニ於テハ之ヲ卒俸給トシ俸給中ニ數フレトモ、他ノ官吏俸給ト同一視スベカラズ。今大正十年ノ豫算ニ依テ其費額ヲ示セハ左ノ如シ。

年	陸	海	給料額(圓)	
			甲類	乙類
上等兵	21,114.15	11,111.11	11,111.11	11,111.11
一、二等卒	10,110.10	10,110.10	10,110.10	10,110.10
補充兵	10,110.10	10,110.10	10,110.10	10,110.10
豫後備上等兵	28,110.10	11,111.11	11,111.11	11,111.11
豫後備諸卒	28,110.10	11,111.11	11,111.11	11,111.11
計	115,614.45	53,777.44	53,777.44	53,777.44
總計	169,391.90	107,554.88	107,554.88	107,554.88

(4) 臨時の場合ニ於ケル精神的勞働ヲ得ルニハ、國家ガ學識經驗ヲ有シ技術ニ達スルモノニ一定ノ事務ヲ取扱フコトヲ囑託スルニ依ル。委員講師等ノ名ヲ以テスルモノ是レナリ。是等ノ勤務ハ官吏トシテノ勤務ニアラズ、又普通勞働者ノ執ルベキ勞働ニアラズ。國家ハ是等ノ勤務ニ對シテ手當、謝金、其他種々ノ名義ニ於ケル給與ヲ給ス。

我國ニ於テハ、調査會、委員會、講習會等ヲ組織スルコト少カラズト雖モ、委員講師等ノ手當ハ其額多キニ上ラズ。

二、人件費ノ學理的分類ハ以上述べタルガ、豫算ノ編成ニ際シテニ其費額ノ大小ニ依ツテ或ハ之ヲ一項トシ、或ハ之ヲ二三項ニ分テ、或ハ數種ヲ合シテ一項トス。

我國ノ豫算ニ就テ之ヲ見ルニ、狹義ノ俸給ニ關スル經費ヲ俸給費トシ、各官廳毎ニ之ヲ存シ恩給(遺族扶助料等ヲ含ム)ハ別ニ一項トシテ遞信省內ノ所管トシ、旅費雇員給備人料并ニ手當

等ノ給與ハ之ヲ併セテ雜給ト名ケ雜費ト共ニ一項ヲ形ラシメ各官廳ニ存スルヲ例トス、雜費ノ内容ハ雜駁ニシテ一ナラサレトモ、翻譯料、寫字料、諸謝金、手数料、廣告料、舟車馬備貸、借家借地料、賄費、接待費、道路給水費、掃除費其他ノ雜用費ヲ含ムヲ常トス、其多クハ雜給ト類似スルモノアレトモ借家借地料、賄料ノ如キハ物件費ニ屬ス、之ヲ人件費ノ雜給ト同一項中ニ置テ相流用スルコトヲ許スハ事ノ性質上當ヲ得タルモノニアラズ、已ムナクンハ物件ヲ以テ人件費ノ薄キヲ補フモノト云ハンノミ。

以上述べタルカ如ク人件費中ニハ普通勞働者ニ對スル給料モアレトモ、俸給費并ニ強制勞働ニ對スル手當ヲ以テ主ナルモノトス、然ルニ俸給并ニ手當ハ公法の規定ニ從フモノナルカ故ニ、物價變動ニヨリテ必スシモ増減セラルベキニアラズ、勿論物價騰貴シテ而モ久シキニ亘ラバ俸給手當モ亦増ササルベカラサレトモ、一年中ニ生スル物價ノ騰落ニ依リテ俸給手當ヲ改ムベキニアラズ、故ニ豫算ヲ編成スルニ當リテ物價變動ヲ眼中ニセズシテ之ヲ計上スルコトヲ得ベシ、是レ物件費ト大ニ其趣ヲ異ニスル所ナリ。

第二款 俸給費

俸給ハ官吏ヲシテ身分地位ニ應シテ生活セシムルカ爲ニ國家ノ與フル給與ナリ、サレハ官吏

カ職ヲ執ル間之ヲ支給セサルベカラサルコト勿論ナルガ、官吏ガ一時職ヲ失ヒタル後ト雖トモ再ヒ之ニ就クカラニハ尙之ヲ支給セサルベカラズ、蓋シ官吏ハ一時職ヲ失ヒタリトテ直ニ營利業ニ從事シ得ルモノニアラズ從テ俸給ヲ支給セサレハ忽チ衣食ニ窮スルニ至ルベケレハナリ、此ノ如キ俸給ヲ非職給ト云フ、之ニ對シ職ヲ執ルモノニ支給スル俸給ヲ在職俸ト云フ。然レトモ官吏ノ俸給ハ之ヲ以テ終レリトスベカラズ、官吏ガ退官シタル後ハ勿論死亡シタル後迄ニモ之ヲ延長セサルベカラズ、蓋シ官吏カ退官シタル後ニ生活ニ窮シ其死亡シタル後ニ遺族ノ路頭ニ迷フカ如キコトアリテハ官吏ハ到底安ジテ一生ヲ國家ノ爲ニ捧クルコトヲ得サルベケレハナリ、是ニ於テ恩給并ニ遺族扶助料ナルモノヲ生ス。

是等在職俸ト非職給ト恩給遺族扶助料トハ相集テ廣義ノ俸給ヲ形クルモノニシテ、學者之ヲ總俸給 (Totalgehalt) ト云フわぐねる (Wagner) ノ如シ、官吏ガ一生ヲ國家ニ捧ケルトセハ國家ハ一生ヲ通シテ之カ生活ヲ保障セサルベカラズ、故ニ俸給ハ在職ノ當時ヨリ退官ノ後死亡ノ後ニ迄及テ初テ完シ、是レ總俸給ノ名アル所以ナリ。

第一項 在 職 俸 (Der Aktivitätsgelalt)

第一目 俸給額ノ標準

一、官吏ノ勤務ヲ一ノ勞働ト見做シ俸給ヲ勞賃ト見ルモノナキニアラズト雖トモ、前ニモ述ヘ

タルカ如ク官吏關係ハ雇傭關係ニアラズ、從テ勞賃ヲ支配スル原則ヲ以テ俸給ニ擬スルコト能ハス、俸給ヲ支配スル原則ハ自ラ一種特獨ノモノタルナリ。

勞賃ハ勞働ノ需要供給并ニ勞働ノ能率ニ依テ決スルモノナレトモ、俸給ハ官吏志望者ノ數ノ多寡ニヨリ又ハ其自由競争ニ依リテ決スルモノニアラズ、又官吏ノ働キ振如何ニ依リテ決スルモノニアラス。又勞賃ハ勞働者ノ資本金ニ對スル勢力如何ニ依テ之ヲ左右シ得ルモノナルガ故ニ勞働者ハ勞働組合ノ力ニ由リ同盟罷業ニ由リ勞賃ヲ高メ得ルガ、官吏ハ反之組合ノ力ニ依リ同盟罷業ニ依リ俸給ヲ高メ得ルモノニアラス、國家ハ俸給ニ關スル規定ヲ作り、一定ノ官職ヲ帶フルモノニハ一定ノ俸給ヲ支給スルコトヲ定ム、俸給令即チ是ナリ、然ラハ俸給令ニ於テ俸給ニ關スル規定ハ如何ニ定ムベキ乎ト云フニハ俸給ヲ支配スル原則ニ從ハサルベカラズ。

二、官吏ハ既ニ述ヘシカ如ク其職務ニ忠實ナラサルベカラズ、自ラ利ヲ營ミテ生活ノ資料ヲ得ルノ追ナシ、是ニ於テカ官吏ニハ俸給ヲ與ヘ之ヲシテ地位相應ノ生活ヲ爲スニ差支ナカラシムルナリ、サレハ俸給ハ官吏ガ地位相應ノ生活ヲ爲スニ要スル資料ノ幾何ナリヤニヨリテ之ヲ決セサルベカラズ、官吏ガ地位相應ノ生活ヲ爲スハ地位の欲望ヲ滿タスニ外ナラズ、既ニ地位の欲望ヲ充タスト云ヘハ其前ニ必須の欲望ヲ充タササルベカラサルコトハ論ヲ待タズ。

必須の欲望ハ生活ノ必需品ニ對スル欲望ナリ、此ノ如キ欲望ハ家族ノ増スニ從テ大トナルヘ

キカ故ニ俸給ハ官吏ノ年齢ノ加ハルニ伴テ之ヲ増ササルベカラズ。

地位的欲望ハ官吏ノ地位ニ應スル欲望ナリ、官吏ハ其階級ノ上下ニ依テ地位ヲ異ニスルモノナレトモ、大體ヨリイヘハ其上級官ハ社會階級ノ上級ニ位シ、其他ハ社會階級ノ中級ヲ占ムベキモノトス、蓋シ國家ノ權力ヲ行フ官吏カ社會階級ノ下層ニ屬スルニ至テハ以テ官ノ威嚴ヲ保ツコト能ハサレハナリ、故ニ官吏ノ地位的欲望ハ社會ノ上中級ガ身分相應ニ抱ク欲望ト相比スベキナリ、只官吏ハ一方ニ爵位勳章等ヲ以テ一身ヲ飾ルカ故ニ民間ノ人ト雁行シテ物質的豪奢ノ生活ヲ營マズト雖トモ、以テ社會上ノ地位ヲ維持シテ而モ之ヲ毀クルコトナケレハ官吏ノ俸給ハ民間實業家ノ收入ヨリ少キモ妨ケズ、サハイヘ官吏ノ俸給ガ會社員等衣食ノ道ヲ實業界ニ求ムルモノノ給料ニ比シ甚シク懸絶スルハ斷シテ不可ナリ、事茲ニ至ラハ高材逸足ノ徒ハ相胥ヲ官界ヲ去ルベケレバナリ。

以上述フルカ如ク俸給ハ官吏ノ必須的欲望并ニ地位的欲望ヲ滿タスニ十分ナルモノナラサルベカラズ。

三、或ハ曰ク官吏ハ其修業ノ爲ニ費セシ教育資金ヲ償還セサルベカラザルカ故ニ俸給ハ其教育資金ノ元利成崩ニヨル年金割ヲモ支拂ヒ得サルベカラズト、然レトモ教育ハ由來放資ノ一方法トシテ施サルルモノニアラズ、從テ官吏自己ノ教育費ヲ俸給ニヨリテ償還セントスルハ穩當

ニアラズ、之ニ反シテ官吏ノ子弟ハ官吏之ヲ教育セサルベカラサルカ故ニ其教育費ハ官吏ノ地位的欲望ヲ充タスモノトシテ俸給中ヨリ支拂ヒ得サルベカラズ。

或ハ曰ク俸給ハ之ニヨリ疾病事變ニ對スル保險掛金并ニ遺族ノ生活費支辨ノ爲メニスル貯蓄ヲ支拂ヒ得ルモノタルヲ要スト、恩給并ニ遺族扶助料ノ多キ國ニ於テハ在職俸ニ於テ之ヲ斟酌スルノ必要ナキモ、然ラサル國ニ於テハ、是レ亦官吏ノ必須的欲望ヲ形クルモノト謂ハサルベカラズ。

第二目 俸給ノ差等

俸給ハ前述フルカ如ク、官吏ノ必須的欲望并ニ地位的欲望ヲ充タスニ十分ナラサルベカラズ、從テ少壯ノ士ガ初テ官吏ニ任命セラレタルトキハ少クトモ比較的少額ノ俸給ヲ與フベシ、長ク無給ト爲スハ、之ヲシテ徒ニ不安定ノ生活ヲ營マシムルニ了ルベケレハ斷シテ不可ナリ。然リ而シテ官吏ハ家族ノ増加地位ノ上進ニ依テ必須的欲望並ニ地位的欲望ヲ進ムルカ故ニ職務ノ重クナルニ從テ俸給ヲ増シ服務年限ノ長キニ從テ俸給ヲ多クセザルベカラズ。

一、職務ニ依ル俸給ノ差等。官吏ニハ上下階級アリ階級ノ高キモノ程重要ナル職務ヲ執ルヲ普通トス、俸給ハ官職ノ高キモノ程高クセサルベカラズ、蓋シ官職ノ高キモノノ地位的欲望ハ自然ニ高マラサルベカラサレハナリ。然レトモ地位高キ者ニ不相當ニ巨額ノ俸給ヲ與ヘ地位卑

キモノトノ間ニ甚シキ懸隔ヲ生ズルハ不可ナリ。蓋シ過度ノ名譽心ヲ刺戟シ、上官ニ阿諛シ、
獵官ニ熱中スルノ弊ヲ生ズレバナリ。又最高官吏ニ高キ俸給ヲ與フルコトハ當ヲ得タルモノナ
レドモ其額大ニ過グルハ却ツテ國家ノ爲メニ不祥事タラズンバアラズ。奈翁三世ノ高官ガ數十
萬法ノ俸給ヲ得タリシ如キ一例トスベシ。

俸給ハ官吏ノ地位ノ異ナルニ從ヒ之ヲ異ニスベキガ、更ニ官吏ノ地位ガ同ジキ場合ニ於テモ
職務ヲ執ル地方ノ如何ニ依リ、又ハ職務ノ性質如何ニ依ツテ之ヲ異ニセザルベカラズ。蓋シ職
務ヲ執ル地方如何ニ依ツテ官吏ノ生活費ニ差ヲ生ズベク、職務ノ性質如何ニ依ツテ住居其他ノ
關係ニ相違ヲ生ズベケレバナリ。

我國ニ於テハ俸給ニ關シテハ文官ト武官トヲ分チ、別々ニ之ヲ定ム。

文官ニ就テハ高等官官等俸給令ニ依リ、高等官ト判任官トヲ分チ、高等官ハ總理大臣壹萬貳千圓、各省大臣、
朝鮮總督八千圓ヲ初メトシ、樞密院議長、特命全權大使、臺灣總督、關東長官、判事、檢事、會計検査院長、行政裁判所長
七千五百圓、樞密院副議長、國勢院總裁、朝鮮總督府政務總監七千圓、樞密顧問六千五百圓トス。勅任文官ノ俸給ハ内閣
書記官長、法制局長官、拓殖局長官、各省次官、内務技監、製鐵所技監、海外駐劄財務官、航空局長官、臺灣總督府總務長
官、朝鮮總督府判事、警視總監等ヲ六千五百圓トシ、賞勳局總裁、樞密院書記官長ヲ五千七百圓トシ、各省局長、其他ノ
局長、辨理公使、總領事、内務監察官、拓殖局長、國勢院部長ヲ五千貳百圓トシ、以下階級ヲ下リテ四千五百圓ニ及ブ。
委任文官及判任官ノ俸給ハ其階級ニ從ツテ差アリ。

武官ニ就テハ海陸軍大將ハ七千五百圓、中將ハ六千五百圓、少將ハ五千六百圓、大佐ハ四千六百圓、中佐ハ參千
百圓、少佐ハ貳千六百圓ナリトス。但シ陸軍中將ニシテ參謀總長教育總監ノ職ニ在ル者ハ年俸七千參百圓、軍司令官又ハ
師團長職ニ在ル者ハ年俸六千八百圓トシ、海軍中將ニシテ軍司令部長ノ職ニ在ル者ハ年俸七千參百圓トシ、橫須賀、吳、
佐世保鎮守府司令官ノ職ニ在ル者ハ七千圓迄増給スルコトヲ得。

二、服務年限ノ長短ニ依ル俸給ノ差等。服務年限ノ長キニ從テ俸給ヲ上ホス制度ハ種々アル
ガ之ヲ大別シテハ三トス。

其一ハ最古ノ式ニシテ、同一ノ官職ヲ帶フルモノヲモ地方ニ依リ俸給額ヲ異ニシ、其俸給ノ
低キ地方ヨリ初メ年ヲ經ルニ從テ俸給ノ高キ地ニ移スモノトス。地方ニ依テ官吏ノ生活費ニ差
等ヲ生スルカ故ニ俸給ニ差ヲ設クルハ至當ナレトモ、其レ以上ニ差等ヲ立テ、服務年限ノ長キ
ニ從テ俸給ヲ増スノ趣旨ヲ貫クコトハ困難ナリトス、故ニ今日ニ於テハ諸國多ク之ヲ採ラズ。
其二ハ各官職ニ對シ俸給ノ平均割、最高限、最低限ヲ定メ、最高限最低限ノ間ニ幾多ノ階段
ヲ設ケ、初任者ニハ最低限ヲ與ヘ上級者ノ死亡シ退官シ若クハ轉任スル場合ニ順次高キ俸給ニ
進ムルモノトス。

此制度ハ俸給ニ關スル進級ヲ上級官ノ異動ト云フ偶然ノ出來事ニカカラシムルガ故ニ才幹モ
相如キ服務年限モ同シキ官吏ニアリテモ或ル者ハ僥倖ヲ得テ速ニ俸給ヲ進メ得ルニ反シ、他ノ
者ハ長ク同一ノ俸給ニ止マルコトアルベク、公平ヲ缺クノ虞アリ。

其三ハ最新式ニシテ、同一官職ノ俸給ヲ數級ニ分チ一定年限ヲ經過スル毎ニ上級者ノ異動ニ
拘ラズ上級ノ俸給ニ進マシムルモノトス。

此制度ニテハ官吏ノ異動ナキ所ニテモ年ヲ經ルニ從ヒ、俸給ヲ進ムルモノ多キヲ加ヘ、俸給

費ハ膨脹シテ已マザルベシ。

我國ニテハ親任官并ニ或ル勅任官ニアリテハ前ニ述べタルガ如ク唯一ノ俸給ト定マレルガ故ニ昇進シテ其職ヲ得ルニアラザレバ其俸給ヲ得ザルモノナルガ。他ノ勅任官ニアリテハ俸給ニ等級ヲ設ケ。大學總長北海道廳長官製鐵所長官ハ二級ヲ分チテ年俸七千圓ト六千五百圓トシ。特命全權公使、大使館參事官、大審院部長、控訴院長、大審院檢事(二人)、朝鮮總督府高等法院檢事長、臺灣總督府高等法院檢事官長、朝鮮總督府各局長并ニ通信局長及關東廳事務總長ハ三級ヲ分チテ六千五百圓、五千七百圓、五千貳百圓トシ。地方長官(府縣知事、樺太廳長官、朝鮮總督府知事)製鐵所次長、官立大學長ハ三級ヲ分チ六千圓、五千五百圓、五千圓トシ。專賣局長官、會計檢査院部長、行政裁判所評定官(部長)、貴族院書記官長、朝鮮總督府醫院長并ニ中樞院書記官長、朝鮮總督府判檢事、關東廳法院判官、旅順工科學堂學長ハ二級ヲ分チ、五千七百圓ト五千貳百圓トシ。各廳技師、山林技師ハ四級ヲ分チ、六千圓、五千五百圓、五千貳百圓、四千八百圓トシ。各省參事官、法制局參事官、稅關長、稅務監督局長、鑛務署長、通信局長、鐵道局長、鐵道監察官其他ハ二級ニ分チ、五千貳百圓、四千八百圓トシ。陸海軍大學教官、官立大學教授、文部直轄諸學校長、判事、檢事、檢査官、行政裁判所評定官ハ三級ヲ分チ、五千貳百圓、四千八百圓、四千五百圓トス。

級	俸	第一號	第二號	第三號	級	俸	第一號	第二號	第三號
一級	級	8,400	8,000	7,600	七級	級	11,000	10,000	9,000
二級	級	8,000	7,600	7,200	八級	級	10,000	9,000	8,000
三級	級	7,600	7,200	6,800	九級	級	9,000	8,000	7,000
四級	級	7,200	6,800	6,400	十級	級	8,000	7,000	6,000
五級	級	6,800	6,400	6,000	十一級	級	7,000	6,000	5,000
六級	級	6,400	6,000	5,600			6,000	5,000	4,000

右表ノ示ス所ニ依レバ、委任官ノ俸給ハ等級ニ依ツテ異ル。等級ヲ同ジクスルモ各號ニ依ツテ異ル。而シテ其號ノ異ルハ官吏ノ種類ノ相違ニ依ルガ、第一號ニ依ル官吏ハ高等官三等乃至七等、第二號ニ依ルモノハ高等官四等乃至八等、第三號ニ依ルモノハ高等官五等以下トス。

此外官吏ニ依ツテハ特別ノ俸給表ニ從フモノアリ。其一ハ在外公館委任官。其二ハ特定官業ノ當局者及一定ノ學校長ニシテ委任タルモノ、(千住製紙所長朝鮮平壤鑛業所長及營林廠長、製鐵所理事、警察講習所長、文部直轄諸學校長、航路標識管理所長、臺灣高等商業學校長、臺灣醫學校長)。其三ハ海外駐劄財務官、專賣局部長、稅關長、稅務監督局長、鑛務署長等ノ委任タルモノ、朝鮮臺灣稅關長、其他教育感化其他文化ノ進歩ニ關係スル官吏(帝國大學教授、諸學校々長教授、督學官、史料編纂官、國立感化院長、帝國圖書館長)及港務官、測候所技師、消防司令、郡長、府縣警視、理事官等ナリ。是等特別ノ俸給表ヲ從フモノニアリテモ自ラ前掲一號二號ニ類似セル區別ヲ立ツ。判任官ノ俸給モ亦一級ヨリ十一級ニ分ツ、左ノ如シ。

級	俸	月額
一級	1,000	1,000
二級	950	950
三級	900	900
四級	850	850
五級	800	800
六級	750	750
七級	700	700
八級	650	650
九級	600	600
十級	550	550
十一級	500	500

武官ニ於テモ尉官以下ハ俸給ニ等級ヲ附ス。但シ少尉并ニ候補生ハ此限ニアラズ、即チ左ノ如シ。

陸海軍	大尉			中尉		少尉	候補生	准士官					
	一等	二等	三等	一等	二等			一等	二等	三等	四等		
	11,100	10,000	9,000	11,100	10,010	8,000	7,000	陸軍 9,000	海軍 11,000	1,000	1,100	1,000	2,000

三、俸給ハ官吏ヲシテ地位相應ノ生活ヲ營ムシムルヲ趣旨トス。是ガ故ニ物價ガ騰貴シ、生活費ガ高マルニ從ツテ増俸ヲ爲サザルベカラズ。而シテ其増俸ヲ爲スニ當リテハ、其俸給ノ本來ノ差等ニ鑑ミ斟酌ヲ加ヘサルベカラズ。蓋シ生活費ノ増加ニ因ツテ最モ苦ム者ハ下級官吏ナルガ故ニ下級官吏ニ對シテ増俸率ヲ高メザルベカラザレバナリ。我國ニ於ケル大正九年ノ増俸モ此趣旨ニ基キ、上ニ薄ク下ニ厚クスルノ方針ヲ以テ實行セラレタリ。其精神ハ之ヲ是認セサルベカラザレドモ、其増俸ノ平均率、七割一分（加俸ヲ加ヘテ算サス）ニ過キザルガ故ニ、未ダ以テ官吏ヲシテ地位相應ノ生活ヲ營マシムルニ十分ナリトスベカ、ザルナリ。

我國ニ於テハ、明治四十三年ニ増俸シテヨリ以來、物價大ニ昂騰シ、生活費甚ク増加シテ、官吏生活ヲ脅威スルニ至リシモ、増俸容易ニ行ハレズ、僅ニ世界戰ノ末期ニ當リテ、臨時手當ヲ給シテ一時ヲ糊塗スルニ過ギザリシガ、漸ク大正九年ニ及ンテ増俸ヲ斷行スルニ至レリ。其増俸率ハ、俸給ノ本來ノ差等ニ依ツテ同シカラザレドモ、大體ヲ云ヘバ文官ニ在リテハ、親任官ノガ、七分乃至三割（年俸七千五百圓以上ヲ得ル親任官ニハ増俸ナシ）、勅任官ノガ、三割乃至五割（多クハ千五百圓増）、判任官ノガ六割八分乃至十割、武官ニ在リテハ、士官以上ノガ二三割乃至七八割、准士官下士官ノガ六割乃至十五割ニ上ル。大體ニ於テ臨時手當ヲ据エ置キタルモノト見テ差支ナシ。前述ノ俸給額ハ増俸ノ結果タルモノトス。

第三目 加 俸

俸給ハ官吏ノ執ル職務ノ重キニ從ツテ之ヲ高クスルノミナラズ、服務年限ノ長キニ從ツテ之ヲ上ボスノ方針ヲ採ラザルベカラザルコト、前述ノ如クナルガ、俸給令ノ定ムル尋常一般ノ級俸

給ヲ以テシテハ實情ニ順應シテ其趣旨ヲ貫クコト能ハザルモノアリ。此弊ヲ救ハントセバ普通ノ俸給ニ附加シテ相當ノ額ヲ支給セザルベカラズ。此クシテ加俸ノ制度ヲ生ズ。加俸ニ對シテ普通ノ俸給ヲ本俸トス。

一、加俸ヲ給スル場合ハ之ヲ分ツテ二トス

(1) 加俸ハ服務年限ノ極メテ長ク其官ノ最高級俸ヲ受ケテ尙久シキニ及ブモノニ之ヲ給スルコトアリ。之ヲ年功加俸ト云フ。蓋シ一定ノ官職ニアル者ニ對シ、其官職ニ對スル最高ノ本俸ヲ與ヘタル後ハ幾年在職スルトモ本俸ヲ増スコトヲ得ザルガ故ニ此必要アリトス。

我國ニテハ勅任文官及奏任文官ニシテ五年以上其官ノ最高俸ヲ受ケテ在職シ其効績顯著ナル者ニハ七百圓以内ノ年功加俸ヲ給スルコトヲ得（高等文官俸給令第九條第十七條第十九條）

判任文官ニ就テハ一級俸ヲ受ケ五年ヲ超エ事務熟練優等ナル者ニ特ニ貳百圓迄ヲ給スルコトヲ得（判任官俸給令第四條）
稅關監吏、稅務吏、警部補、森林主事、貯金局書記補、簡易保險局書記補、逓信局書記補、通信書記補、逓信書記補、臺灣總督府通信手ノ如キ判任官ニシテ最上給俸ヲ受ケ三年ヲ超エ、事務熟練優等ナル者ニハ月額拾圓以内ヲ加給スルコトヲ得（判任官俸給令第十二條）

(2) 加俸ハ執務地方ノ如何ニ依ツテ給スルコトアリ。之ヲ任地加俸ト云フ。

執務地ハ外國ト殖民地ト内地トノ三ニ出デズ、從ツテ任地加俸ハ之ヲ外國在勤加俸、殖民地
在勤加俸、內國任地加俸ノ三トスベシ。

外國ハ内地ト生活状態ヲ異ニシ其生活費モ自然ニ高マルガ故ニ其駐在官ニハ在勤加俸ヲ給セザルベカラズ。而シテ外國ト云フモ其駐在シテ要スベキ生活費ハ國ニ依ツテ異ルベキヲ以テ國ニ依ツテ其加俸ノ度ヲ異ニスベキナリ。殖民地ハ外國ニ準ズベキモノニシテ其地ノ官吏ニ加俸ヲ給スルハ亦當然ト云ハザルベカラズ。内地ニ於テモ地方ニ依ツテ生活費ヲ異ニスルガ故ニ生活費ノ高キ地方ニ任セラレタル官吏ニ加俸ヲ給スルハ理ニ於テ不當ニアラズ。然レドモ地方ニ依ツテ差等ヲ設ケ而モ其實情ニ適應セザルトキハ却テ弊ヲ生スルガ故ニ之ヲ濫用スベカラズ。

我國ニ於テモ文官ノ外國在勤加俸トシテハ在外公館職員ノ在勤加俸アリ。例ヘバ大使ニシテ米ニ駐劄スル者ニ四萬五千圓、英佛ニ駐劄スル者ニ四萬圓、獨ニ駐劄スル者ニ參萬五千圓、伊露ニ駐劄スル者ニ參萬圓、澳ニ駐劄スル者ニ貳萬五千圓ヲ給シ。公使ニシテ瑞西、白、蘭、瑞典、波、希、西、伯ニ駐劄スル者ニ貳萬貳千圓、亞ニ駐劄スル者ニ貳萬五千圓、支ニ駐劄スル者ニ貳萬圓、墨智ニ駐劄スル者ニ壹萬八千圓、暹ニ駐劄スル者ニ壹萬五千圓ヲ給ス。總領事モ其駐在地ニ依ツテ在勤加俸ヲ異ニス。即チ紐育ニハ甲壹萬五千圓、乙壹萬參千圓、桑港ニハ甲壹萬四千圓、乙壹萬貳千圓、倫敦、漢堡、莫斯科、ほのろ、しごにい、とたわ、さんばうろニハ甲壹萬貳千圓、乙壹萬圓、上海、奉天ニハ甲壹萬壹千圓、乙九千圓、浦羅斯德、哈爾濱、新嘉坡、かるかつたニハ甲壹萬圓、乙八千圓、天津、漢口、まにらニハ、甲九千圓、乙八千圓、香港、廣東、濟南、ばたがわいあニハ甲八千五百圓、乙七千五百圓、吉林、開島、成都、福州ニハ、甲七千圓、乙六千圓ヲ給スルガ如シ。其他ハ之ヲ略ス。

殖民地ニ在勤加俸ノ朝鮮臺灣樺太關東州ノ文官ニ就テハ總督、長官ハ本俸ノ十分五、其他ノ高等官、試補及司法官試補ハ本俸ノ十分五以内、判任官ハ本俸ノ十分八以内トシ、其額ハ本屬長官之ヲ定ムルモノトス、但シ試補、司法官試補、六級以下ノ判任官及見習ノ加俸ハ月額七拾圓迄ヲ給スルコトヲ得ルナリ。

青島守備軍民政部職員ノ加俸ハ高等官ニ在リテハ本俸十分四、判任官ニアリテハ本俸十分ノ六トス。

武官ノ任地加俸ニ就テハ外國在勤加俸殖民地ニ在勤加俸ヲ存スルコト文官ト同シキモノアルノミナラス、更ニ内地在勤加俸ヲ存ズ、北海道在勤加俸即チ是ナリ。

武官ノ外國在勤加俸ハ左ノ如シ。(陸軍武官ノ外國駐在者ノ在勤俸ハ公使館附武官ノ在勤俸以内トス)

官名	任所	英米佛露	澳(蘭丁瑞典)	伊	支
大使館公使館	陸海軍將官	15,000	15,000	11,000	7,150(1,000圓以内ヲ増給シ得)
附武官	陸海軍佐官	10,000	9,500	7,500	5,000(200圓以内ヲ増給シ得)
大使館公使館	海軍尉官	9,500	8,500	6,500	4,500
附武官補佐官	海軍佐官	7,500	6,500	5,500	3,500
駐在	海軍尉官	6,500	5,500	4,500	3,000
	海軍特務士官准士官	6,000以内	5,000	4,000	3,000以内

以上ハ在外公館附武官并ニ西洋ニ駐在スル士官ニ關スルモノナルガ、支那ニ駐在スル者ト殖民地ニ駐在スル者トハ其距ルコト遠カラズ、故ニ茲ニ在支加俸ト殖民地加俸ト北海道加俸トヲ對照セントス。(支那駐劄陸軍部隊給與令第三條、朝鮮滿洲駐劄陸軍部隊給與令第四條同細則第五條ノ二、臺灣駐劄陸軍部隊給與規則第六條、同細則第三條、山東省又ハ南洋群島ニ在勤スル海軍軍人軍屬、及同地所在地海軍部隊附屬艦艇乗員ノ給與ニ關スル件、陸軍給與令第七條海軍給與令第二十三條)

官階任地		支那		朝鮮		滿洲		北海道		官階任地		海		南洋群島		臺灣朝鮮	
大將	25,500	大將	25,500	大將	25,500	大將	25,500	大將	25,500	大將	25,500	大將	25,500	大將	25,500	大將	25,500
中將	17,000	中將	17,000	中將	17,000	中將	17,000	中將	17,000	中將	17,000	中將	17,000	中將	17,000	中將	17,000
少將	11,500	少將	11,500	少將	11,500	少將	11,500	少將	11,500	少將	11,500	少將	11,500	少將	11,500	少將	11,500
大尉	8,500	大尉	8,500	大尉	8,500	大尉	8,500	大尉	8,500	大尉	8,500	大尉	8,500	大尉	8,500	大尉	8,500
中尉	7,000	中尉	7,000	中尉	7,000	中尉	7,000	中尉	7,000	中尉	7,000	中尉	7,000	中尉	7,000	中尉	7,000
少尉	6,000	少尉	6,000	少尉	6,000	少尉	6,000	少尉	6,000	少尉	6,000	少尉	6,000	少尉	6,000	少尉	6,000
准士官	5,500	准士官	5,500	准士官	5,500	准士官	5,500	准士官	5,500	准士官	5,500	准士官	5,500	准士官	5,500	准士官	5,500
營外居住下士	4,500	營外居住下士	4,500	營外居住下士	4,500	營外居住下士	4,500	營外居住下士	4,500	營外居住下士	4,500	營外居住下士	4,500	營外居住下士	營外居住下士	營外居住下士	營外居住下士
曹長	3,800	曹長	3,800	曹長	3,800	曹長	3,800	曹長	3,800	曹長	3,800	曹長	3,800	曹長	曹長	曹長	曹長
軍曹	3,200	軍曹	3,200	軍曹	3,200	軍曹	3,200	軍曹	3,200	軍曹	3,200	軍曹	3,200	軍曹	軍曹	軍曹	軍曹
伍長	2,800	伍長	2,800	伍長	2,800	伍長	2,800	伍長	2,800	伍長	2,800	伍長	2,800	伍長	伍長	伍長	伍長
下士	2,400	下士	2,400	下士	2,400	下士	2,400	下士	2,400	下士	2,400	下士	2,400	下士	下士	下士	下士
上等兵	1,900	上等兵	1,900	上等兵	1,900	上等兵	1,900	上等兵	1,900	上等兵	1,900	上等兵	1,900	上等兵	上等兵	上等兵	上等兵
二等卒	1,400	二等卒	1,400	二等卒	1,400	二等卒	1,400	二等卒	1,400	二等卒	1,400	二等卒	1,400	二等卒	二等卒	二等卒	二等卒

(3) 加俸ハ官吏ノ執ル職務ノ性質ニ依ツテ給スルコトアリ。之ヲ職務加俸ト云フ。一定ノ職ヲ帶ブル者ニ一般ニ之ヲ給スルアリ、又一定ノ職ヲ帶ブル者ガ特ニ一定ノ勤務ヲ爲ス場合ニ之ヲ給スルアリ。前者ヲ一般職務加俸ト云ヒ、後者ヲ勤務加俸ト云フ。我陸軍ノ隊長加俸、憲兵加俸、通譯加俸、技術加俸、懲治隊附加俸ノ如キハ前者ニ屬シ、航空加俸、航海加俸ノ如キハ後者ニ屬ス。尙此外ニ海軍ニハ特別加俸ナルモノヲ存ス。

●隊長加俸トハ聯隊長又ハ獨立隊長ノ職ニ在ル佐官ニ給スル加俸ニシテ、月額貳拾圓以内トス。
 ●憲兵加俸ハ憲兵、准士官下士上等兵ニ給スルモノニシテ、月額六圓。通譯加俸モ亦憲兵、准士官、下士、上等兵ニシテ通譯ヲ命セラレタル者ニ給スルモノニシテ月額五圓、四圓、參圓、貳圓ヲ分ツ。
 ●技術加俸ハ上等諸工長、樂長補、一、二、三等諸工長、樂手、樂手補ニ給スル加俸ニシテ、月額ニハ六圓、五圓、四圓、參圓ノ四級ヲ分ツ。
 ●懲治隊附加俸トハ懲治隊准士官以上ニ俸給六分ノ一、下士以下ニ給料五分ノ一ヲ加俸スルモノトス。
 ●航空加俸トハ軍用ノ航空機ニ搭乘シテ航空勤務又ハ航空演習ニ從事スル陸海軍人軍屬ニ給スル加俸ニシテ、其額左ノ如シ

陸	海	甲額	乙額	甲額	乙額
將校同相當官高等文官、同待遇者	士官、特務士官高等文官、同待遇者	400	200	400	200
准士官見習士官判任文官一等	候補生、准士官判任文官一等	300	150	300	150
下士判任文官二等以下判任文官待遇者	下士官、判任文官二等以下判任文官待遇者	200	100	200	100
兵卒、雇員、備人、職工	兵卒、雇員、備人、職工	100	50	100	50

右表中、日額甲種ハ海軍ニノミ特ニ設ケラレタルモノナレドモ、ソハ新式若クハ新設計ノ航空機ニ搭乘シ又ハ特ニ危險ト認ムル航空機ニ從事スル者ニ給スルモノトス。然ルニ陸軍ニ於テハ此ノ如キ軍人軍屬ニハ日額ノ十割以内ヲ増給スルコトヲ得ルガ故ニ結果ニ於テハ大差ナシ。

尙教導ノ目的ヲ以テ一日數回航空スルトキハ甲額ノ五割以内ヲ(陸軍)若クハ二割五分(海軍)ヲ増給スルコトヲ得。

航海加俸トハ在役艦船ノ乗員ニ之ヲ給スルモノニシテ豫備艦船ノ乗員ニモ定警港外航海中ニ限り之ヲ給ス。軍人并ニ文官及同待遇者ガ艦船ニ乗組テ命セラレタルトキハ在役艦船又ハ豫備艦船ノ乗員ニ準シ。雜役船又ハ官用船舶ニ乗組テ命セラレタルトキハ豫備艦船ノ乗員ニ準ズルモノトス。而シテ其加俸ハ官職ニ依ツテ異リ、其航海地方ニ依ツテ異ル。例ヘバ艦隊司令長官タル大將ノ受クル加俸ハ内地沿岸航海ニ於テハ日額貳圓貳拾五錢ニシテ、遠隔地ニ至ルニ從ツテ次第ニ増サレ、終ニ東經三十度以西西經七十度以東ニ於テハ日額拾八圓七拾五錢ナルガ如シ。

海軍ノ特別加俸トハ下士官及兵ノ善行章ヲ有スル者、教員ノ職ヲ奉スル者、特技章ヲ有スル者、優等章ヲ有スル者ニ與フル加俸シテ、優等章ヲ有スル者ニハ一日拾五錢以内ヲ加給シ、其他ノ者ニハ一日七錢五厘以内ヲ加給スルモノトス。

加俸ノ額ヲ高ムルコトハ、本俸ニ關スル増俸ト同様ニ論ズルコトヲ得ベシ。我國ニ於ケル前述ノ加俸額ハ大正九年ノ改正ニ係ル、其際ニ於ケル加俸增加率ハ大體五割ナリシガ、職務加俸ノ中ニハ十割以上トナレルモノモアリ。¹⁾

二、任地加俸并ニ職務加俸ハ又官舎料ノ名ヲ以テ之ヲ給スルコトアリ。蓋シ官吏ハ威嚴ヲ保ツ爲メニ相當ノ家屋ニ住セザルベカラズ。然ルニ借家料ハ地方ニ依ツテ大ニ異ルモノアルガ故ニ官吏ノ生活費ニ懸隔ヲ生ズ。之ガ均衡ヲ保タシメントセバ官舎料ヲ支給シ地方ニ依ツテ其額ヲ異ニスルヲ要ス。更ニ進ンデ之ヲ考フレバ同一地方ニ於テモ官吏ノ職務ニ依ツテハ官廳所在ノ地域ノ近邊ニ住ムヲ必要トスルモノアリ。例ヘバ警察事務ヲ掌ル高等官ノ如シ。然ルニ其地域ニ於ケル家屋ノ賃借料ハ特ニ高キコトアルベキガ故ニ國家ハ亦之ヲ斟酌セザルベカラズ。

官舎料ハ金錢ニ依ツテ給與スルモノナルガ、又實物ニ依ツテ之ヲ支給スルコトアリ、官舎ノ支給是ナリ。蓋シ高キ官舎料ヲ得ルモ、事實上一定地域ニ於テ相當ノ家屋ヲ借ルコト困難ナル場

1) 本書 250 頁參照

合ナシトセズ、此ノ如キ場合ニハ國家ハ自ラ官舎ヲ建テ、一定ノ官吏ヲシテ之ニ居住セシムルノ必要ヲ生ズ。官吏ガ官舎ニ居住スレバ、ソレ丈ク生活費ヲ減ズルガ故ニ事實ニ於テハ加俸アルコトニ歸ス。然レドモ官舎ノ新築修繕ハ物件費ニ屬スルコト論ヲ跋タズ。

第二項 非 職 俸 (Wartegeld, der Disponibilitätsgeld)

由來官吏ハ一生、官ヲ以テ家ト爲ス。故ナクシテ免ゼラルベキニアラズ。然レドモ官制又ハ定員ノ改正ニ依リ過員ヲ生ズルトキ、若クハ官廳事務ノ都合ニ依リ必要ナルトキハ官吏ハ、職務ヨリ離レザルベカラザルコトアルベク、又官吏ガ懲戒委員會ノ審査ニ付セラレタルトキ、若クハ刑事事件ニ關シ告訴セラレ告發セラレタルトキハ、職務ヲ執リ得ザルコトアルベシ。是ニ於テ非職ノ制度ヲ生ズ。

我國ニ於テハ文官ニ就テハ之ヲ休職ト云ヒ(文官分限令第十一條)武官ニ就テハ之ヲ待命停職休職ト云フ(陸軍將校分限令第五條第六條第七條)待命ハ解隊、廢廳、廢職ノトキ、修學滿期ト爲リタルトキ、又ハ外國留學ヲ許可セラレタル者歸朝シタルトキ、法令ニ依リ定員外ト爲リタル者定員外ノ事由消滅シタルトキ、武官ヲ以テ充ツベキ文官ニ任セラレタル者其文官ヲ免セラレタルトキニ命セラレ。停職ハ懲戒ニ附スベキ行爲アリタル場合ニ命セラレ。休職ハ待命後一年ヲ經テ就職ノ命ナキトキ、文官ニ專任セラレタルトキ、願ニ依テ内國ニ於ケル修學ヲ許可セラレタルトキ、生死不明トナリタルトキ、陸海軍刑法ニ依リ一年未滿ノ禁錮ニ處セラレタルトキニ命セララルモノトス。

非職ハ官吏ノ資格ヲ失フモノニアラズ。只職務ニ從事セザルニ過キズ、相當ノ機會アレバ又復職スルモノトス。是ガ故ニ假令非職トナルモ之ニ俸給ヲ與ヘザルベカラズ、非職俸是ナリ。非職俸ヲ如何ニ定ムベキカト云フニ、在職俸ヨリ低キヲ妨グザレドモ、在職俸ト非常ナル懸

隔ヲ生ズルハ當ヲ得タルモノニアラズ。蓋シ官吏ハ休職トナルモ俄ニ其生活費ヲ激減シ得ベキモノニアラザレバナリ。

我國ニ於テハ文官ノ休職俸ハ在職俸ノ三分一トス(文官分限令第十三條)但シ大正二年法律第七號并ニ法律第十二號ニ依ツテ休職ヲ命セラレタル判事、檢事、會計検査官及行政裁判所高等官ニシテ在職二十五年以上ノ者ニハ在職俸ノ二分一迄ヲ支給スルコトヲ得。陸海軍武官ノ待命俸ハ在職俸ノ十分八、休職俸ハ十分六、停職俸ハ十分三トス(海軍給與令第七條 陸軍給與令第五條)。尙陸軍將校ニシテ外國留學ヲ許可セラレタル者ニハ休職俸ト同シク在職俸ノ十分ノ六ヲ給ス。

我國ノ文官休職俸ハ少キニ失スト謂フベク、武官ノ待命休職停職俸ト比較スルトキハ更ニ權衡ヲ得サルモノト謂ハザルベカラズ。

第三項 恩

給 (Der Ruhegehalt, Pension)

一、恩給トハ、廣義ニ於テハ、退官又ハ退職ノ後ニ於テ官吏若クハ其遺族ガ國家又ハ公共團體ヨリ受クル總テノ給與ヲ云ヒ、狹義ニ於テハ、退官又ハ退職後ニ於テ官吏其人ガ國家又ハ公共團體ヨリ年々歳々受クル定額ノ給與ヲ云フ。

狹義ノ恩給ハ之ヲ年金ト見ルコトヲ得ベク、從テ恩給費ハ之ヲ公債費ニ準スルコトヲ得ベシ。廣義ノ恩給ハ狹義ノ恩給ノミナラズ、遺族扶助料、退官賜金、一時扶助金ヲ包括ス。

恩給ハ其初メ君主ノ特別ナル恩惠ニ出テシモノニシテ、其之ヲ與フルト否トハ君主ノ自由意思ニ是レ係リシガ、後之ヲ給スルコトヲ普通ノ慣例トシ、終ニ十九世紀ノ前半ニ於テ、歐洲先

進國ハ之ヲ法律ニ於テ定メ、恩給ヲ受クルコトヲ以テ退官者若クハ退職者ノ法律上ノ請求權トナスニ至レリ。

我國ニ於テモ、明治維新後夙ニ恩給令制定セラレシガ、ソハ恩給ヲ以テ國家ノ恩惠トナスノ精神ヲ襲ヘルモノナリキ。明治二十三年ニ至テ、歐洲先進國ノ立法例ニ倣ヒテ恩給請求權ヲ認メ官吏恩給法(明治二十三年法律四十三號)官吏遺族扶助法(同年法律四十四號)軍人恩給法(同年法律四十五號)府縣師範學校長俸給并公立學校職員退隱料及遺族扶助料法(同年法律九十一號)市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料法(同年法律九十號)ヲ定メ。明治二十四年ニハ巡查看守退隱料及遺族扶助法(同年法律三十八號)明治四十三年ニハ警部補退隱料及遺族扶助料等ニ關スル法(同年法律三十號)ヲ定ム。現行法ハ之ニ多少ノ修正ヲ加ヘタルモノニ過キズ。

此クシテ我國法ハ文武官ニ對シテ各特別ノ恩給法ヲ定ムルニ至リシガ、文武官ノ恩給ノ範圍同シカラズ。官吏恩給法ニ依ル恩給并ニ學校職員及ヒ巡查看守ノ退隱料ハ狹義ニ於ケル恩給ナルガ、軍人恩給法ニ依ル恩給ハ狹義ノ恩給(退隱恩給、免除恩給、增加恩給)ニ止マラズ、賑恤金、給助金、遺族扶助料ヲ含ミ、廣義ノ恩給トナレリ。余ハ此項ニ於テ主トシテ狹義ノ恩給ヲ論ジ時ニ退官賜金ニ説キ及ボシ、次項ニ於テ主トシテ遺族扶助料ヲ論ジ時ニ一時扶助金ニ説キ及ボサントス。

退官料ハ學校職員及巡查看守警部補ノ恩給ニ外ナラズ。由來學校職員等ハ官吏ニアラズ、然レドモ官吏ニ準シテ恩給ヲ與フルノ必要存ス、是レ學校職員ノ爲メニ特別法ノ成リシ所以ナリ。又巡查看守ハ其職務上危險ヲ冒サザルベカラサルコトアルガ故ニ寧ロ軍人ニ準シテ恩給ヲ給スルノ必要存ズ、是レ亦巡查看守ノ爲メニ特別法ノ成リシ所以ナリ（明治三十四年法律三十八號）。其後、警部補ニモ之ヲ准用スルコト、ナレリ（明治四十三年法律三十號）。

軍人恩給ニアリテハ准士官以上ニ對スルモノヲ退職恩給ト云ヒ、下士以下ニ對スルモノヲ免除恩給ト云ヒ。戰鬪及公務ノ爲メ傷疾ヲ受ケ苦クハ疾病ニ罹レル者ニ對シ、退職恩給免除恩給ノ外特ニ給スルヲ增加恩給ト云フ。

一時賜金ハ退官又ハ退職シタル官公吏ニ與フル一時的給與ニシテ、文官ニ於テハ之ヲ退官賜金ト云ヒ、武官ニ於テハ下士以上ニ對スルモノヲ給助金ト云ヒ、下士以下ニ對スルモノヲ賑恤金ト云フ。

恩給ハ官吏ガ退官若クハ退職ノ後、年々歳々受クル年金ニシテ、其官吏ハ之ヲ以テ退官退職後ニ於ケル生活ヲ維持スルモノトス。而シテ官吏ノ退官若クハ退職ハ多ク老衰又ハ疾病ニ依ツテ職務ヲ執ルコト能ハザルニ至テ之ヲ見ルモノナルガ故ニ、恩給ハ其作用ヨリ見レバ、老衰保險疾病保險ニ類スル所ナキニアラズ。然レトモ其本質ニ至ツテハ全ク之ト異レリ。蓋シ保險ハ疾病死亡其他事變ノ危険ニ備ヘ其事變到來スレバ一時ニ保險金額ヲ交付スルモノナレドモ、恩給ハ退官者ニ年々一定ノ額ヲ給スルニ過キザレバナリ。加之恩給ハ老衰又ハ疾病ノ爲メ退官スル場合ノミナラズ、廢官廢廳ノ結果免官トナル場合ニモ之ヲ給ス。從テ保險ヲ以テ律スベキニアラズ、寧ロ俸給ノ延長ト見ザルベカラズ。

二、古來恩給ニ關シ國庫ヨリ獨立シタル特別金庫ヲ設ケ、官吏ヲシテ平素其俸給ノ一部ヲ割キテ之ヲ此金庫ニ納入セシムル制度存セリ。コハ恩給ヲ以テ保險ト同一視シタル爲メ外ナラズ。

然レドモ恩給ハ前述ノ如ク保險ヲ以テ律スベカラザルガ故ニ此觀念ヨリ出テラ恩給基金ヲ作ルコトハ當 得ズ、恩給ハ國家ガ退官者ニ與フル年金ナレバ、國庫ヨリ之ヲ支出セサルヘカラズ。論者或ハ國有財産ノ一部ヲ割キテ恩給基金ヲ作ラントスルモノアリ。蓋シ確定財源ニ依ツテ恩給ヲ保障セントスル意ナルベシト雖トモ。此ノ如キ恩給基金ハ金庫統一ノ主義ト背馳シ現代ノ財政組織ト相容レズ、加之財政困難ニ際セハ恩給基金ノ獨立亦必ズシモ之ヲ期スベカラズ。是ガ故ニ恩給基金ハ之ヲ設ケザルニ如カザルナリ。

斯クノ如ク恩給基金ヲ設クルコトハ宜シキヲ得タルモノニアラズ。唯偶々償金其他之ニ類似ノ資金ヲ得タル場合ニ之ヲ恩給基金トナスハ例外トシテ之ヲ認ムベシ。舊獨逸帝國ニ於ケル廢兵基金 (Invalidenfond) ノ如キ即チ其一例トス。

三、恩給ノ性質ハ俸給ノ延長ニ過ギザレバ、相當ノ時ヨリ恩給ニ對スル請求權ヲ與フベシ。請求權始期ノ遅キニ失スルハ、官吏ノ新陳代謝ヲ促メ所以ニアラズ。非ナリ。其年限ニ達セズシテ退官スルモノハ恩給ヲ受クル資格ナク、遽ニ活路ヲ失フ虞アリ。是ニ於テ退官賜金ノ制度アリ。

我國ニ於テ恩給ノ始期ハ、文官并ニ府縣立師範學校及公立中學校職員、市町村立小學校教員ニアリテハ十五年、武官ニアリテハ現役十一年、巡查看守警部補ニアリテハ十年、國務大臣ニアリテハ五年トス。此年限ハ普通ノ場合ナルガ、官吏ガ公務ニ因リ傷疾ヲ受ケ又ハ公務ニ因リ、健康上有害ノ影響ヲ受ケ、疾病ニ罹リ一肢以上ノ用ヲ失ヒ、若クハ之ニ準ズベキ者ニシテ其職ニ堪エズ退官シタルトキハ定期年限ニ達セザルモ亦之ニ恩給ヲ給ス。

大正九年法律第十號ハ茲ニ見ル所アリテ恩給ヲ増加スルコト、ナレリ。

文官恩給ニ關シテハ同法ハ、大正九年七月三十一日現在ニ於テ國庫ヨリ恩給退隱料ヲ受ケ又ハ受クベキ者ノ恩給退隱料ノ年額ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ其十割以內ニ相當スル金額ヲ加ヘタルモノト定メ、大正九年勅令二百七十八號ハ恩給退隱料ノ年額ヲ増額スル場合ニ於テハ其恩給年額算出ノ基礎トナリタル俸給年額ニ左ノ區分ニ依リ増額シタル金額ヲ俸給年額トシテ算出シタル年額ヲ以テ其恩給退隱料ノ年額トスト定ム。

基礎俸給年額	六、五〇〇圓乃至七、五〇〇圓	五、五〇〇圓乃至六、五〇〇圓	三、〇〇〇圓乃至五、〇〇〇圓	一、〇〇〇圓乃至三、〇〇〇圓	五、六〇〇圓乃至一、一、〇〇〇圓	五、〇〇〇圓乃至六、〇〇〇圓	五〇〇圓乃至一、〇〇〇圓以下
増額俸給年額	五、五〇〇圓増 エ得ズ	七、〇〇〇圓	一、五〇〇圓増	基礎年額ニ其 三十分一三及 三〇〇圓ヲ加フ	基礎年額ニ五 割及二〇〇圓ヲ 加フ	五〇〇圓増	十割増

表中ニ圓増トアルハ基礎俸給ニ増加スベキ額ヲ示ス

右表ニ據テ之ヲ觀レバ、増額俸給年額ハ大體ニ於テ増俸ノ額ニ近シ。其勅任官ノ俸給ニ相當スルモノニ對シテ悉ク千五百圓ヲ増シタル如キハ全然相同シ。是ガ故ニ退官退職ノ後ニ恩給ヲ受ケツ、アル者又ハ受クベキ者ハ在職者ガ増俸ヲ得タルト同様ノ割合ニ於テ恩給ノ増額ヲ得タルモノト謂フベキナリ。

軍人恩給關シテモ。大正九年法律第十號ハ大正九年七月三十一日現在ニ於テ軍人恩給（給助金及

恤賑金ヲ除ク）ヲ受ケ若クハ受クベキ者又ハ本法施行後軍人恩給ヲ受クベキ事由ノ發生シタル者ノ恩給金額ハ從來ノ年額ニ二割乃至十割ヲ加ヘタルモノト定ム。今表ニ依ツテ退職恩給年額ト加給割合トヲ示セバ左ノ如シ。（免除恩給増加恩給給助金ニ對スル加給率モ亦同シトス。）

恩給階	親任官及相當官		佐官		尉官及相當官		判任官	
	一等	二等	三等	四等	五等	六等	七等	八等
舊	一、〇〇〇圓	一、二〇〇圓	一、一〇〇圓	九〇〇圓	七〇〇圓	五〇〇圓	四〇〇圓	三〇〇圓
額	一、一〇〇圓	一、三〇〇圓	一、二〇〇圓	一、〇〇〇圓	八〇〇圓	六〇〇圓	五〇〇圓	四〇〇圓
額	一、〇〇〇圓	一、二〇〇圓	一、一〇〇圓	九〇〇圓	七〇〇圓	五〇〇圓	四〇〇圓	三〇〇圓
一年毎ニ増 スベキ額	一〇〇圓	一〇〇圓	一〇〇圓	一〇〇圓	一〇〇圓	一〇〇圓	一〇〇圓	一〇〇圓
五十一年	五、〇〇〇圓	六、〇〇〇圓	五、〇〇〇圓	四、〇〇〇圓	三、〇〇〇圓	二、〇〇〇圓	一、〇〇〇圓	一、〇〇〇圓
加給割合	一割	二割	三割	四割	五割	六割	七割	八割

大正九年法律第十號ニ依ル恩給ノ増額ハ以上述べル所ニ據リ二ノ點ニ於テ特色ヲ有ス。其第一ハ從來恩給ヲ受ケツ、アリシ者ニ溯及シテ、其恩給額ヲ更正シタルコトニシテ、其第二ハ恩給ノ増額ハ在職俸ノ増額ニ並行シタルニ止マリ、恩給額ト其算出ノ基礎タル俸給額トノ比ヲ改メタルモノニアラザルコト是ナリ。從來ノ恩給ヲ更正スルコトハ、其之ヲ受ケツ、アル人ノ生活ヲ改善スルコト少カラザルベク、社會政策上大ナル意義ヲ有スベシト雖トモ、著シク財政ノ負擔ヲ増シ來ルベキガ故ニ、將來之ヲ以テ例トスルニ於テハ、却テ恩給ノ増額ヲ妨クコトアルベ

シ。蓋シ財政家ハ恩給ノ溯及的増額ノ爲ニ生スル經費ノ増加ヲ喜バサルベケレバナリ。次ニ恩給ガ増俸ニ並行シテ増額セラレタルコトハ恩給ヲ受クル者ガ増俸ノ恩典ニ漏レザリシ迄ノコトニシテ、恩給額ト其算出ノ基礎タル俸給額トノ比ガ改メラレザル限り、從來ノ恩給法ハ何等改善セラル、所ナシト謂ハサルベカラズ、從來ノ恩給法ニ依レバ恩給ノ最小額最高額増加率共ニ低キニ失セリ。之ヲ文明諸國ノ立法例ニ比較スルニ左ノ如シ。

國名	量 (俸給ニ對スル歩合)	最 (俸給ニ對スル歩合)	恩給初期後年々ノ増加率
日	四分一	二百四十分八十五	二百四十分一
英	六分一	三分二	六十分一
普	四分一	四分三	六十分一
獨	三分一	四分三	六十分一
奧	百分四十	全額	六十分一
伊	二分(俸給四千利以下ニ對シ) 最低九百利	五分(俸給四千利以上ニ對シ) 最高一萬二千利	百分二

我國ノ恩給ガ先進諸國ノソレニ比シ非常ニ低キヲ知ルベシ。我國ノ官吏ガ官ヲ退ケバ則チ衣食ニ窮スル所以亦偶然ニアラズ。恩給法ハ根本的ニ改正セラレザルベカラザルナリ。

第四項 遺族扶助料

一、遺族扶助料ハ在官者并ニ恩給ヲ受クル者ガ死亡シタルトキニ其遺族ニ與フル給與ニシ

テ、廣義ニ於ケル恩給 中ニ含マルモノトス。既ニ廣義ニ於ケル恩給ニ屬ストセバ、其性質モ恩給ト異ル所ナク、之ヲ俸級ノ延長ト見ザルベカラズ。然ルニ官吏死亡シタル後遺族ノ生活ヲ安固ニスルト云フ點ヨリ觀レバ、生命保險ト作用ヲ同ウスルガ如ク見ユ。現ニ遺族扶助料ノ歴史ヲ尋ヌレバ、之ヲ官吏ノ保險ト視タル跡歴然トシテ存ズ。蓋シ遺族扶助料ハ其初メニ於テハ、之ガ爲メニ特別金庫ヲ設ケ、官吏ヲ強制シテ之ニ加入セシメ、年々掛金ヲ拂ハシメシガ、後國庫モ此特別金庫ニ對シテ補助ヲ爲スコト、ナリ、更ニ進ンデ、此特別金庫ヲ國庫ニ移シ、國庫ヨリ直接ニ官吏ノ遺族ニ對シテ扶助料ヲ支拂フコト、ナリシモ、官吏ヨリ掛金トシテ徴收スルコトハ依然トシテ舊ノ如ク改マル所ナカリキ。然レドモ遺族扶助料ヲ以テ俸給ノ延長ト看做ス以上ハ、事ノ性質上國庫ガ當然之ヲ支給スベク決シテ官吏ノ掛金ヲ要求スベキモノニアラザルナリ。是ガ故ニ最モ進歩セル立法ニアリハ官吏ヨリ掛金ヲ徴收セズ。獨逸ノ立法ノ如キハ即チ其一例ナリ。

我國ニ於テハ遺族扶助料ヲ以テ保險ノ性質ヲ有スルトスルノ思想ヲ襲ヒ、官吏ヲシテ在職中ニ俸給百分ノ一ヲ國庫ニ納メシム、(官吏遺族扶助法二條)。是レ遺族扶助ニ關スル國庫ノ負擔ヲ減スルニ於テ多少ノ效アルベシト雖ドモ、其性質ヨリ論ズレバ當ヲ得タルモノニアラザルナリ。

二、遺族扶助料ハ恩給ト同シク、其初メハ君主ノ恩典ヨリ發達シ來レルモノニシテ、官吏死

亡ノ際ニ一箇月乃至數箇月ノ俸給ヲ其遺族ニ與ヘタルヲ濫觴トス。官吏死亡セバ官吏ハ存在セズ之ニ俸給ヲ與フルノ理ナシ、其之ヲ與フルハ君主ノ恩典トナシシナリ。然ルニ今日ニ於テハ遺族扶助料モ亦恩給ト同シク、官吏ノ遺族ノ權利トシテ之ヲ請求シ得ルモノトス。遺族扶助料ヲ以テ俸給ノ延長トナス以上ハ當然扶助料ニ對スル請求權ヲ認メザルベカラザルナリ。

遺族扶助料ガ俸給ノ延長ナリトセバ、官吏ノ養フベカリシ遺族ヲシテ生活ニ困窮セシメザルヲ趣旨トセザルベカラズ。從テ一時賜金ヲ以テ満足スベキニアラズ。宜シク年々歳々一定額ヲ支給スベキナリ。是ニ於テ遺族扶助料ハ年金ノ性質ヲ帶ヒ來ルナリ。

年金ハ先ヅ寡婦ニ與フベシ、之ヲ寡婦年金 (Wittwepension) トス。年金ハ次ニ之ヲ孤兒ニ與フベシ、之ヲ孤兒年金 (Waisenspension) トス。前者ハ寡婦ノ死亡スル迄之ヲ給スベク、後者ハ孤兒ガ相當ノ年齢ニ達スル迄之ヲ給スベキナリ。

寡婦年金孤兒年金ハ固有ノ遺族扶助料タリ、蓋シ官吏ガ一生ヲ國家ニ捧グル以上ハ國家ハ其寡婦孤兒ニ對シテモ其生活ヲ保障セザルベカラザレバナリ。然レドモ官吏ノ在職期間長カラザル者ニ對シテハ、國家ハ長ク其官吏ノ寡婦孤兒等ヲ扶助スルコト能ハズ。是ニ於テカ死亡一時賜金ノ制アリ。我國ニ於ケル文官ノ一時扶助金、武官ノ給助金はナリ。

我國ニ於テハ、文官ニアリテハ在官十五年以上ノ者在官中死亡シタルトキ、在官十五年未滿ノ者公務ノ爲ニ死亡シタルト

キ、恩給ヲ受クル者死亡シタルトキハ、其遺族ニ一時扶助金ヲ給ス(官吏遺族扶助法一七條)。

學校職員ノ遺族扶助料并ニ一時扶助金ハ文官ト同シ條件ニ依ル(府縣立師範學校長俸給并公立學校職員退隱料及遺族扶助料法第十二條乃至第十四條。市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料法第十條乃至第十二條) 巡查看守警部補遺族扶助料并ニ一時扶助金モ亦文官ト同シ條件ニ依ル。唯勤續年限ニ關シテハ十年以上トスルノミ。(巡查看守退隱料及遺族扶助料法第七條乃至第十三條警部補退隱料及遺族扶助料ニ關スル法)

武官ニアリテハ軍人ガ恩給ヲ受ケ又ハ之ヲ受ケメキ權利ヲ有シテ死亡シタルトキ、戰死シ又ハ戰闘若クハ戰闘ニ準スベキ公務ニ因ル傷疾ノ爲メ死亡シタルトキ、公務ノ爲メ傷疾ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ又ハ戰地ニ於テ若クハ公務執行中流行病ニ罹リ死亡シタルトキハ、其遺族ニ扶助料ヲ給シ。下士以上ノ者が現役中死亡シタルトキハ其遺族ニ一時限リ給助金ヲ給ス。所謂死亡一時賜金はナリ、之ニ對シ現役四年以上十一年未滿ニシテ現役ヲ離レ恩給ヲ受ケザル者ニ給スルヲ服役終了一時賜金ト云フ、給助金ハ此二者ヲ包括ス。

遺族扶助料ヲ受クル者ハ、文武官ノ差別ナク、寡婦ナリ。寡婦ナキトキ、又ハ扶助料ヲ受クベキ寡婦死亡シ、若クハ權利消滅シタルトキハ其扶助料ヲ孤兒ニ給シ。寡婦孤兒ナキトキハ其父母祖父母ニ給ス。而シテ寡婦ハ他ニ婚嫁若クハ其戸籍ヲ去ルニアラザレバ終生之ヲ受ケ。孤兒ハ年齢二十歳ニ滿ツル迄之ヲ受ケ。故ニ我國ノ遺族扶助料ハ寡婦年金、孤兒年金。父母祖父母年金ト謂フベキナリ。

三、遺族扶助料ハ遺族ノ生活ヲ扶助スルヲ趣旨トス。遺族ノ生活ハ官吏ノ生前ニ於ケル生活ヨリモ質素タルベキガ故ニ、遺族扶助料ノ額ハ恩給俸ヨリモ更ニ少クシテ可ナリ。我國ニ於テハ原則トシテ恩給俸ノ三分一トス。

我國法ニ依レバ、文官ニ在リテハ、遺族扶助料年額ハ恩給年額ノ三分一トシ、公務ノ爲メ受ケタル傷疾ニ原因シ又ハ非

常ノ勞働及困苦ヲ忍ビ勤務ニ從事シ爲メニ發病死去シ又ハ公務ニ依リ傳染病者ニ接シ該病者ニ感染シテ死去シ又ハ戰地ニ於テ若クハ公務旅行中流行病ニ罹リ死去シタル者ノ遺族扶助料年額ハ、恩給年額ノ三分ノ二トス(官吏遺族扶助法四條)。
 公立中學校職員市町村立小學校教員ニ對スル遺族扶助料亦全ク之ニ同シ、(府縣立師範學校長俸給并公立學校職員退職料及遺族扶助料法第十三條、市町村立小學校教員退職料及遺族扶助料法第十一條) 巡查看守警部補ニ對スル遺族扶助料モ亦大體之ニ同シ。即チ遺族扶助料額ハ退職料ノ三分ノ一ヲ原則トシ、職務ノ爲メ傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ因テ在職中死亡スルカ若クハ退職後一年以内ニ死亡スルトキハ恩給額ノ三分ノ二トス。(巡查看守退職料及遺族扶助料法第七條)。
 一時扶助金ハ在職最終ノ俸給年額百分ノ一ヲ在官年數ニ乘シタル額トス、(官吏遺族扶助法第十七條、府縣立師範學校長俸給并公立學校職員退職料及遺族扶助料法第十四條) 市町村立小學校教員ニ對スル一時扶助金ハ退職給與金ト同シク、退職現時ノ給料半箇月分ヲ以テ在職年數ノ一箇年ニ當テ其年數ニ應スル金額トス、(市町村立小學校教員退職料及遺族扶助料法第十二條)。

軍人ニ在リテハ、遺族扶助料年額ハ、戰死シ又ハ戰闘若クハ戰闘ニ準スベキ公務ニ因ル傷病ノ爲メ死亡シタルトキハ恩給ト同額トシ。公務ノ爲メ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ又ハ戰地ニ於テ若クハ公務旅行中流行病ニ罹リ死亡シタルトキハ、恩給額ノ三分ノ二トシ。恩給ヲ受ケ又ハ受クベキ權利ヲ有シテ死亡シタルトキハ恩給額ノ三分ノ一トス(軍人恩給法二八條)。

扶助金ハ官階ニ依テ定額ヲ給ス、親任將官ノ千八百圓ヨリ漸次下リテ尉官(高等官八等)ノ貳百拾六圓ニ及ビ、更ニ下リテ下士(判任四等)ノ八拾四圓ニ終ル。(軍人恩給法一六條)。

以上述フルカ如ク、遺族扶助料ハ恩給ヲ基礎トシテ年額ヲ算出スルモノナルガ、其恩給ハ、文官ニ在リテハ本俸ヲ基礎トシテ其年額ヲ算出シ、武官ニ在リテハ官階ト年數トニ依テ一定額ヲ定ムルガ故ニ、遺族扶助料ハ恩給ト同様ニ物價ノ騰落ニ交渉タルモノトス。而シテ近年物價ノ騰貴スルヤ、恩給ニ衣食スル者ガ到底生活ヲ維持スルコト能ハサルニ至レルト

同時ニ遺族扶助料ヲ受クル者モ亦愈々益々生活ニ窮スルニ至レリ。是ニ於テ大正九年法律第十號ハ、恩給ノ増額ヲ期スルト同時ニ遺族扶助料ノ増額ヲ圖レリ。然レトモ、遺族扶助料ノ増額ハ恩給ノ増額ニ相伴フタルニ止マリ、遺族扶助料額ト其算出ノ基礎タル恩給額トノ比ニ至テハ依然トシテ舊ノ如ク改メラル、所ナカリキ。余ガ曩ニ恩給ノ増額ニ關シテ試ミタル批評ハ移シテ以テ遺族扶助料ノ増額ノ上ニ加フルコトヲ得ベシ。

遺族扶助料ハ恩給ヨリ少カルベキモノナレトモ、恩給ノ三分ノ一トナスハ、寧ロ少キニ失スルノ嫌ナキニアラス。殊ニ我國ノ恩給額ハ既ニ述ベタルガ如ク不當ニ少シ。然ルニ遺族扶助料ハ其恩給ヲ基準トシテ其三分ノ一ト定ムルガ故ニ、遺族扶助料ハ愈々以テ又少キニ過グルヲ知ルベシ。若シ夫レ一時扶助金ニ至テハ官吏在職年間ニ於ケル國庫納附金ヲ返還スルニ過ギズ。國庫納附金ハ其時其時ノ在職俸ノ百分一タルニ反シ、一時扶助金ハ在職最終ノ俸給額ノ百分一タルノミ。要之、我國ニ於テ國家ガ官吏ノ遺族ヲ遇スルノ道モ亦甚タ薄シト云ハザルベカラズ。

第五項 俸給費ノ膨脹

以上述ベタルガ如ク、官吏ノ俸給ハ官吏ヲシテ地位相應ノ生活ヲ爲サシムルヲ趣旨トス。サレバ官吏ノ俸給ハ國ニ依ツテ異ラザルベカラズ。富メル國ニ於テ多く、貧シキ國ニ於テ少シ、從テ富メル國ノ俸給費ハ貧シキ國ノ俸給費ヨリ遙ニ多カラザルベカラズ。

同一ノ國ニ於テモ、俸給費ハ時ニ依ツテ異ラザルベカラズ。蓋シ時世ハ進ンデ止マズ、時世ノ進ムニ連レテ人ノ欲望ハ進ムモノニシテ官吏ノ必須的欲望地位的欲望モ亦進ムベキナリ。加

之文明國ニ於テハ世ノ進ムニ從ヒ貨幣價格ハ次第ニ下落シ、物價ハ次第ニ騰貴スルノ趨勢ヲ有ス。是カ故ニ俸給ハ世ノ進ムニ伴ヒ、一定ノ時期ノ隔テテ之ヲ増加セザルベカラズ。而シテ官吏ノ數モ人口ノ増殖スルニ從ヒ又國力ノ發展スルニ伴テ増サザルベカラザルガ故ニ、俸給費ハ膨脹シテ已マザルベシ。

今我國ノ實際ニ就テ廣義ノ俸給費ノ膨脹シ來レル跡ヲ見ルニ左ノ如シ。

年 度	文 官		武 官		計 給		恩給扶助料		一時賜金		總計金額
	人員	俸給	人員	俸給	人員	俸給	人員	金額	人員	金額	
明治三四	50,832	1,154,200	100	8,000	50,932	1,162,200	1,154,200	8,000	1,162,200	1,170,200	1,170,200
三五	50,832	1,154,200	100	8,000	50,932	1,162,200	1,154,200	8,000	1,162,200	1,170,200	1,170,200
三六	50,832	1,154,200	100	8,000	50,932	1,162,200	1,154,200	8,000	1,162,200	1,170,200	1,170,200
三七	50,832	1,154,200	100	8,000	50,932	1,162,200	1,154,200	8,000	1,162,200	1,170,200	1,170,200
三八	50,832	1,154,200	100	8,000	50,932	1,162,200	1,154,200	8,000	1,162,200	1,170,200	1,170,200
三九	50,832	1,154,200	100	8,000	50,932	1,162,200	1,154,200	8,000	1,162,200	1,170,200	1,170,200
四〇	50,832	1,154,200	100	8,000	50,932	1,162,200	1,154,200	8,000	1,162,200	1,170,200	1,170,200
四一	50,832	1,154,200	100	8,000	50,932	1,162,200	1,154,200	8,000	1,162,200	1,170,200	1,170,200
四二	50,832	1,154,200	100	8,000	50,932	1,162,200	1,154,200	8,000	1,162,200	1,170,200	1,170,200
四三	50,832	1,154,200	100	8,000	50,932	1,162,200	1,154,200	8,000	1,162,200	1,170,200	1,170,200
四四	50,832	1,154,200	100	8,000	50,932	1,162,200	1,154,200	8,000	1,162,200	1,170,200	1,170,200
大正元	50,832	1,154,200	100	8,000	50,932	1,162,200	1,154,200	8,000	1,162,200	1,170,200	1,170,200
二	50,832	1,154,200	100	8,000	50,932	1,162,200	1,154,200	8,000	1,162,200	1,170,200	1,170,200
三	50,832	1,154,200	100	8,000	50,932	1,162,200	1,154,200	8,000	1,162,200	1,170,200	1,170,200

四	50,832	1,154,200	100	8,000	50,932	1,162,200	1,154,200	8,000	1,162,200	1,170,200	1,170,200
五	50,832	1,154,200	100	8,000	50,932	1,162,200	1,154,200	8,000	1,162,200	1,170,200	1,170,200
六	50,832	1,154,200	100	8,000	50,932	1,162,200	1,154,200	8,000	1,162,200	1,170,200	1,170,200
七	50,832	1,154,200	100	8,000	50,932	1,162,200	1,154,200	8,000	1,162,200	1,170,200	1,170,200
八	50,832	1,154,200	100	8,000	50,932	1,162,200	1,154,200	8,000	1,162,200	1,170,200	1,170,200

右表ニ依テ之ヲ觀レバ俸給費ハ明治四十二年以來大躍進ヲ爲ス、是レ増俸ノ結果ニ外ナラズ。大正八年ニ至テ俸給費ハ約壹億千參百餘萬圓ニ達セリ。大正九年ヨリハ平均七割一分ノ増俸ヲ實行シタルガ故ニ俸給費ハ貳億圓ニ近カルベシ。之ニ雇員傭人等ノ給料ヲ合算スレバ、其額ハ四億圓ヲ下ルベカラズ。國庫ガ人ノ爲ニ支拂フ額モ亦大ナリト謂フベシ。然レドモ退テ考フレバ我國ノ俸給ハ從來薄キニ失セルニ、戰前ヨリ戰後ニ至テ物價倍加セシニモ拘ラズ七割一分ノ増俸ヲナシタルニ過ギザルガ故ニ官吏ノ地位ハ相對的ニ下レルモノト謂ハザルベカラズ。若シ此勢ヲ以テ進マバ俊才ハ爭テ實業界ニ走り官界有爲ノ士ヲ絶タンモ未ダ俄ニ知ルベカラズ。事茲ニ至レバ官吏政治ハ自殺ヲ遂ケザルベカラザラン。分業ノ發達ハ專門的官吏ヲ要求シテ已マザルニ專門的官吏ハ葬リ去ラレントス、是レ亦現代文明ノ矛盾ニアラズヤ。

第六章 經費ノ限定

經費ノ範圍ガ政治的原則財政的原則經濟的原則等ニ依テ定メタルコトハ既ニ述ヘタルカ如シ
 (二二六頁以下)ト雖トモソハ大體ノ方針ニ過キズ、一國ガ一定ノ時期ニ於テ具體的ニ經費ヲ決定
 セントセハ是等ノ原則ニ依リ財政計畫ヲ立テ豫算ヲ編成シ經費ノ緩急輕重ヲ辯シテ其重キモノ
 急ナルモノヲ取ラサルベカラズ、立憲國ニ於テハ豫算ハ政府之ヲ編成シ議會ノ協贊ヲ經テ定マ
 ル、從テ經費モ政府ノ發意ニ基キ議會ノ審査ニ依テ定マルモノト謂ハサルベカラズ、然ルニ議
 會ガ經費ヲ査定スルニ當リテハ、自由ニ廢除削減シ得ルモノト然ラサルモノトアリ是ニ於テ自
 由費確定費ノ別ヲ生ズ。

政府ノ發意ニ基キ議會ノ査定スルコトハ經費限定ノ徑路ニ外ナラサルガ故ニ之ノ經費ノ形式
 的限定ト名クベシ、經費一旦定マラハ之ヲ支辨スベキ收入ヲ適應セシメサルベカラズ、然ルニ
 收入ノ道ハ無限ニ存セズ、強テ之ヲ得ントセバ非常ナル障礙ヲ排除セサルベカラサルコトアル
 ベク實際問題トシテハ新經費ノ緊急ノ程度ト其財源ヲ得ル困難ノ程度トヲ比較對照シテ取捨決
 定セサルベカラズ(七頁參照)是ニ於テ經費支辨方法ニ關連シテ經費ヲ區別スルノ必要ヲ生ス經常
 費臨時費ノ別是ナリ。經常費臨時費ノ別ハ政府ガ發案スル際ニモ議會ガ査定スル際ニモ之ヲ紛
 更スベカラズ、是レ財政ガ實質的調整ヲ維持スル基礎タラサルベカラサレハナリ。從テ經常費
 臨時費ハ經費ノ實質的限定ニ關スルモノト謂ハサルベカラズ。

第一節 確定費ト自由費

一、確定費ト自由費トハ議會ノ議定權ヲ標準トシテ之ヲ區別スルモノニシテ次ノ如ク定義ス
 ベキモノトス、即チ

確定費トハ法令又ハ契約ニヨリテ國家ガ支出ノ義務ヲ負フ經費ニシテ議會ノ豫算議定權ヲ制
 限スルモノニシテ自由費ハ議會ノ豫算議定權ヲ以テ自由ニ廢除削減シ得ルモノナリ。

確定費ノ觀念ハ英國ノ整理基金(Consolidated Fund)ノ支出スル經費ヨリ出ツ、英國ニテハ從
 前種々ノ經費ノ爲ニ特別ノ基金ヲ作りシガ其弊ノ甚シキヨリ之ヲ統一整理シテ一基金トシ、名
 テ整理基金ト云フ、整理基金ヨリ支出スベキ經費ハ之ヲ整理基金費(Consolidated Fund charge)
 ト云ヒ、國債費、道路改良基金費、他ノ整理資金費、地方稅會計支拂金ノ四種ヲ包括ス、國債費
 ハ確定公債ノ利子、有期年金、流動公債ノ利子、國債取扱費、新減債基金ヨリ成リ(從前ニアリテハ
 流動公債利子ヲ含マサリシカバ確定公債ト流動公債トハ整理基金費ニ屬スルト否トチ以テ分チ得タリシモ今ヤ然ラズ)他ノ
 整理基金費ハ皇室經費、年金恩給、下院議長會計検査院長以下特定ノ人ニ對スル俸給及諸給、
 裁判所ニ關スル一定ノ經費、諸支出金ヨリ成ルモノトス、是等ノ經費ニ關シテハ英國議院ハ
 議スルノ自由ヲ有セズ、是レ即チ茲ニ謂フ所ノ確定費ナリ。此整理基金費ニ對スル經費ハ

一般經費 (Supply Service) トハ、陸軍費、海軍費、文治費、稅關費并ニ内國稅徵收費、郵便廳費ニ分チ、豫算 (Estimates) ニ依テ議會ニ提出セラレ、議會ノ協贊ヲ經ルモノトス、是等ノ經費ニ關シテハ英國議會ハ自由ニ廢除削減ヲ爲スコトヲ得ベシ、是レ即チ茲ニ謂フ所ノ自由費ナリ。他ノ諸國ノ憲法ニ於テハ英國ノ如キ整理基金費ニ就テ規定スル所ナシト雖トモ、經費ノ性質上國家ノ義務ニ屬スルモノト然ラサルモノトノ別アリテ、議會ノ之ヲ取扱フ方法ハ自然ニ異レルモノアリ、例ヘハ、獨逸ニ於テハ法令契約ニ依リ金額并ニ目的ノ定マレル經費ハ議會之ニ容喙セズ、法令契約ニ依リ目的ノ定マレル經費ニシテ金額ノ定マラサルモノハ政府ノ承諾ヲ經テ議會之ヲ減額シ得ベク、目的ノ金額モ確定シ居ラサルモノニ就テハ議會自由ニ削除輕減シ得ベキコトヲ慣例トス。

二、我國ノ憲法ハ確定費ニ就テ規定ス、皇室經費、憲法上大權ニ基ケル既定ノ經費、法律ノ結果ニ由リ又ハ法律上政府ノ義務ニ屬スル經費并ニ繼續費、豫備費即チ是ナリ。

1、皇室經費ニ關シテハ憲法第六十六條ノ規定アリ、曰ク、皇室經費ハ現在ノ定額ニ依リ毎年國庫ヨリ之ヲ支出シ將來増額ヲ要スル場合ヲ除ク外帝國議會ノ協贊ヲ要セズト、皇室經費ガ議會協贊權ノ外ニ在ルコト寸毫モ疑ヲ容レズ其之ヲ豫算ニ掲ケテ議會ニ提出スルハ只歲出入ノ均衡ヲ示スガ爲ニ外ナラサルナリ。

2、憲法上ノ大權ニ基ケル既定ノ歲出及ヒ法律ノ結果ニ由リ、又ハ法律上政府ノ義務ニ屬スル歲出ニ關シテ憲法ハ政府ノ同意ナクシテ帝國議會之ヲ廢除シ又ハ削減スルコトヲ得ズト規定ス。(六十七條)

此種ノ經費ハ皇室費ノ如ク全ク議會協贊權ノ外ニアラズト雖トモ、政府カ同意ヲ爲ス場合ニ限リ議會ハ之ヲ廢除削減シ得ルモノトス、然レトモ大權ニ基テ歲出ノ定マレルモノ又ハ法律ノ結果ニ由リ若クハ法律上政府ノ義務ニ屬スルモノハ、政府ト雖モ常ニ濫ニ廢除削減ニ同意スルコトヲ得ベカラズ、既ニ定マレル政府ノ義務ハ法令ヲ改廢シ契約ヲ變更スルニアラサル限り之ヲ履行セザルベカラサレハナリ、然リ而シテ此ノ如キ手續ヲ爲シ以テ自己ノ提出セル豫算案等ヲ改變シテ尙厭ハサル政府ハ自己ニ對スル不信任ヲ表白スルニ外ナラズ、故ニ實際ニ於テモ政府ハ同意ヲ與フルニ躊躇スベシ從テ此等ノ經費ハ確定費ト云フベキナリ。

(イ) 大權ニ基ケル既定ノ經費ニ就テハ、學說區々ニ岐レトモ勅令又ハ條約ニ依リ豫算議定以前ニ定マレル經費ト解スルヲ穩當トス、從テ實際ニ於テハ行政政府ノ單獨ニ決定スルモノトス、文武官俸給、條約ニ依テ負ヘル支出、賞勳年金褒賞費等ノ如シ。

(ロ) 法律ノ結果ニ由ル經費トハ特別法律ニ依リ支出ノ必要ヲ認メ且ツ之ガ計算標準ヲ定メタル經費ナリ、茲ニ特別ノ法律ト云フハ憲法施行前ノ布告類法律ニ依ル委任命令ヲモ含ム。

例へハ恩給、遺族扶助料、徴兵費、徴稅費、特殊銀行補助費、航路補助費、造船獎勵費ノ如シ。

(ハ) 法律上政府ノ義務ニ屬スル經費トハ政府ガ契約其他ノ原因ニ因リ法律上支拂義務ヲ負フ經費ナリ、例へハ公債元利支拂金、各種ノ補助金、賠償金、諸拂戻金、備外國人ノ給與等ノ如シ。

是等諸經費ノ中茲ニ一言セサルベカラサルモノハ補助費(獎勵費ヲ含ム)ナリトス、補助費ハ法律ノ結果ニ依ルコトアレトモ又契約ニ依テ法律上政府ノ義務トナルモノナリ、然ルニ補助ノ契約ハ豫算外國庫ノ負擔トナルベキ契約トナルカ故ニ議會ノ協賛ヲ經サルベカラズ、其議會ノ協賛ヲ經テ政府ガ契約ヲ結ヒタルモノハ、後年ノ豫算議定權ヲ制限スルモノト謂ハサルベカラス。

今大正七年度ノ豫算ニ就テ之ヲ見ルニ、内容雜駁ナレトモ大別シテ、土木費補助其他ノ内務費補助、産業ノ補助、海事補助、文化費補助トナスベシ。

(1) 土木費補助ハ水道下水道費補助、河川改修費補助、港灣修築費ノ補助、道路修築補助、砂防工事費補助、輕便鐵道建設補助、地方土木費借入金ニ對スル利子補給等ニシテ多クハ地方團體ニ補助スルモノトス、此中ニアリテモ水道下水道費ノ補助ハ頗ル多ク、水道ニ在リテハ東京大阪名古屋横濱神戸仙臺福岡宇都宮高松松江佐賀吳鹿兒島奈良熊本尼崎横須賀山形函館ノ諸市ニ對スルモノニシテ下水道ニアリテハ東京大阪名古屋松山鹿島ノ諸市ニ對スルモノトス、中ニハ更ニ水道山形函館ノ諸市ニ對スルモノニシテ下水道ニアリテハ東京大阪名古屋松山鹿島ノ諸市ニ對スルモノトス、中ニハ更ニ水道

テ其額百貳拾餘萬圓ナリ。又保健衛生獎勵費(寄生虫及マラリヤ熱除滅獎勵)爲メニ補助スルモノモ亦衛生費補助トスベシ。

(3) 社會費補助ハ社會立法ノ爲メニ要スル經費ノ補助ニシテ地方感化院補助費ハ其主ナルモノナリ。是レ亦法律ノ結果ニ由ル經費ナリトス。大正十年ノ豫算ニ依レバ、其額ハ僅ニ五萬圓ニ過キズ。救護費補助(行旅病人及同死亡人并ニ同伴者ノ救護取扱費ニ對スル補助)モ亦社會費補助ニ準スベシ。

(4) 土木費補助ハ水道下水費補助、河川改修費補助、港灣修築費補助、沖繩縣事業費補助(輕便鐵道補助、那覇港修築費補助)、地方土木費借入金ニ對スル利子補給、横濱市稅補助、北海道拓殖地警察電話架設費補助、砂防費補助等ニシテ多クハ地方團體ニ補助スルモノトス。此中ニアリテモ、水道下水道費ノ補助ハ頗ル多ク、水道ニ在リテハ、東京、大阪、京都、横濱、神戸、福岡、高松、松江、佐賀、吳、鹿兒島、奈良、熊本、尼崎、横須賀、山形、函館、長崎、大牟田、福島、福井、徳島、廣島、松本、上田、若松、下關、門司、和歌山ノ諸市、及東京府澁谷町、東京府江戸川上水町村組合ニ對スルモノニシテ、下水道ニアリテハ、東京、大阪、名古屋、松山、津、若松、大分ノ諸市、及東京府千住町ニ對スルモノトス。中ニハ更ニ水道鐵管増設ニモ補助ヲ與フ、東京、熊本、函館、横須賀、山形、福岡、鹿兒島、仙臺、奈良、大牟田ノ諸市ニ對スルモノニシテ、下水道ニ對シテハ、補助モ亦少シトセズ、江合川、鳴瀬川、千曲川、多摩川、阿賀川、阿武隈川、太田川、圓山川等ノ改修。四日市、船川、榎並、青森、新潟、長崎、名古屋等諸港ノ修築。小名濱、白濱、伊東、能生、油津、波切、鮫瀨、富江等ノ諸漁港ノ修築ニ對スル補助ノ如キ是ナリ。土木費借入金利子補給ハ群馬、山梨、宮城、鹿兒島、神奈川、新潟、栃木、富山、島取、徳島、香川、愛媛、宮城、廣島、京都、兵庫等ノ諸府縣ノ府縣債利子ニ對スル補助ニシテ其額亦多シ。砂防費補助ハ地方團體ノ砂防費ニ對スル補助ニシテ、治水事實費ノ一項目ト爲ス。

土木費補助ハ概シテ豫算外國庫ノ負擔トナルベキ契約ヲ爲スモノニシテ、後ノ會計年度ニ亘ルコトヲ常トス、獨リ砂防工事費ハ法律ノ結果ニ由リ支出スルモノトス。是等ノ諸補助ハ内務省ノ所管ニ屬ス。但シ漁港修築費ハ農商務省ノ所管トス。大正十年ノ豫算ニ依レバ是等ノ補助費ハ八百六拾餘萬圓ニ達ス。

(5) 勸業補助ハ、廣ク農工商ノ産業ニ對スル補助ニシテ、其數極テ多シ。大體之ヲ豫防的經費ノ補助ト、産業發達ヲ目的トスル諸機關設備ノ補助費ト産業獎勵費トノ三分ツベシ。豫防費補助ハ、蠶病豫防費補助、害虫驅除豫防費補助、治水ニ關スル森林經營費補助ヲ數ヘ。産業ノ諸機關補助費ハ農會、水産會、産業試驗場講習所、産業組合中央會等ノ補助、農會倉庫建設費補助、府縣聯合共進會補助費ヲ含ミ。産業獎勵費ハ農事改良獎勵費、糖業改良獎勵費、蠶絲業改良獎勵費、開墾獎勵費、緋羊飼育獎勵費、畜産増殖獎勵費、漁業組合事業改良獎勵費、輸出水産物検査費、林業獎勵費、副業獎勵費等ノ原始産業ノ獎勵費ト、發明獎勵費、外國貿易擴張費、工業獎勵費、重要輸出品検査費、輸出絹織物検査補助等ノ商工業獎勵費トヲ包括ス。此等ノ中ニ就キ、法律ニ依テ補助スルモノハ蠶病豫防、農會、水産會并ニ産業試驗場講習所、遠洋漁業獎勵、工業獎勵中染料醫藥品製造獎勵等ノ爲ニスルモノトス。

(6) 海事補助ハ航路補助ヲ主トシ、海員養成補助、水難救濟補助ヲモ含ム。而シテ其法律ニ依ツテ補助スルモノハ、遠洋航海補助ナリトス。近海航路補助モ亦政府ガ航海業者ト契約ヲ爲スモノナルガ故ニ、法律上政府ノ義務ニ屬スル經費トナルナリ。大正十年豫算ニ依レバ海事補助額ハ七百拾餘萬圓ナリトス。

(7) 文化費補助ハ理化學研究所補助、小學校教員俸給分擔金、小學校教育補助、實業教育費補助、中等諸學校實業補習學校長教員年功加俸分擔金、古社寺保存及補助費、小學校教員恩給補助、私立大學補助、地方團體ノ教育費借入金ニ對スル利子補助等ニシテ、最後ノ二者ヲ除外、悉ク法律ノ結果ニ由テ支給セラルルモノトス。大正十年豫算ニ依レバ、是等ノ補助額ハ千四百五拾萬圓ニ達ス。

補助費ハ斯クノ如ク多數ノ事項ニ亘ルガ故ニ其額モ少シトセズ。大正十年ノ豫算ノ示ス所ニ依レバ、既定計畫ニ屬スルモノハ三〇、一四八、四二八圓ニシテ、新規要求ニ係ルモノ三四、六九一、九二八圓ナリ。而シテ前者ハ明白ニ確定費タルベキモノトス。

以上ハ内地ノ補助費ニ止マル、殖民地ノ補助費ハ此外ニ存ズ。此ノ如ク補助費ハ、其數頗ル

多ク、其額モ亦少シトセザルガ、我國ノ豫算ニ於テハ未ダ必ズシモ重キヲ爲スト云フベカラズ。我國ノ豫算ニ於テ重キヲ爲スハ、國債元利支拂金、文武官俸給、恩給、遺族扶助料、一時賜金、年金等ナリトス。國債元利支拂金ハ所謂國債費ニ該當シ、文武官俸給、恩給、遺族扶助料、一時賜金、年金等ハ人件費ニ該當ス。而シテ國債費ハ當ニ國債整理基金特別會計ヨリ支拂ハル、國債利子ノミナラズ。大藏省預金部預金ノ利子ヲモ包括スベキカ故ニ、其額ハ頗ル大ナリトス。人件費ハ物價ノ騰貴ニ比スレバ、其膨脹徐々タルガ如シト雖ドモ、其總額ヲ見レハ決シテ少シトスベカラズ。

今大正十年度ノ豫算ニ依ツテ、是等ノ經費ノミヲ拾テ計算スルモ、四億七千八百餘萬圓ニ達シ一般會計總額ノ約三割ヲ占ム、即チ左ノ如シ。

國債費	111,766,826	年補助金	10,107,160
預金利子	117,800,777	諸補助金	22,810,327
俸給	1,772,220,000	計	32,917,487
恩給	20,127,111		548,044,011

茲ニ最モ注意スベキハ、豫算上重キヲ爲ス國債費及人件費ガ殆ト憲法六十七條ノ確定費ニ屬スルコトナリトス。

3、繼續費ニ關シテハ、憲法第六十八條ノ規定アリ。曰ク特別ノ須要ニ因リ政府ハ豫メ繼續

費トシテ帝國議會ノ協賛ヲ求ムルコトヲ得ト。故ニ繼續費ハ新事業費トシテ議會ニ提出セラルル場合ニハ、議會自由ニ之ヲ廢除削減シ得ベシト雖ドモ、一度之ヲ可決シ事業ノ繼續ヲ認ムルトキハ後年度ニ支出セラルベキ年度割ハ既定ノ支出トナルガ故ニ、後年度ノ豫算ニ於テ議會漫ニ之ヲ廢除削減スルコトヲ得ズ。但シ政府ガ繼續費ノ年限ヲ改メ從ツテ年額ヲ變更スル場合ハ此限ニアラズ。

之ヲ實際ニ徵スルニ、繼續費ハ一般會計特別會計ニ亘リ、豫算上所謂乙號別冊ヲ爲スモノニシテ、其數頗ル多ク、其費額モ亦甚ダ大ナリトス。今大正十年ノ豫算ニ就テ之ヲ見ルニ、繼續費ノ數ハ百七十餘ヲ算シ、該年度ニ支出スベキ費額ハ一般會計ニ於テ、五億一千九百餘萬圓、特別會計ニ於テ二億五千八百餘萬圓ニ達シ、一般會計ヨリ見レバ、其繼續費ノ三分一ヲ、一般會計特別會計通計ノ上ヨリ見レバ、其繼續費ノ四分一ヲ占ム。而シテ此中ニ就キ、十年度ニ支出スベキ新規繼續費ハ、一般會計ニ於テ九百六十餘萬圓、特別會計ニ於テ六百二十餘萬圓ニ過ギズ、他ハ悉ク既定繼續費ナリトス。以テ憲法第六十八條ノ意義ニ於ケル確定費ガ如何ニ巨額ニ上レルカヲ知ルベシ。

大正十年度ノ豫算ニ就キ、是等繼續費ノ中ニ在リテ、其總額百萬圓以上ノモノ并ニ百萬圓以下ニ在リテハ只代表的ノモノヲ舉グレバ左ノ如シ。

(各省所管合計、并ニ一般會計特別會計總計ノ大小ヲ問ハズ繼續費ヲ網羅セルモノトス)

一般會計

費目 總額 前大正九年度 大正十年度 大正十一年度 大正十二年度 繼續最終年度(大正)

河川改修費	三九,七六六,四七三	一,二二,三三三,五三三	二,四〇,四三三,六六六	一,五八,八八〇,九九六	一,二二,一〇二,九九三	二十四年度
河川調查費	五,四三三,三三六	一,七三,三三三	五,〇〇〇,〇〇〇	五,〇〇〇,〇〇〇	五,〇〇〇,〇〇〇	二十四年度
千曲川改修費	九,〇〇〇,〇〇〇	三,五三三,三三三	一,〇〇〇,〇〇〇	九,〇〇〇,〇〇〇	六,三六六,〇〇〇	二十四年度
多摩川改修費	五,八八〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	八,〇〇〇,〇〇〇	八,〇〇〇,〇〇〇	四,三三三,〇〇〇	十四年度
澁川改修工事增補費	六,五〇〇,〇〇〇	三,〇〇〇,〇〇〇	一,六〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	三,五〇〇,〇〇〇	十二年度
阿賀川及阿武隈川改修費	一四,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	九,〇〇〇,〇〇〇	九,〇〇〇,〇〇〇	一三,〇〇〇,〇〇〇	二十四年度
太田川改修費	三,五〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	三,〇〇〇,〇〇〇	三,〇〇〇,〇〇〇	二,五〇〇,〇〇〇	十四年度
圓山川改修費	五,〇〇〇,〇〇〇	一,五〇〇,〇〇〇	三,五〇〇,〇〇〇	三,五〇〇,〇〇〇	四,八〇〇,〇〇〇	十四年度
江合鴨瀨川改修費	四,八〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	三,八〇〇,〇〇〇	三,八〇〇,〇〇〇	四,〇〇〇,〇〇〇	十五年度
石狩川治水費	三,八〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	三,〇〇〇,〇〇〇	三,〇〇〇,〇〇〇	三,〇〇〇,〇〇〇	十五年度
關門海峽改修費	六,一〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,一〇〇,〇〇〇	一,一〇〇,〇〇〇	一,一〇〇,〇〇〇	二十四年度
長崎港修築費	一,五〇〇,〇〇〇	五,〇〇〇,〇〇〇	五,〇〇〇,〇〇〇	五,〇〇〇,〇〇〇	五,〇〇〇,〇〇〇	二十四年度
壺釜港修築費	一,九〇〇,〇〇〇	三,三〇〇,〇〇〇	三,三〇〇,〇〇〇	三,三〇〇,〇〇〇	三,三〇〇,〇〇〇	二十四年度
新潟港修築費	一,一〇〇,〇〇〇	九,〇〇〇,〇〇〇	九,〇〇〇,〇〇〇	九,〇〇〇,〇〇〇	九,〇〇〇,〇〇〇	二十四年度
神戶港修築費	二,八〇〇,〇〇〇	六,八〇〇,〇〇〇	六,八〇〇,〇〇〇	六,八〇〇,〇〇〇	六,八〇〇,〇〇〇	二十四年度
門司港修築費	五,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	二十四年度
北海道港修築費	三,七〇〇,〇〇〇	二,〇〇〇,〇〇〇	四,〇〇〇,〇〇〇	四,〇〇〇,〇〇〇	四,〇〇〇,〇〇〇	大正十五年迄
橫濱港修築費	一,三〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	二十一年度
下關港修築費	三,六〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	二十一年度
清水港修築費	五,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	二十一年度

北海道土地改良費	八,四四一,〇七〇	一,三三三,三三三	一,三三三,三三三	一,三三三,三三三	八,四四一,〇七〇	十五年度
明治神宮御造營費	三,三三三,三三三	三,三三三,三三三	三,三三三,三三三	三,三三三,三三三	三,三三三,三三三	十一年度
神宮式年御造營費	一〇,八八八,八八八	一〇,八八八,八八八	一〇,八八八,八八八	一〇,八八八,八八八	一〇,八八八,八八八	二十一年度
內務省所管合計	五〇,〇〇〇,〇〇〇	三三,三三三,三三三	四九,〇〇〇,〇〇〇	四九,〇〇〇,〇〇〇	三三,三三三,三三三	二十一年度

神戶港海陸運輸	三〇,〇〇〇,〇〇〇	三〇,〇〇〇,〇〇〇	三〇,〇〇〇,〇〇〇	三〇,〇〇〇,〇〇〇	三〇,〇〇〇,〇〇〇	十一年度
植草製造賣卸業建築費	一,九〇〇,〇〇〇	一,九〇〇,〇〇〇	一,九〇〇,〇〇〇	一,九〇〇,〇〇〇	一,九〇〇,〇〇〇	十一年度
議院建築費	七,五〇〇,〇〇〇	七,五〇〇,〇〇〇	七,五〇〇,〇〇〇	七,五〇〇,〇〇〇	七,五〇〇,〇〇〇	十四年度
國勢調査費	五,八〇〇,〇〇〇	五,八〇〇,〇〇〇	五,八〇〇,〇〇〇	五,八〇〇,〇〇〇	五,八〇〇,〇〇〇	十四年度
造幣局設備擴張費	一,九〇〇,〇〇〇	一,九〇〇,〇〇〇	一,九〇〇,〇〇〇	一,九〇〇,〇〇〇	一,九〇〇,〇〇〇	十一年度
印刷局設備擴張費	三,〇〇〇,〇〇〇	三,〇〇〇,〇〇〇	三,〇〇〇,〇〇〇	三,〇〇〇,〇〇〇	三,〇〇〇,〇〇〇	十二年度
神戶稅關陸上設備費	九,〇〇〇,〇〇〇	九,〇〇〇,〇〇〇	九,〇〇〇,〇〇〇	九,〇〇〇,〇〇〇	九,〇〇〇,〇〇〇	二十一年度
門司稅關陸上設備費	三,〇〇〇,〇〇〇	三,〇〇〇,〇〇〇	三,〇〇〇,〇〇〇	三,〇〇〇,〇〇〇	三,〇〇〇,〇〇〇	十五年度
大藏省所管合計	三三,三三三,三三三	三三,三三三,三三三	三三,三三三,三三三	三三,三三三,三三三	三三,三三三,三三三	十五年度

國防充備費	八,五九〇,〇〇〇	八,五九〇,〇〇〇	八,五九〇,〇〇〇	八,五九〇,〇〇〇	八,五九〇,〇〇〇	二十四年度
臺灣營舍營繕費	三,三三三,三三三	三,三三三,三三三	三,三三三,三三三	三,三三三,三三三	三,三三三,三三三	十一年度
特種兵器製造費	三,三三三,三三三	三,三三三,三三三	三,三三三,三三三	三,三三三,三三三	三,三三三,三三三	十一年度
測量費	五,五〇〇,〇〇〇	五,五〇〇,〇〇〇	五,五〇〇,〇〇〇	五,五〇〇,〇〇〇	五,五〇〇,〇〇〇	十四年度
陸軍省所管合計	二〇,〇〇〇,〇〇〇	二〇,〇〇〇,〇〇〇	二〇,〇〇〇,〇〇〇	二〇,〇〇〇,〇〇〇	二〇,〇〇〇,〇〇〇	十四年度

軍備補充費	一,八七二,〇〇〇	一,八七二,〇〇〇	一,八七二,〇〇〇	一,八七二,〇〇〇	一,八七二,〇〇〇	十六年度
水陸整備費	三,九八八,〇〇〇	三,九八八,〇〇〇	三,九八八,〇〇〇	三,九八八,〇〇〇	三,九八八,〇〇〇	十年度
雜船臨時製造費	一,八三三,三三三	一,八三三,三三三	一,八三三,三三三	一,八三三,三三三	一,八三三,三三三	十年度
海軍省所管合計	七,六九三,三三三	七,六九三,三三三	七,六九三,三三三	七,六九三,三三三	七,六九三,三三三	十六年度

大阪監獄建築費	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	大正五年度迄
秋田地方裁判所建築費	三,三三三,三三三	三,三三三,三三三	三,三三三,三三三	三,三三三,三三三	三,三三三,三三三	十一年度
司法部所管合計	四,三三三,三三三	四,三三三,三三三	四,三三三,三三三	四,三三三,三三三	四,三三三,三三三	十一年度
大阪高等工業學校新營費	一,七〇〇,〇〇〇	一,七〇〇,〇〇〇	一,七〇〇,〇〇〇	一,七〇〇,〇〇〇	一,七〇〇,〇〇〇	十一年度
高等諸學校創設及擴張費	四,八〇〇,〇〇〇	四,八〇〇,〇〇〇	四,八〇〇,〇〇〇	四,八〇〇,〇〇〇	四,八〇〇,〇〇〇	十三年度
文部省所管合計	六,五〇〇,〇〇〇	六,五〇〇,〇〇〇	六,五〇〇,〇〇〇	六,五〇〇,〇〇〇	六,五〇〇,〇〇〇	十三年度
製鐵所擴張費	九,〇〇〇,〇〇〇	九,〇〇〇,〇〇〇	九,〇〇〇,〇〇〇	九,〇〇〇,〇〇〇	九,〇〇〇,〇〇〇	十二年度
燃料研究所新營費	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	十二年度
東京工業試驗所新營費	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	十二年度
治水事業費	一,七〇〇,〇〇〇	一,七〇〇,〇〇〇	一,七〇〇,〇〇〇	一,七〇〇,〇〇〇	一,七〇〇,〇〇〇	二十四年度
農商務省所管合計	一〇,四〇〇,〇〇〇	一〇,四〇〇,〇〇〇	一〇,四〇〇,〇〇〇	一〇,四〇〇,〇〇〇	一〇,四〇〇,〇〇〇	二十四年度

電話交換擴張費	三,七〇〇,〇〇〇	三,七〇〇,〇〇〇	三,七〇〇,〇〇〇	三,七〇〇,〇〇〇	三,七〇〇,〇〇〇	二十四年度
電信擴張及改良費	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	十五年度
發電水力調査費	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	十一年度
通信省所管合計	五,七〇〇,〇〇〇	五,七〇〇,〇〇〇	五,七〇〇,〇〇〇	五,七〇〇,〇〇〇	五,七〇〇,〇〇〇	十一年度
一般會計總計	四,五八六,五八七	一,八八八,八八八	五,二九一,二九二	四,五八六,五八七	四,五八六,五八七	二十一年度
總督府廳舍新營費	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	二十一年度

會計類別	特別會計		總計		會計年度
	金額	單位	金額	單位	
海軍省所管合計	二,七〇〇,〇〇〇	圓	二,七〇〇,〇〇〇	圓	十一年度
大阪監獄建築費	一,八〇〇,〇〇〇	圓	一,八〇〇,〇〇〇	圓	十一年度
秋田地方裁判所建築費	三〇〇,〇〇〇	圓	三〇〇,〇〇〇	圓	十一年度
司法部所管合計	五,八二六,〇〇〇	圓	五,八二六,〇〇〇	圓	十一年度
大阪高等工業學校新營費	一,七〇〇,〇〇〇	圓	一,七〇〇,〇〇〇	圓	十一年度
高等學校創設及擴張費	四〇〇,〇〇〇	圓	四〇〇,〇〇〇	圓	十一年度
文部省所管合計	六,二二六,〇〇〇	圓	六,二二六,〇〇〇	圓	十一年度
製鐵所擴張費	九〇〇,〇〇〇	圓	九〇〇,〇〇〇	圓	十二年度
燃料研究所新營費	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	十二年度
東京工業試驗所新營費	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	十二年度
農務省所管合計	一〇〇,〇〇〇	圓	一〇〇,〇〇〇	圓	二十四年度
電話交換擴張費	三〇〇,〇〇〇	圓	三〇〇,〇〇〇	圓	二十四年度
電信擴張及改良費	七〇〇,〇〇〇	圓	七〇〇,〇〇〇	圓	二十四年度
省信遞	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	十五年度
發電水力調査費	一〇〇,〇〇〇	圓	一〇〇,〇〇〇	圓	十五年度
省務商農	四,〇〇〇,〇〇〇	圓	四,〇〇〇,〇〇〇	圓	十一年度
一般會計總計	四,一五六,〇〇〇	圓	四,一五六,〇〇〇	圓	十一年度
總督府廳舍新營費	三,〇〇〇,〇〇〇	圓	三,〇〇〇,〇〇〇	圓	十二年度
警院新營費	七〇〇,〇〇〇	圓	七〇〇,〇〇〇	圓	十二年度
道院新營費	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	十二年度
海關工事費	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	十二年度
水道擴張工事費	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	十二年度
鐵道建設改良費	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	十二年度
總督府總計	一〇,〇〇〇,〇〇〇	圓	一〇,〇〇〇,〇〇〇	圓	十二年度
鐵道建設費	三,〇〇〇,〇〇〇	圓	三,〇〇〇,〇〇〇	圓	十二年度
臺北醫院新營費	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	十二年度
水利事業費	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	十二年度
臺南水道費	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	十二年度
樟木調查費	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	十二年度
臺北橋梁架設費	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	十二年度
總督府總計	一〇,〇〇〇,〇〇〇	圓	一〇,〇〇〇,〇〇〇	圓	十二年度
土地調查費	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	十二年度
大連上水第三期擴張費	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	十二年度
大連電話改良及擴張費	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	十二年度
關東廳總計	一〇,〇〇〇,〇〇〇	圓	一〇,〇〇〇,〇〇〇	圓	十二年度
木斗港修築費	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	十二年度
太泊港修築費	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	十二年度
鐵道建設費	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	十二年度
鐵道改良費	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	十二年度
樺太廳總計	一〇,〇〇〇,〇〇〇	圓	一〇,〇〇〇,〇〇〇	圓	十二年度
東京帝國大學擴張費	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	十一年度
東京航空研究所擴張費	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	十一年度
東京帝國大學計	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	十一年度
京都帝國大學計	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	十一年度
東北帝國大學工學部創立費	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	十一年度
九州帝國大學農學部創立費	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	十一年度
計	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	十一年度
北海道帝國大學醫學部創立費	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	十一年度
帝國鐵道建設及改良費	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	十一年度
特別會計總計	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	一,〇〇〇,〇〇〇	圓	十一年度
一般會計特別會計總計	六,六六六,〇〇〇	圓	六,六六六,〇〇〇	圓	十一年度

繼續費ノ種類ハ、右表ニ示スガ如ク、甚ダ多シト雖ドモ、之ヲ學理的ニ綜合分析スレハ國防充實費、土木費、官業擴張費、建物營繕費、調査費研究費等ニ歸着ス。更ニ之ヲ横斷シテ觀察スレハ其中八九ハ工事費ニシテ、偶々調査費試験費等ヲ加フルニ過ギズ。是ニ於テ吾人ハ工事費ガ繼續費ノ形ヲ假リテ、憲法第六十八條ノ意義ニ於ケル確定費トナツテ現ハル、コトヲ知ルナリ。

4、豫備費ニ關シテハ、憲法六十九條ノ規定アリ、曰ク避クベカラサル豫算ノ不足ヲ補フ爲メ又ハ豫算以外ニ生シタル必要ノ費用ニ充ツル爲メ豫備費ヲ設クベシト。此規定アルガ故ニ議會ハ豫備費ノ項ヲ廢除スルコトヲ得ズ、其額ニ至テハ固ヨリ之ヲ削減シ得ベキモノトス。サレハ豫備費ハ純然タル確定費ト云ハンヨリモ寧ロ之ニ準スベキモノト見ルベシ。

豫算ハ一ノ見積書ニ過キズ、豫算ヲ執行スルニ際シ其款項ニ超過スル支出ヲ爲ササルベカラサルコトモ生スベク、又豫算ニ於テ豫見セザリシ經費ノ支出ヲ爲サザルベカラサルコトモ生ズベシ。故ニ豫備費ヲ設クルコトハ極テ必要ナリ。既ニ之ヲ設クル以上ハ其額ハ小ニ過クベカラズ、小ニ過グレハ豫算費ノ目的ヲ達スルコト能ハザレハナリ。

豫備費ハ更ニ第一豫備金第二豫備金ニ分ツ。第一豫備金ハ避クベカラサル豫算ノ不足ヲ補フモノニシテ、第二豫備金ハ豫算外ニ生シタル必要ノ經費ヲ支辨スルモノトス。大正十年度豫算(大正九年度亦然リ)ニ依レハ、第一豫備金ハ六百萬圓、第二豫備金ハ八百萬圓ナリ。之ヲ大正八年

度ノ第一豫備金參百萬圓、第二豫備金五百萬圓ニ比スレバ、少カラサル増額ニ相違ナシト雖トモ、之ヲ十五億八千餘萬圓ノ總經費ニ對照スレバ、小額ニ過グト謂ハザルベカラズ、是レ所謂責任支出ノ巨額トナル所以ナリ。

第二節 經常費ト臨時費

第一款 經常費ト臨時費トノ區別ニ關スル學說

經常費臨時費 (Ordentliche u. ausserordentliche Ausgaben; ordinary and extraordinary expendi-

ture)ノ區別ニ關シテハ從來ニツノ學說アリ。各其標準トスル所ヲ異ニス。其一ハ國法上ノ區別ナリ、其二ハ經費支出ノ定マル時ヲ標準トシテ區別スルモノニシテ、其三ハ經費支出ノ効果ガ何時迄續クカラ標準トシテ區別スルモノナリ。

一、經常費臨時費ノ區別ノ標準ヲ國法ニ求ムルモノハ、確定ノ度ヲ標準トス。即チ經常費ハ議會ノ協贊ヲ經テ永久若クハ長時間ニ亘リ其ノ額ノ定マレル經費ニシテ、臨時費ハ年々歳々議會ノ協贊ニ依ツテ定マル變動の經費ナリトナス。此區別ヲ推シ窮ムルトキハ、前節ニ述ベシ確定費自由費ノ區別ニ歸着ス。確定費自由費ノ區別ノ外ニ此意義ニ於ケル經常費臨時費ノ區別ヲ立ツルノ必要ナシ。之ヲ英國ノ例ニ就テ考フルニ、整理基金費ハ經常費ニ、其他ノ一般經費ハ

臨時費ニ該當ス、整理基金費ハ長期ニ亘テ變動セズ其財源モ一定セルニ反シテ他ノ一般經費ハ年々變動シ其財源モ前者ヨリ異レルモノアルガ故ニ、此經費ノ區別ハ其之ヲ支辨スル財源ノ別ト相順應スルモノト云フコトヲ得ベシ、然レドモ、英國ノ豫算ニ依ルモ整理基金費ト他ノ一般經費トノ別ヲ以テ經常費臨時費ノ別ト爲スコト難シ、整理基金費ガ經常費ニ屬スルコトハ論ヲ疎タサレトモ、他ノ一般經費 (Supply Service) 中トハ臨時費ノミナラズ經常費ヲ含ムコト寸毫モ疑フコト能ハサレハナリ。

二、經常費臨時費ノ區別ノ標準ヲ經費支出ノ定マル時ニ求ムルモノハ、經常費トハ其經費ノ性質ニ考ヘテ豫メ正確ニ之ヲ豫定シ得ルモノニシテ年々歳々繰返サルル經費ナルニ反シ臨時費ハ一定ノ時ニ於テハ全ク豫期シ得サル經費ニシテ年々繰返サレサルモノナリトナス。

此見解ハ最モ普通ニ行ハルルモノナルガ、之ニ依ルトキハ性質上偶發的ナル經費ハ豫期シ得サルモノナルガ故ニ臨時費トナササルベカラズ、例ヘハ戰費飢饉救濟費、風水害復舊費ノ如シ然ルニ是等ノ經費ニテモ尙實際ニ於テハ屢々繰返スコトアルベシ、其場合ハ之ヲ分テ二トス其一ハ同一ノ偶發事件ガ長ク繼續シテ容易ニ跡ヲ絶タサル場合ナリ、例ヘハ戰費モ其開戦ノ當時ニ於テコソ豫期セサル經費トイフベケレ、戰爭ノ永引クニ及テハ年々歳々繰返ス經費トナリ了ルガ如シ、吾人ハ百年戰爭三十年戰爭ノ昔ニ溯ル迄モナク米國獨立戰佛革命戰并ニ奈翁戰等最

近史ニ於テ其例ヲ求ムルニ難カラス、今回ノ世界戦ノ如キモ亦其一例タラズンバアラズ、其二ハ同一偶發事件ノ繼續ニアラザルモ、同一ノ性質ヲ有スル偶發事件ガ年々歳々繰返サル場合ナリ例ヘハ風水害復舊費ノ如シ、或ル地方ニ於ケル特定ノ水害ハ全ク一時的ニシテ再ヒ繰返スモノニアラザランモ、之ヲ全國ヨリ見ルトキハ年々歳々何レカノ地方ニ風水害起リ年々歳々以テ例トスルニ至ラハ風水害復舊費ハ年々歳々繰返ス經費トナラサルヲ得ズ、殊ニ我國ノ如キ梅雨期二百十日二百二十日ノ暴風期ヲ有シ風雨ノ襲來ヲ年々ノ恒例トスルニ於テ然リトス、又營繕費ノ如キモ同様ニ論スルヲ得ベシ、一定ノ具體的建造物ニ就テ之ヲ見レハ其新營并ニ修繕ハ偶然性ヲ帯ヒ年々繰返スモノニアラザランモ、一國ノ上ヨリ見レハ、昨年ハ甲ノ建物ヲ新築シ、本年ハ乙ノ建物ヲ新築シ來年ハ更ニ丙ノ建物ヲ新築スルカ如キ、營繕費ナルモノハ繰返シテ絶ユルコトナシ、是レ所謂不規則的現象ガ大量ノ中ニ没シテ規則的現象トナルガ爲メニシテ偏ニ統計學上ニ於ケル大量法則ノ作用ト謂ハサルベカラズ。

此ノ如ク經費ニシテ偶發的性質ヲ有スルモ實際ニ於テ年々繰返スモノハ之ヲ何ト名クベキカ若シ年々繰返スト否トニ依テ區別セバ、是等ノ經費ハ經常費タラサルベカラズ、然レトモ何人モ戰費ヲ以テ經常費ト爲スコトヲ許ササルベシ、戰費ヲ臨時費ト爲サントセバ、其繼續期ヲ一期トシテ觀察シ其繰返スベキモノニアラズト爲ササルベカラズ、若シ此ノ如ク數年ヲ基礎トシ

テ觀察シテ繰返スモノニアラズトセハ又數年ヲ基礎トシテ觀察シテ經費ノ繰返スモノアルコトヲ許ササルカベカラズ、然ラハ則チ此ノ如キ經費ハ之ヲ經常費ト名クベシ、夫ノ風水害費新營費ノ如キ年々繰返サズトスルモ或ル時期ヲ隔テ繰返スコトハ之ヲ疑フベカラサルカ故ニ是レ亦經常費ト爲スベキナリ、國ニ依テハ此ノ如キ經費ヲ一時的經常費ト名ケ、連續的經常費ト區別ス、獨逸帝國ノ如シ、即チ此區別ニ依レハ、連續的經常費ハ年々歳々繰返スベキ經費ニシテ一時的經常費トハ年々繰返サザルモ一定ノ時期ヲ隔テテ回期的ニ繰返スベキ經費ナリ、若シ經費繰返性ヲ以テ標準トナスベクンハ少クトモ此區別ヲ設ケサルベカラズ、我國又ハ他ノ歐羅巴諸國ハ然ラズ、所謂一時的經常費ハ概ネ之ヲ臨時費トス、其結果之ヲ臨時收入殊ニ公債ニ依テ支辨スルコトナキニアラズ、是レ財政上ノ調整ヲ破ルモノニ外ナラズ。

三、經費ノ效果ノ繼續ヲ標準トシテ區別スルハ、かある、ちちちえる (Karl Dietzel) ニ初マヲわぐねる (Wagner) なり、ナッセ (Nasse) ナル (Stein) 至テ大成ス、其中説テ最モ詳ナルモノヲわぐねるトス、其説ニ曰ク、

經常費ハ一會計年度内ニ國務ヲ行フカ爲メニ費サルル國家的生産ニ投スル財ノ經費ニシテ、其價值ハ總テ國家ノ給付ト云フ生産物ニ移ルモノナリ、換言セバ年々規則正シク國家ノ財政ニ放下スル流動資本ナリ、臨時費ハ之ニ反シテ不定期ニ生スル巨額ノ經費ニシテ其支辨ノ結果ハ

後ノ會計年度ニ及フモノナリト。

此說ハ固定資本流動資本ノ觀念ヲ拉シ來テ臨時費ト經常費トヲ區別セントスルモノニシテ、流動資本ガ一回ノ消費ニ依テ其形ヲ變スルカ如ク、經常費ハ一會計年度内ニ費消セラレ後年度ニ其效果ヲ殘ササルニ反シ、固定資本ガ長ク生産ニ利用セラルルカ如ク臨時費ハ其支出ノ結果久キニ亘リテ消失セサルモノトナスナリ。

此說ハ說キ得テ頗ル巧妙ナリト雖トモ、亦疑ヲ挿ム餘地ナキニアラズ、蓋シ臨時費支辨ノ效果ハ後ノ會計年度ニ及フト云フモ戰費天災復舊費ノ如キハ寧ロ流動資本ト同シク其效果其會計年度ト共ニ消ユルトモ見得ベキヲ以テナリ、わづねるハ此場合ニ於ケル臨時費ヲ以テ資本ノ破壞ト看做スモ、之ト同時ニ其損失ハ後ノ會計年度ニ於テ漸次恢復セラルベキコト銀行ガ貸倒レノ損失ヲ年々償却シ行クカ如シト論ス、是レ消極的ノ效果ヲ後年ニ殘スモノトノ論理ニ外ナラズ、亦以テ一ノ辯解トスベシ、若シ夫レ戰ニ提テ政治上經濟上發展ノ基礎ヲ堅クスルガ如キニ至テハ戰費支辨ノ效果ハ積極的ニ後年ニ及フモノト謂フコトヲ得ベキナリ。

四、以上三ツノ見解ハ各々其ノ觀察點ヲ異ニス、學者或ハ此三ノ見解ヲ以テ悉ク眞理ナリト云フモ、第一見解ハ採用スヘキニ非ズ、第二見解ト第三見解トハ全然符號スルモノニアラズト雖トモ、歸スル所相似タルモノアリトス、第三ノ見解ニ依レバ經常費トハ會計年度ニ國家財政

ニ放下スル流動資本ナリト云フ、從テ年々歳々繰返スベキ經費トナルナリ、是レ正シク第二ノ見解ニ歸着スルニアラズヤ、又第二ノ見解ニヨレバ臨時費トハ不定時ニ生スル巨額ノ經費ニシテ其支出ノ效果ガ後ノ會計年度ニ及フモノナリト云フ、從テ年々歳々繰返サザル經費トナルナリ、是レ亦第二ノ見解ト齟齬セズ、然レトモ經常費臨時費ノ區別ハ經費ノ支辨方法ヲ定ムルニ必要ナルガ故ニ問題ハ何レノ見解ガ最モ能ク經費支辨方法ヲ定ムルノ標準トナシ得ルカニ存ス此見地ヨリスレバ吾人ハ第三ノ見解ヲ採ラサルベカラズ。

第二款 臨時費ノ種別

臨時費ハ經常費臨時費ノ區別ニ關スル見解ノ何レヲ採ルカニ依テ多少其内容ヲ異ニス、吾人ハ前述ノ如ク第三ノ見解ヲ採ラントスルガ故ニ茲ニ第二ノ見解ニ從テ臨時費ヲ區別セントス。

臨時費ハ之ヲ分テ二トス、經濟的臨時費、非經濟的臨時費是レナリ。

一、**經濟的臨時費**トハ臨時費支出ノ結果ガ固定資本ニ變シテ連續的利用ノ基礎トナルモノナリ、從テ次ノ會計年度ニ於テハ經費支出ノ額ヲ減スルモ國家的生産力ハ却ツテ増進スルノ結果ヲ生スルモノトス。

此種ノ臨時費ハ更ニ之ヲ私經濟的臨時費ト國家經濟的臨時費トニ分ツ。

1、私經濟的臨時費トハ、アラユル私經濟的事業ノ新設費、擴張費改良費ヲ云フ。わぐねるノ語ヲ借りテ云ヘハ私經濟的放資費 (Privatwirtschaftliche Kapitalanlage) ナリ、茲ニ私經濟的事業ト云フハ廣ク收益ヲ齎ラス事業ノ意味シ、ソガ經濟的經營ニ依ルコトヲ必要トセズ、國家ガ國家ノ職分ヲ遂行スルト同時ニ其經費ヲ支辨スルニ足ル收入、若クハ經營費ヲ支辨スルニ呈ル收入ヲ得ルガ如キ場合ニ於テモ苟クモ、ソガ資本ヲ放下シテ經營スル事業タル以上ハ、茲ニ謂フ私經濟的事業トナス。是等ノ私經濟的事業ハ私人ノ經營ヨリ國家ニ移サルコトアリ又ハ國家ノ新計畫ニカカルコトアリ、前者ノ爲ニ要スル經費ハ買上費ニシテ後者ノ爲ニ要スル經費ハ新設費ナリ、兩者ヲ併セテ廣義ノ新設費トス。

國家ガ事業ヲ經營スル場合ニハ時世ノ必要ニ應シテ之ヲ擴張^セサルベカラズ、是ニ於テ擴張費ヲ生ズ、擴張費ハ反面ヨリ見レハ新設費ナリ、其固定資本ヲ放下スルコト新設ノ場合ト異ルコトナケレハナリ、然リ而シテ事業ニ放下セラレタル固定資本ハ日ヲ逐テ減損スルカ故ニ時々補修セサルベカラズ、是ニ於テ改良費ヲ生ズ。

國家公共團體ニ收益ヲ齎ラスモノハ種々アレトモ、其主ナルモノハ土地、森林、鑛山、官商工業、鐵道、郵便、電信等トス、故ニ此等ノ財産并ニ企業ノ買上新設擴張改良ノ爲ニスル經費ハ茲ニ所謂私經濟的臨時費ヲ形クルモノトス。(私經濟的收入参照)

2、國家經濟的臨時費トハ國家固有ノ目的ヲ遂行スルニ必要ナル設備并ニ營造物ノ新設改良ニ要スル經費ナリ、此經費支出ノ結果ハ無形ノ固定資本トシ連續的利用ノ基礎トナルモノナリわぐねるハ之ヲ國家經濟的放資費 (Staatwirtschaftliche Kapitalanlage) ト名ク。

國家經濟的臨時費ハ國家的改革ノ經費ヲ以テ其主ナルモノトス、蓋シ國家ノ進歩ハ弊ヲ矯メテ善ニ遷ルニ在リ、而シテ其弊ヤ或ハ政治上ノ組織ニ萌シ或ハ社會上ノ制度ニ根サシ、或ハ行政上ノ設備ニ基ク、其組織ヲ改メ其制度ヲ變シ其設備ヲ新ニスルカ如キ甚タ容易ノ業ニアラズト雖モ之ヲ斷行スルニアラサレハ國運ヲ一新スルコト能ハズ、而シテ其改革カ遂行セラルルトキハ國民ノ能力ハ大ニ伸張スルガ故ニ其改革ハ宛然無形資本ヲ放下スルカ如ク爾リトス。

政治組織ノ改革ハ屢々之ヲ見ルコトナケレトモ、一度之ヲ遂クルヤ其經費ハ少キヲ得ズ、例ヘハ明治維新ノ際ニ諸侯武士ノ祿ヲ失フモノニ對シテ產業資金ヲ與ヘタル如シ。社會制度ノ改革ヲ爲スニ際シテモ莫大ナル經費ヲ要ス、例ヘハ奴隸解放ヲ斷行スルニ當リテ其持主ニ賠償金ヲ與フルカ如シ、行政上設備ノ改革ニ至テハ屢々起ルベキモノニシテ道路網ヲ完成シ運河ヲ開鑿シ港灣ヲ築キ地價臺帳ヲ改メ軍備制度ノ改革ヲ爲スカ如キ皆之ニ屬ス。而シテ之カ爲ニ要スル經費亦固ヨリ少シトスベカラズ。

二、非經濟的臨時費トハ國家ノ目的遂行ヲ妨ケル一時的ノ變事ニヨリテ生スル經費ナリ、斯

ノ如キ經費ヲ支出シタル結果ハ固定資本ヲ作ラズ寧ロ財并ニ人力ノ損耗ヲ來タスモノトス、戰費天災費即チ是ナリ。

學者ニヨリテハ斯ル經費ヲ不生産的臨時費ト云ヒ、又狹義ノ臨時費ト云フ、之ニ對シテ第一種ノ經費ヲ生産的臨時費ト云フ。

1、天災費ハ噴火、地震、風水害、凶作等ヨリ生スル損害ヲ復シ困窮者ヲ救助スルノ經費ナリトス、蓋シ是等天災地變ノアルアリテ人民危難ニ泣キ國家諸種ノ設備一時ニ破壊セラルルニ際シテハ國家ハ人民ノ危難ヲ默視スルコト能ハス又國家諸種ノ設備ヲ速ニ復舊スルノ必要ニ迫ルベシ。此ノ如キ場合ニハ額ノ多キ而モ急速ノ經費ヲ要スルハ自然ノ勢ナリ、印度ノ飢饉ニ於ケル、伊國ノ地震噴火ニ於ケル、我國ノ水害ニ於ケル其一例トスベシ。

2、戰費ハ戰爭ニ要スル經費ナリ、戰爭ニ要スル經費ハ廣ク之ヲ解シ軍隊ノ動員費、動員ノ結果俸給々與ノ増額、兵器彈藥ノ充實費、軍隊并ニ糧食ノ輸送費、戰時病院并ニ俘虜ニ關スル經費、戰後ニ於ケル撤兵費賠償金、徵發ノ賠償、傷病兵及ヒ遺族ノ救養費、勳章年金ヲ包括ス、尙戰費ヲ公債ニ依テ支辨スレハ利子ヲ支拂ハサルベカラズ、戰爭ガ永引クニ從ヒ其利子モ巨額ニ上レハ之ガ支辨方法ヲ案セサルベカラズ、又戰爭ハ租稅收入ヲ減スルヲ常トスルカ故ニ其缺陷ヲ補充セサルベカラズ、是等ハ戰爭ノ影響ニ依テ生スルモノナレハ、姑ク前者ヲ間接戰費、

後者ヲ消極的戰費ト名ツケン、是ガ故ニ戰爭ニ要スル經費ハ莫大ナル額ニ上ルベク、平時ノ經費ニ比シ霄壤ノ差ヲ生スルヲ免レズ。故ニ非經濟的臨時費若クハ非常費ト云ヘバ、戰費ガ之ヲ代表スルヲ常トス。

今十九世紀以來ノ大戰爭ニ就テ其戰費ヲ見ルニ、左ノ如シ。

一七九三—一八一五年	奈翁戰爭	百貳拾五億圓	一八七〇—一八七一年	獨佛戰爭	七拾億圓
一八五三—一八五六年	クリミア戰爭	參拾四億圓	一九〇〇—一九〇二年	南阿戰爭	貳拾五億圓
一八六一—一八六五年	南北戰爭	百六拾億圓	一九〇四—一九〇五年	日露戰爭	五拾億圓

今回ノ世界戰爭ニ於ケル戰費ハ、過去ノ記錄ヲ破リ驚クベキ巨額ニ達ス。主ナル國ニ就キ、表ニ依ツテ之ヲ示セバ左ノ如シ。

國名	戰費額(圓)	國名	戰費額(圓)
日	1,111,200,000	聯合國側計	117,180,100,000
英	712,800,000,000	獨	22,000,000,000
米	2,000,000,000,000	獨	22,000,000,000
佛	1,000,000,000,000	獨	22,000,000,000
伊	1,000,000,000,000	獨	22,000,000,000
露	1,000,000,000,000	獨	22,000,000,000
總計	11,111,200,000,000	聯合國側計	117,180,100,000

交戦小國ノ戰費ハ、聯合國側、同盟側各總計中ニ計算シテ一々之ヲ示サズ

我國日清戰爭以來ノ戰費ヲ見ルニ左ノ如シ。(大正三年八月以降大正八年三月迄)

	日清戰後費(圓)	北清事件費(圓)	日露戰役費(圓)	現戰爭費(圓)	
臨時軍事費	二〇〇,四七五,〇三八	五五,六四三,七九	一,五〇八,四七一,五三八	五四,五九,七六	(イ) 韓國事件費
戰後ノ支出	三三,一三四,三三三	—	(ロ) 一五七,四四三,七五三	(ニ) 二九〇,五八,四五〇	計ヨリ支出セル臨時軍事費
臨時事件費	(イ) 三三,一三四,三三三	—	(ハ) 三三,一三四,八五五	(ホ) 一六,五四八,〇〇〇	(ハ) 戰後整理費
計	二三三,九三三,一三九	五五,六四三,七九	一,八八九,六八三,〇〇〇	四七,三三九,一三三	(ニ) 對露貸付額
				一,三三三,九〇七,〇〇〇	(ホ) 行實公債發行額

三、以上ハ學理上ノ分類ナルガ、我國ノ豫算ニ於テハ經費モ收入モ共ニ經常部ト臨時部トヲ分ツ。經費ノ臨時部ニ屬スルモノハ臨時費ニ外ナラズ。

今經費ノ臨時部ニ就テ之ヲ見ルニ、其主要ナルモノハ補助費及ヒ繼續費ナリトス。繼續費ハ殆ト臨時部ニ屬スルモノト云フコトヲ得。補助費モ土木費補助費、海事補助費及ヒ主ナル産業補助費ノ如キ皆臨時部ニ屬ス、只警察補助費、衛生補助費、感化院補助、文化費補助(小學校教育費補助、實業教育費補助、古社寺保存補助及補助)并ニ數種ノ産業獎勵費(農會補助、産業講習所補助、蠶業豫防費補助、輸出絹織物検査補助)ガ經常部ニ屬スルニ過キザルノミ。

補助費繼續費以外ノ經費ニシテ臨時部ニ屬スルモノハ、各省ニ渉ル營繕費、諸種ノ設備費、調査費、研究費、殖民地經費補充金其他雜件トス。繼續費モ營繕費諸種ノ設備費調査費研究費

ヲ含ムコト既ニ述ヘタルカ如シ、從テ繼續費ニアラサル營繕費諸種ノ設備費調査費研究費ハ其一年限リノモノト見ルベク、其性質ニ於テ異ル所アルヲ見ズ、是ガ故ニ我國ノ豫算上ニ於ケル臨時費ハ工事費ヲ骨子トシ之ニ調査費研究費等ヲ加味シタルモノト謂フコトヲ得、唯殖民地經費補充金ノ如キハ殖民地財政ノ獨立ヲ理想トスルニ於テ一時的ノモノトスルコトヲ得レトモ、其殖民地ノ未タ發達セサルモノニアリテハ容易ニ補充金ヲ廢スルノ時期ニ達スルヲ得ザルベク、之ヲ臨時費トスルハ疑問トセサルベカラズ、尙一步ヲ進テ論スレハ、我國ノ臨時費ナルモノハ年々繰返サザル經費トシテハ説明シ難キモノ少カラズ、既ニ夫ノ繼續費ノ如キハ却テ一定期間年々繰返スコトヲ其特色トスレハナリ、サレバトテ之ヲ數年ノ繰返シニ止マルト見ルモ亦不可ナルモノアリ、例ヘハ海軍補充費ノ如シ、蓋シ軍艦ノ年齢ヲ二十四年トセハ永久ニ亘リテ新艦ヲ製造シテ之ヲ補充セサルベカラサレハナリ、我國ノ豫算ニ於テハ前ニ述ヘタル第二見解ヲ探リテ經常費ト臨時費トヲ區別スルカ如シト雖トモ其不徹底ナルコトハ凡ソ此ノ如シ、然レトモ我國ニ於テハ經費ノ臨時部ニ屬スルモノト公債支辨トハ沒交渉トナスガ故ニ、臨時費ノ内容ガ雜駁ニ過クルモ亦大ナル弊ヲ生セズ、然レトモ其經常部ト臨時部トヲ分ツ所以ノ利益ハ殆ト之ナシト云フモ不可ナシ

若シ夫レ經費ノ效果繼續ノ度ヲ標準トシテ觀察センカ、鐵道ノ建設改良、製鐵所擴張費、電

話交換擴張費、水陸設備費、(海軍工廠ノ擴張、火藥廠設備費(無煙火藥製造直營ヲ目的トス)兵器製造所新設費、煙草專賣創業建設費等ハ私經濟的投資ト見ルコトヲ得ベク、治水事業費、河川改良費、港灣修築費、海陸運輸聯絡設備費ノ如キハ國家經濟的投資ト見ルコトヲ得ベシ、調査費研究ノ如キハ必スシモ常ニ固定資本放下ニ準スベカラズ。

之ヲ要スルニ我國ノ豫算上ノ臨時費ナルモノハ學理ニ適ヘルモノニアラズ、唯其財源ヲ求ムルニ當リテハ其選擇ヲ誤ルベカラサルガ故ニ當該經費ニ就テ其本質ヲ究ムルコトヲ必要トス。

第七章 經費ノ地域的配分

經費ガ各地方ノ間ニ普ク配分セラレサルベカラサルコトハ普通的原則ノ要求スル所ナリ、(二三頁參照)此原則ハ國家ノ經費ヲ支出スル際ニ於テ守ラサルベカラサルモノナルガ、各地方ハソレソレ自己ノ經費ヲ有ス、之ヲ地方費ト云フ、地方費ニ對シテハ中央政府ノ支出スベキ經費ヲ狹義ノ國費又ハ中央費ト云フ中央費ト地方費トハ相合シテ廣義ノ國費ヲ爲ス、地方費ハ其地方ニ於ケル行政ノ爲ニ支出スルモノナレハ、其地方ニ支出セラルルヲ自然ノ勢トス、中央費モ地方費ノ事情ニ鑑ミ物件ノ需供ニ顧ミ賣買請負ノ契約ニ意ヲ用ヒバ各地ニ普ク之ヲ支出シ得ベキナリ、此クシテ地方費中央費共ニ各地方ニ正當ニ配分セラレテ初テ普遍ノ原則ノ要求ヲ充

タスモノトス。中央費ノ地方的配分ハ暫ク措ク、余ハ茲ニ廣義ノ國費ガ如何ニ中央費ト地方費トノ間ニ配分セララルルカヲ論究セントス、是ニ於テ中央費ト地方費トノ關係ヲ明ニセサルベカラズ。

殖民地ハ母國ノ主權ノ及フ限り理論ニ於テ母國ト獨立シテ之ヲ見ルベキニアラズ、從テ殖民地ニ關スル經費ハ國費ヲ形クルモノト謂ハサルベカラズ、然レトモ殖民地ハ母國ト地域ヲ異ニシ從テ統治方法ヲモ異ニスルガ故ニ財政上ニ於テハ母國ト離シテ別個ノ觀察ヲ加フルコトヲ得ベシ、是ニ於テ經費ニ於テモ本國經費ト殖民地經費トヲ區別セサルベカラズ。一國全體ノ經費ヨリ之ヲ觀レハ其地域ニ依リ本國費ト殖民地費トニ配分セラルモノト謂フベキナリ。

第一節 中央費ト地方費 (Central and local Expenditure, dépenses, national et dépense locales)

第一款 中央費ト地方費トノ限界

中央費トハ中央政府ノ經費ニシテ地方費トハ地方團體ノ經費ナリ。

一、中央費ト地方費トノ關係ヲ明ニセントセバ、中央政府ト地方團體トノ間ニ於ケル職分ノ限界ヲ明ニセサルベカラズ、之ヲ學理上ヨリイヘハ中央政府ハ國民一般ノ利益ニ關スル政務ヲ以テ其職分トスベク、地方團體ハ地方團體住民ノ利益ニ關スル政務ヲ以テ其職分トスベキナリ

如何ナル事務ガ國民一般ノ利益ニ關シ如何ナル事務ガ地方團體住民ノ利益ニ關スルカハ時代ニ依テ異ラサルベカラズ、今日ニ於テハ外交、國防、司法并ニ國家ノ組織ト國家ノ財政ニ關スル事務、貨幣并ニ鐵道郵便ニ關スル事務ハ國民一般ノ利益ニ關スルモノト見ルベク、其政務ニ關スル經費ハ之ヲ中央費ト爲スベシ、之ニ反シテ地方住民ノ精神上身體上經濟上ノ利益ヲ増進スルノ事務并ニ地方團體成立ノ爲ニ必要ナル組織ト材料ノ供給トニ關スル事務ハ地方團體住民ノ利益ニ關スルモノト見ルベク、其事務ニ關スル經費ハ之ヲ地方費ト爲スベシ。換言スレバ地方費ハ民福増進文化進歩ノ目的ノ爲ニスル經費ヲ骨子トシ、之ニ財務費并ニ機關ニ關スル經費ヲ附加スルモノトス。

二、地方住民ノ精神上身體上經濟上ノ利益ヲ増進スル事務并ニ地方團體成立ノ爲ニ必要ナル組織ト材料ノ供給ニ關スル事務ハ素ト國家ノ事務ニ相違ナケレトモ、苟クモ地方團體ノ存立ヲ許ス限リ地方團體ノ政務トシテ之ニ委任セサルベカラサルガ故ニ學者之ヲ固有事務ト云フ、然ルニ國家ハ特別ノ理由ニ依リ國民一般ノ利益ニ關スル政務ヲモ地方團體若クハ地方團體ノ機關ニ委任スルコトアリ、此カル政務ヲ委任事務ト云フ、從テ地方費ハ固有事務費ト委任事務費トヲ分ツベシ。

三、固有事務費、委任事務費ノ區別ニ似テ非ナルモノヲ義務費、任意費ノ別トス。

●●●●●
義務費 (Pflichtausgaben, dépenses obligatoires) トハ地方團體ノ必要事務ニ關スル經費ナリ、地方團體ノ必要事務トハ地方團體ガ必要ノ有無ヲ認定スルノ自由ヲ有セズ、必ス之ヲ行ハサルベカラサル事務ナリ、所謂委任事務ハ國家ガ特別ノ必要ヲ認テ之ヲ地方團體ニ委任スルモノナルガ故ニ地方團體ハ其必要ノ有無ヲ認定スルノ餘地ヲ有セズ、從テ所謂委任事務ハ必要事務タルヲ自然トス、然レトモ固有事務ト雖トモ法ガ特別ニ地方團體ニ執行ノ義務ヲ負ハシムルトキハ明ニ必要事務トナルベシ。

必要事務ハ法令ニ依テ如何様ニモ之ヲ定メ得ベシト雖トモ、事ノ性質ヨリ一般ニ論スレハ下級團體ニ於テ保安、衛生、建築ニ關スル警察事務、里道ノ修築、戶籍事務、選舉事務、國民教育ニ關スル事務、徵稅事務、徵發事務等ヲ舉クベク、上級團體ニ於テ救貧事務、感化事務、醫療事務、縣道修築事務、土地改良事務、河川改修事務等ヲ舉クベシ。必要事務ハ地方團體ガ必要ノ有無ヲ認定スルノ自由ヲ有セサルカ故ニ義務費ハ必ス地方豫算ニ計上セサルベカラズ、若シ之ヲ計上セサルトキハ監督官廳ハ之ヲ強制シ得ベキナリ。

●●●●●
任意費 (freiwillige Ausgaben) トハ地方團體ノ任意事務ニ關スル經費ナリ、任意事務トハ地方團體ガ其必要ノ有無ヲ認定スルコトヲ得ル事務ナリ、地方團體ガ必要ノ有無ヲ認定シ得ル事務ハ法ニ依テ強制セラレサル事務ナリ、法ニ依テ強制セラレサル事務ト云フト雖トモ固ヨリ地方團體

存在ノ目的ノ範圍内ニアラサルベカラズ、從テ住民ノ精神上身體上經濟上ノ利益ヲ増進スルノ事務タラサルベカラズ、所謂民福増進文化進歩ノ爲ニスル行政ハ之ニ屬ス、今其主ナルモノヲ求ムレハ、中等教育、高等教育、學藝、美術、博物館ノ爲ニスル事務、上水道、下水道、道路掃除、市區改正擴張、公園、市場、屠場、點燈等ニ關スル事務ヲ舉クベシ。是等ノ事務ハ任意事務ナリト雖トモ地方團體ニ於テハ殆ト之ヲ廢スベカラズ、任意事務ハ地方團體ガ必スシモ執行スルヲ要セサルモノト解スベカラサル所以ヲ知ルベシ。而シテ任意費ガ地方團體ニ於テ巨額ニ達スルハ又自然ノ結果ト云ハサルベカラス。

四、地方團體ノ固有事務ハ地方團體組織法ニ依テ一般的ニ委任セラルルヲ常トスルガ故ニ地方費ハ之ニ依テ其範圍ヲ一定スルコトヲ得ベキガ、委任事務必要事務ノ多クナルニ從テ地方費ハ愈々膨脹シ中央費ハソレ丈減少スベク、國費ノ地域的配分ニ變動ヲ生スベシ。之ヲ最近ノ趨勢ヨリ云ヘバ、地方團體ノ委任事務必要事務ハ次第ニ多キヲ加フルガ如シ、是レ地方費ノ膨脹スル所以ニシテ偶々一國ニ於テ中央費ト地方費トノ配分ガ時代ニ依テ異ルノ理由ヲ知ルベシ。

第二款 諸國ノ中央費ト地方費

一、中央費ト地方費トノ配分ハ一國ニ於テモ其時代ニ由テ異ルモノナルガ、國ノ異ルニ依テ

更ニ大ニ異ル所アリ、蓋シ諸國ハ地方團體ノ組織ヲ異ニシ從テ地方團體ニ委任スル事務ノ範圍ヲ異ニスレハナリ、諸國ノ地方團體ニ委任スル事務ノ範圍ヲ異ニスルハ主トシテ政治主義ヲ異ニスルガ爲メナリ、政治主義トハ何ゾヤ、曰ク中央集權主義地方分權主義是ナリ、是等ノ政治主義ハ畢竟歴史ノ產物ニ外ナラサルガ又一ニハ政黨ノ消長ニ依リ人民ノ自治能力ノ發展ニ依テ變スルモノトス。

今列強ニ就テ之ヲ見ルニ、地方分權主義ヲ探ルモノト、中央集權主義ヲ探ルモノト其中間ニ在ルモノトノ三ヲ區別シ得ベシ、英國ハ第一ノ代表者トナスベク佛國ハ第二ノ代表者トナスベク、獨逸伊諸國ハ第三ノ代表者トナスベシ。地方分權主義ヲ探ル國ニ於テハ地方團體ニ政務ヲ委任スルコト少キガ故ニ其地方費ハ自然ニ多カルベク、中央集權主義ヲ探ル國ニ於テハ地方團體ニ政務ヲ委任スルコト極テ多キガ故ニ地方費ハ勢ヒ小ナラサルヲ得ズ、今之ヲ統計ニ徴スルニ左ノ如シ。

	佛(百萬法郎單位)	英(百萬磅單位)	獨(百萬馬克單位)	伊(百萬利里單位)
中央費	1,901,191,133	1,898,191,133	1,907	1,901,133,190,718
地方費	1,453,140,140	100,100	1,110	1,110
中央費百分比	57%	48%	100%	61%
地方費百分比	43%	52%	0%	39%

二、英國ハ地方自治ノ發祥地ニシテ地方分權主義ノ模範國ナリ、英國ニテハ地方行政ニ關シテハ國家ノ官吏ヲ缺キ地方團體ノ機關ガ全然之ヲ管掌ス、英國ノ地方行政ガ眞ニ自治タル所以亦茲ニ存ズ、是レ歐洲大陸諸國ニ見サル所ナリトス、此クイヘハトテ英國地方行政ハ中央政府ノ監督ヲ受ケサルコトヲ意味スルニアラズ、英國地方行政モ中央政府ノ監督ヲ受クルコトハ他ノ諸國ニ異ル所ナシ、其監督ヲ爲ス官廳ハ Local Government Board ナリトス。又英國ノ地方團體組織ハ實際ノ必要ニ應シテ自然ニ發達セルモノニシテ統一ヲ缺キシモノナルガ、英蘭及らゑ一るすニ於テハ一八八八年八月二十二日并ニ一八九四年三月五日ノ地方行政法 (Local Government act) 及ヒ一九〇二年ノ教育法ニ於テ統一ノ曙光ヲ見ルニ至レリ。

英國ノ地方團體ハ英蘭蘇格蘭愛蘭ニ於テ多少異レトモ英蘭ノ制度ヲ以テ模範的トスベシ、英蘭及らゑ一るすハ六十二ノ Counties ニ分ツ倫敦モ一 County ヲ爲ス、其機關ハ County Council 若クハ其選出ニ係レル參事會ニシテ其權限トスル所ハ、選舉事務、營造物ノ管理、癩癩病院傳染病院感化院產業學校ノ維持、道路橋梁ノ修築、衛生、警察、度量衡ノ管理、地方教育、并ニ是等ノ職分ヲ遂行スル爲ニ必要トナルベキ財務等ナリトス。地方警察ハ常置聯合委員會ヲ以テ之ニ當ル。Counties ハ County districts ニ區劃ス、districts ハ urban districts 及 rural districts トヲ區別セサルベカラズ、前者ハ一都市若クハ人口稠密ノ地ヲ含ミ後者ハ多クノ村落 parish 。

ヲ成ルモノトス、何レニスルモ各 district 及 district Council ヲ機關トシ、公衆衛生、水道、下水道、道路行政、建築行政ヲ其權限トス Urban district Council ニ於テハ近來更ニ社會政策ノ實行ニ努メ市場、浴場、隔離病院、運動場、圖書館、博物館ヲ設ケ墓地ヲ供シ瓦斯、電氣、電燈ノ經營ヲ事トス、又二萬以上ノ住民ヲ有スル都市地方ニ於テハ地方教育廳ヲモ形クルモノトス Rural district Council モ亦墓地ヲ供シ給水ノ事務ヲ掌ル。

Rural district 於ケル Parish ハ地方團體ノ最下級ヲ爲シ Parish Meeting ヲ機關トス二百人以上ノ人口ヲ有スル所ニテハ此外 Parish Council ヲ機關トシ救貧衛生其他アラユル自治行政ヲ行フ、Parish ハ多クンレ身體學校區ヲ形クリ、又都市并ニ他ノ Parish ト合シテ救貧區 (Poor Law Union) ヲ形クルヲ例トス。此救貧區ハ救貧事務ヲ主トスルモノナレトモ他ノ委任事務ヲモ掌ラサルニアラズ、而シテ之カ爲ニ必要トナルベキ財務ヲ處理スルハ論ナキ所トス。

此地方團體ノ組織并ニ行動ニ對シテ地方費ヲ生ス、地方費中ニテモ財政上ニ於ケル大小輕重ハ自ラ異ル、今一九〇四年ニ於ケル英蘭及らゑ一るすノ地方費額ヲ見ルニ、公債費二千三百七十五磅、教育費千九百六十萬磅、街路費千二十萬磅、街燈費二百萬磅、癩癩病院費二百九十萬磅、警察費六百萬磅、救貧費千七十萬磅ナリ。公債費、教育費、救貧者、街路費ノ重キヲ爲スヲ見ルベシ。小學教育ハ十九世紀ノ初ニ於テハ全ク私人ニ委ネラレシガ一八七〇年來國家ハ之ヲ

獎勵補助スルニ至リ終ニ地方團體ノ事務トナレリ。是レ地方費中教育費ノ重キヲ爲ス所以ナリ。

三、佛國ハ中央集權主義ノ模範國トモ稱スベク、其制度ハ全ク統一のナリトス。

佛國ノ地方團體ハ之ヲ「分ツベシ」、Communes 及ヒ départements 是ナリ。

Communes ハ其初メ自主權ヲ有セサリシニアラサリシモ、革命以後大ニ制限セラレ全ク國家ノ機關トナリ了シ、中央集權主義ハ却テ愈々徹底的トナレリ、是レ偏ニ佛人ノ國民性ニ基カズンバアラズ、而シテ此下級地方團體ノ職分トスル所ハ警察、衛生、道路、教育、寺院并ニ經濟的營造物ニ關スル政務ニ存ス。

Departements ハ主トシテ佛國革命ニ依テ創メテ成リシモノニシテ、縣道路ヲ修築シ、感化教育ノ設備ヲ整ヘ監獄ヲ維持シ産業ヲ獎勵スルヲ以テ其主ナル職分トナス。

佛國ノ地方團體モ大體ニ民福増進文化進歩ニ關スル行政ヲ其職分トスルモノト謂フコトヲ得レトモ、由來中央集權主義ニ依レルガ故ニ其事務ノ範圍ハ英國地方團體ト同日ニ論スルコトヲ得サルノミナラズ、其地方團體ニ委任セル事務ニ關シテモ國家ハ一方ニ少カラサル補助金ヲ與フルト同時ニ他方ニ至大ノ監督權ヲ保留スルヲ常トス。

此ノ如ク佛國ノ地方行政ハ中央集權主義ニ依ルモノナルガ近來佛國ニ於テモ漸次多クノ政務ヲ地方團體ニ委任シ之ガ義務費トナスルノ趨勢ヲ生セリ、殊ニ第二共和政治ノ確立以後ヲ以テ

甚シトス、其ノ中學校、普通教育ニ關スル事務、女學校ノ監督、傳染病豫防、施療、老幼救助ニ關スル事務ヲ Départements ニ委任シ、普通教育、醫藥ニ依ル救助、老年者救助、衛生ニ關スル事務ヲ Communes ニ委任セルガ如キ其例證トスベシ。而シテ此ノ如キ立法ノ趨勢ヲ生シタル所以ハ議會ガ「一ニハ國家豫算ノ負擔ヲ輕フセントシ、一ニハ地方支辨トスレハ其利益ガ納稅者ニ直接スルカ故ニ納稅シ易シトノ心理論ヨリ出發セルカ爲ニ外ナラズ。佛國ノ學者ハソガ地方ノ財源ヲ枯ラシ、地方當局者ヲ苦ムルニ過キサルノミナラズ、其事務ノ敏活ナル處理モ得テ望ムベカラズ、百害アリテ一利ナシト論ス (Jez. Science des Finances p. 390-2) 學者ノ說固ヨリ理ナキニアラズト雖トモ佛國ノ立法ガ地方團體ニ多クノ事務ヲ委任スル以上ハ中央費ト地方費トノ配分ニ變更ヲ來ササラントスルモ得ベカラズ、近年佛國ノ地方費ノ膨脹シタル所以亦茲ニ在リ。

佛國ノ地方費モ縣ニ於テハ道路及交通機關費、救貧費、公債費最モ重キヲ爲シ市町村ニ於テハ地方道路費、教育費、公債費最モ重キヲ爲ス、尤モ佛國ニテハ小學教育費ハ原則トシテ國庫ノ負擔トナスガ故ニ他國ニ於ケル如ク地方費中ニ於テ大ヲ爲サズ。

三、獨逸ノ地方團體ハ英佛ノ中間ニ位ス、其地方制度ハ各支分國ニ於テ多少異ル所アレトモ其國內ニ於テハ統一的タルヲ失ハズ、其下級團體ハ何レモ都市 (Stadtgemeinde) 并ニ村落

(Landgemeinde) ナルガ、上級團體ニ至テハ普魯西ニ於テハ Provinzen 并ニ Kreise トシテ、巴威爾ニ於テハ Kreise 及ニ Distriktsgemeinden トシテ、索遜ニ於テハ Bezirksverbände トシテ、其稱呼サヘモ一定セズ、而シテ都市并ニ村落ハ其經濟上ノ關係ヲ異ニスルモノナレドモ何レモ近年漸次其行動範圍ヲ擴張シ來リ、地方費ヲ増加シテ已マズ、其職分トスル所ヲ見レハ、多クハ地方警察、普通教育(多クノ國ニ於テハ中學教育ヲモ含ム)道路、救貧ニ關スル行政ノ範圍ニ存ス、大都市ニアリテハ衛生其他民福増進ノ爲ニスルモノ頗ル多シトス。

第三款 我國ノ地方費并ニ其中央費トノ關係

一、我國ノ地方團體ハ之ヲ分テ府縣、郡、市町村ノ三トス、此外ニ於テ目的團體トシテ水利組合、水害豫防組合等ノ公共組合ヲ存ズ。

我地方團體ノ組織并ニ行動範圍ハ、府縣制、郡制、市町村制ニ依テ定マルモノナルガ、皆範ヲ佛獨ニ取レルガ故ニ、英國ノ如キ地方分權主義ノ色彩濃厚ナル制度ニアラサルコトハ之ヲ爭フベカラズ。

我國ノ地方團體ノ行動ニ就テモ固有事務ト委任事務トヲ區別スルコトヲ得ベシ、其各地方制度ニ於テ其公共事務ヲ處理ストアルハ、(市制第二條町村制第二條郡制第二條府縣制第二條) 固有事務ヲ指ス

モノト解スベク法律勅令又ハ從來ノ慣例ニ依リ其地方團體ニ屬スル事務ヲ處理ストアルハ(上掲引用諸條) 委任事務ヲ指スモノト解セサルベカラズ、尙市町村制ニ於テハ特ニ市町村ノ機關即チ市町村長及其他ノ吏員ヲ指定シテ之ニ委任スルモノナキニアラズ(市制九三條町村制七七條)。地方團體ノ事務ニ固有事務ト委任事務トノ別アリトセハ地方費ニモ亦固有事務費ト委任事務費トノ別ヲ設ケサルベカラズ、而シテ委任事務費ハ多ク義務費トシテ地方團體ノ支出セザルベカラサルモノト定ム、但シ法令ニ特別ノ規定アルモノハ此限ニアラズ、(市制一一六條九三條、町村制九六條、七七條、郡制八九條、府縣制一〇二條)

今法令ニ依テ地方團體并ニ其機關ニ委任セラレタル事務ニシテ而モ其地方團體ノ負擔トナルベキ經費ヲ見ルニ府縣ニ於テハ警察費、河川改修砂防ノ如キ土木費、傳染病豫防ノ如キ衛生費、精神病者監護、感化事業ノ如キ教育費、市町村ニ於テハ軍務ニ就テハ徵兵徵發召集ニ關スル經費、財務ニ就テハ國稅府縣稅ノ徵收費、選舉ニ就テハ衆議院議員府縣會議員等ノ選舉ニ關スル經費、教育ニ就テハ小學校費、衛生ニ就テハ、傳染病豫防、獸疫豫防ニ關スル經費、產業ニ就テハ害虫驅除豫防費、郡ニ於テハ徵發河川砂防等ニ關スル經費ヲ主ナルモノトス。此等ノ經費ハ委任事務費ニシテ大體ニ地方團體ノ義務費ヲ形クルモノナリ。

委任事務費ハ此ノ如ク大體ニ義務費ト名クルコトヲ得ルガ、固有事務費中ニモ法令ノ定ムル

所ニ依リ義務費ト見サルベカラサルモノ少カラズ、地方團體ノ組織并ニ機關ニ關スル經費、汚物掃除費ノ如キ其一例トス。

三〇〇

二、各地方團體經費ノ内容ニ就テ之ヲ檢スルニ何レモ土木費、衛生費、教育費、勸業費ヲ主眼トス、府縣ニ於テハ警察費モ亦甚タ重キヲ爲ス。

1、府縣費ニ關シテハ地方稅規則（明治十三年太政官布告第十六號）ヲ以テ其費目ヲ示ス、曰ク警察費、警察廳舎建築費、土木費（町村土木補助費）、府縣會議諸費、衛生及病院費、教育費、郡廳舎修繕費、郡吏員給料旅費及廳中諸費、教育費、諸達書及揭示諸費、勸業費、府縣稅取扱費、府縣廳舎修繕費豫備費是ナリ、府縣歲入歲出豫算調製式（明治二十四年八月一日內務省令第十二號）ハ是等ノ經費ヲ以テ欸ヲ形クルモノトシ。尙衆議院議員選舉費、府縣吏員費、財産費ノ欸ヲ加フ。蓋シ衆議院議員選舉費ハ衆議院議員選舉法ニ依テ府縣ノ義務費トナレルモノニシテ府縣吏員費、財産費ハ府縣制（九七條、七八條、九一條、九八條、一〇二條）ニ依テ義務費トナレルガ故ナリ。

是等諸費ノ中特別ノ法令ニ依テ府縣ノ義務費トナレルモノハ、河川改修費、砂防費、傳染病豫防費、精神病者監護費、感化費、中學校費、高等女學校費、師範學校費等トス。

2、郡費ノ内容モ亦郡歲入歲出豫算調製式（明治二十四年四月十三日內務省令第二號）ニ依テ之ヲ窺フコトヲ得ベシ、曰ク會議費、郡吏員費、土木費、教育費、衛生及病院費、救助費、勸業費、財

産費、豫備費是ナリ、府縣費ニ準スルモノト見ルベシ。

3、市町村費ハ市町村ノ固有事務費ノ外ニ國家并ニ上級地方團體ノ委任事務ニ關スル經費ノ多クヲ含ム、市町村歲入歲出豫算等様式（天正元年十二月七日內務省令第十八號）ニ依リ其欸ヲ爲スベキ經費ヲ見ルニ、役所役場費、會議費、土木費、小學校費、傳染病豫防費、傳染病院若クハ隔離舎費、汚物掃除費、病院費、水道費、下水道費、屠場費、公園費、墓地費、火葬場費、物産陳列所費、市場費、勸業諸費、救助費、養育院費、電氣事業費、瓦斯事業費、基本財産造成費、財産費、諸稅及負擔、神社費、公金取扱費、徵發費、雜支出、豫備費、積立金穀、公債費、訴訟費、寄附金、補助費等三十餘ヲ數フ、之ヲ煎シ詰ムレハ、市町村組織費、土木費、教育費、衛生費、勸業費等ヲ骨子トスルモノトス。此中法律ニ依テ義務費トナレル主ナルモノハ市町村組織費徵兵徵發召集費、國稅府縣稅徵收費、衆議院議員府縣會議員等ノ選舉ニ關スル經費、小學校費、傳染病豫防費、獸疫豫防費、汚物掃除費、害虫驅除豫防費ナリトス。

三、諸地方團體ノ經費ハ其組織費ノ外土木費、衛生費、勸業費、教育費ヲ骨子トスルコトハ前述ノ如クナルガ、ソハ一ニハ諸地方團體ガ固有事務トスル所相同シキニモ因ルベシト雖トモ一ニハ地方團體ニ委任セラレタル國政事務ニ共通ナルモノ存スルニ因ラズンバアラズ、今、是等ノ委任事務ニ就テ國家ト諸地方團體トノ間若クハ諸地方團體相互ノ間ニ於ケル經費ノ配分ヲ

四、我國ノ地方費ハ地方團體組織ニ關スル經費ノ外、教育費、警察費(府縣ニ就テ云フ)土木費、衛生費、勸業費、電氣瓦斯事業費ヲ中軸トスルモノナルコト既ニ論ズルガ如クナルガ、是等諸費ノ中ニ於テモ亦多少輕重ナキニアラズ。今之ヲ統計ニ徴スルニ左ノ如シ(大正九年ノ豫算圓單位)。

	府 縣(圓)	郡 (圓)	市 (圓)	町 村(圓)	總 計(圓)	千 分 比
教育費	三、八、九〇〇、六二八	六、三、五、七、七	三、六、〇〇〇、〇〇〇	一、五、一、一、一、一、一	一、一、一、一、一、一、一	二、〇〇
土木費	四、八、八、六、六、六、六	七、七、七、七、七	三、三、三、三、三	一、一、一、一、一	一、一、一、一、一	一、一
衛生費	五、五、五、五、五	七、七、七、七、七	三、三、三、三、三	一、一、一、一、一	一、一、一、一、一	一、一
警察費	四、〇、五、五、九、九、九	七、七、七、七、七	三、三、三、三、三	一、一、一、一、一	一、一、一、一、一	一、一
勸業費	一、一、一、一、一	一、一、一、一、一	一、一、一、一、一	一、一、一、一、一	一、一、一、一、一	一、一
電氣瓦斯費	一、一、一、一、一	一、一、一、一、一	一、一、一、一、一	一、一、一、一、一	一、一、一、一、一	一、一
新事業費	一、一、一、一、一	一、一、一、一、一	一、一、一、一、一	一、一、一、一、一	一、一、一、一、一	一、一
財產蓄積費	一、一、一、一、一	一、一、一、一、一	一、一、一、一、一	一、一、一、一、一	一、一、一、一、一	一、一
公債費	一、一、一、一、一	一、一、一、一、一	一、一、一、一、一	一、一、一、一、一	一、一、一、一、一	一、一
役所及役場費	一、一、一、一、一	一、一、一、一、一	一、一、一、一、一	一、一、一、一、一	一、一、一、一、一	一、一
會議費	一、一、一、一、一	一、一、一、一、一	一、一、一、一、一	一、一、一、一、一	一、一、一、一、一	一、一
吏員費	一、一、一、一、一	一、一、一、一、一	一、一、一、一、一	一、一、一、一、一	一、一、一、一、一	一、一
其他費	一、一、一、一、一	一、一、一、一、一	一、一、一、一、一	一、一、一、一、一	一、一、一、一、一	一、一
計	三、一、〇、四、一、八、七、八	三、一、八、六、八、九、一	三、一、九、三、四、五、九	三、一、七、六、七、三	三、一、一、一、一、一	一、〇〇〇

此表ニ依テ之ヲ觀レバ、大正九年度ニ於ケル地方費ノ總計ハ八億參千百餘萬圓ニ達ス。之ヲ一般會計ノ國家經費總額拾參億九千六百餘萬圓ニ比スレバ、其六割ニ當ル。而シテ地方費ハ中

最モ重キヲ爲スモノハ教育費ニシテ地方費總額ノ二割七分ヲ占ム。之ニ次グモノハ土木費ニシテ地方費總額ノ一割二分半ニ該當ス。之ヲ各地方團體ニ就テ見レバ、教育費ノ最モ多キハ町村ニシテ、其町村費總額ノ四割二分餘ヲ占ム。小學校費ガ町村ノ財政ヲ壓スルノ大ナルヲ知ルベシ。土木費ノ最モ多キハ府縣ニシテ府縣費總額ノ二割三分ヲ占ム。又電氣瓦斯事業ハ主トシテ市ノ經費ニ屬シ、市ノ總經費ノ二割二分餘ヲ占ム、勸業費ハ府縣ニ多ク、衛生費、公債費ハ都市ニ最モ多シ。亦以テ公債ガ最モ多ク都市ニ起サレタルヲ反證スルニ足ル。

大正九年ノ初ニ於ケル地方債ノ總額ハ四、一、三、八、七、四、二、圓ニシテ、其中市債ハ三、二、六、六、八、五、四、九、三、圓ニ達ス。地方債ノ目的ニ依テ區別スレバ左ノ如シ(圓單位)

電氣瓦斯事業費	一、八、六、七、二、三、五	社會事業費	六、〇、四、九、一、五、五	勸業費	一、五、〇、九、八、〇、〇
教育費	九、五、六、九、七、二	土木費	三、三、三、三、三	其他	五、五、五、五、五
衛生費	七、五、五、七、七、一	災害土木費	三、一、七、七、〇、〇	計	四、一、三、八、七、四、二

地方債ノ四割四分ハ電氣瓦斯事業費ノ爲メニシ、二割六分ハ土木費ノ爲メニシ、一割八分ハ衛生費ノ爲メニセルモノナルヲ知ルベシ。

此ク論シ來レバ公債費ノ四割四分ハ電氣瓦斯事業費ニ、二割六分ハ土木費ニ、一割八分ハ衛生費ニ加ヘテ計算スルヲ妥當トス。是ニ於テ愈々教育費ト土木費トガ地方費中ノ巨柱ニシテ、電氣瓦斯事業費衛生費等ガ之ニ副タル所以ヲ知ルベキナリ。

第二節 本國費ト殖民地費

第一款 本國費ト殖民地費トノ關係

殖民地統治ニ關スル經費ハ廣ク殖民費ト云フ。殖民費ハ殖民地ノ負擔トナルモノアリ、母國

ノ負擔トナルモノアリ、前者ヲ殖民地費ト云ヒ、後者ヲ他ノ母國ノ經費ト併セテ本國費ト云フ。是カ故ニ殖民費ハ殖民地費ト本國費ニ屬スルモノト謂ハサルベカラズ。之ヲ一國全體經費ヨリ見ルトキハ本國ノ支出スベキモノト殖民地ノ支出スベキモノトニ分タルベキナリ、第一ノモノガ本國費ニシテ第二ノモノガ殖民地費タルナリ。

一、本國費ト殖民地費トノ關係ハ殖民地統治ノ根本主義ニ依テ大ニ異ル、殖民地統治ノ根本主義ヨリイヘハ理論上四主義ヲ分ツベシ、吸利主義州化主義自治主義撫育主義是ナリ。

吸利主義トハ母國ガ殖民地ヨリ經濟上ノ利益ヲ得ンコトヲ目的トスルモノナリ、近世ノ初メ西葡等專ラ此主義ニ依テ殖民地ヲ經營シ、金銀鑛ノ採掘ヲ爲シ貿易航海ヲ獨占セリ、和蘭ガ殖民國トシテ勢力ヲ振フニ當リテモ猶ホ殖民地ノ貿易航海ヲ獨占シタリシノミナラズ、殖民地ニ強制耕作ヲ爲シ其產物ヲ專賣セリ英國ガ和蘭ヲ敗リテ殖民國タルノ地位ヲ高メシモ亦其初メ殖民地トノ間ノ航海權ヲ自己ノ掌中ニ收メントシタリシニ由レリ、要スルニ此主義ハ殖民地ヲ以テ經濟的利益ヲ吸收スル地域トナスナリ、是カ故ニ財政上ヨリ觀察スレハ、總テノ殖民地費ハ母國ノ一般經營ト見ルコトヲ得ベク、之ヲ本國費ト區別スルコトヲ得サルナリ。若シ強テ之ヲ區別セントセハ、單ニ經費ノ支出セラルベキ地域ヲ異ニスルニ過キズト謂ハザルベカラズ。

州化主義トハ殖民地ヲ以テ母國ノ延長ト爲シ海外ノ一州ト爲スモノナリ、從テ此主義ハ中央

集權主義ト一致シ、殖民地ヲ母國化シテ中央政府ヨリ之ヲ指揮督監セントスルモノト謂ハサルベカラズ、殖民地ノ發達ノ幼稚ナルモノハ素ヨリ母國ノ一州ト看做シテ行政ヲ爲スコトヲ得サレトモ、其茲ニ至ルコトヲ目的トス。是カ故ニ財政上ヨリ之ヲ觀察スレバ、殖民地ノ發達シテ海外ノ一州ト看做サルモノニアリテハ、其地方ニ費サルベキ經費ハ本國費ト見ルコトヲ得ベシ、換言スレハ殖民地費ハ一ノ地方トナリ了スベキナリ。

自治主義トハ殖民地ニ自治ヲ許スノ主義ナリ、從テ此主義ハ地方分權ノ主義ニ一致シ行政上ニ於テ殖民地ヲ外國視スルモノトス、殖民地ニ自治ヲ許スカラニハ、ソガ經濟政策ニ現ハレテ自由放任タラサルベカラズ、ソガ財政上ニ現ハレテハ獨立ノ財政ヲ有セサルベカラズ。是ガ故ニ此主義ノ行ハルルニハ殖民地ノ人民ガ十分ニ自治能力ヲ有シ且ツ母國ニ對シ反感ヲ有セサルモノタルヲ要ス、獨立ノ財政ヲ有スルニハ又、富源ノ見ルニ定ルモノナカルベカラズ、富源アリ而モンガ開發セラレテ、財政上ノ收入ヲ増シ以テ殖民地費ヲ支辨スルニ足ルニ及テ茲ニ財政ノ獨立ヲ見ルベキモノトス。殖民地ノ財政獨立シテ殖民地費ト本國費トノ區分ハ最モ意義アルモノトナルベキナリ。

殖民地自治主義ハ十九世ニ至テ大體ニ諸國ノ採用スル所トナリシモ、其殖民地ノ發達セサルモノニ於テハ却テ弊害ノ甚シキモノナシトセズ、是ニ於テ平撫育主義アリ。

撫育主義トハ殖民地ヲ視ルコト親ノ子ニ於ケルガ如ク、母國政府ノ監督ニ依テ殖民地ノ人ヲ同化シ殖民地ノ富源ヲ開發セントスルモノナリ、從テ此主義ハ自治主義ノ如ク、放縱ニ失スルコトナク又州化主義ノ如ク、極端ノ集權ニ陥ルコトナク、未タ發達セサル殖民地ヲ治ムルニ最モ適スルモノトス、殖民地財政ノ獨立ハ此主義ニ依ルモ之ヲ理想トス只未タ發達セサル殖民地ニ於テハ容易ニ之ヲ期スベカラズ、是ニ於テ母國ハ之ニ對シテ補助ヲ爲ササルベカラズ、補助費ハ又本國ノ殖民費ヲ形クルモノトス。

二、殖民地費ト本國費トノ關係ハ以上述フルカ如ク殖民地統治ノ根本主義ニ依テ大ニ異ルガ、近來ノ傾向ハ發達セサル殖民地ヲ統治スルニ撫育主義ヲ以テシ、發達セル殖民地ヲ統治スルニ自治主義ヲ以テスルガ如シ、自治主義ノ下ニ於テハ殖民地財政ハ獨立スルヲ例トス、撫育主義ノ下ニ於テハ母國ヨリ補助ヲ受クルヲ普通トスレトモ財政ノ獨立ヲ見ルコトナシトセズ、殖民地ノ財政獨立シテ尙自治制度ニ進マサルハ人民ノ自治能力ガ十分ニ發達セサルガ爲メニ外ナラズ。

殖民地財政獨立ハ殖民地ノ收入ガ殖民地固有ノ經費ヲ負擔シテ餘リアルコトヲ意義ス、從テ殖民地補充金ノ制度ハ之ヲ見ルコトナシ、而モ尙殖民地統治ニ關スル經費ノ或ルモノハ母國ノ豫算ニ計上セラルコトナキニアラズ、殖民地財政ノ獨立セサル所ニ於テモ補充金以外ニ殖民費

ヲ母國ノ豫算ニ計上スルコト少カラズ、是ニ於テ母國ト殖民地トノ間ニ於テ其負擔スベキ經費ノ區分ヲ明ニセサルベカラズ。

此問題ニ關シテハ二ノ學說ヲ區別スベシ、其一ハ形式論ニシテ其二ハ實質論ナリ、形式論ハ經費ニ關スル發案權若クハ裁決權ヲ標準トス、發案權說ニ依レハ殖民地機關ガ自己ノ發案ニ依テ管掌スル行政ノ經費ハ殖民地ノ負擔トシ、母國ガ自己ノ名ヲ以テ管掌セントスル行政ノ經費ハ母國ノ負擔トナスナリ。裁決權說ニ依レハ、殖民地機關ニ裁決權ヲ委任スル經費ハ殖民地ノ負擔トナスベク、然ラサル經費ハ母國ノ負擔ナリトナスナリ。此標準ハ區分ノ要點ヲ控ヘタルカ如キモ、單ニ形式ニ流レ其ノ發案權若クハ裁決權ノ殖民地機關ニ存シ又ハ存セサルノ理由ヲ窮メズ、是カ故ニ須ラク發案スベクシテ發案セズ、須ラク裁決スベクシテ裁決セズ母國ト殖民地トノ間ニ相讓ルモノニ至テハ何レニ負擔セシムベキカ選フ所ニ迷ハン、是ニ於テ吾人ハ形式論ヲ捨テテ實質論ヲ取ラサルベカラズ。

實質論ハ經費ガ何レノ利益ヲ目的トスルカニ依テ之ヲ分ツ、即チ母國ノ利益ノ爲ニスル行政費ハ母國之ヲ負擔シ殖民地ノ利益ノ爲ニスル行政費ハ殖民地之ヲ負擔スルモノトス、從テ後者ハ地方團體ノ固有事務費ノ性質ヲ帶フモノト謂フコトヲ得ベシ。

理論上ノ區別ハ此ノ如ク容易ニ之ヲ爲スヲ得ベキモ實際上ノ問題ニ就テハ尙更ニ吟味ヲ爲サ

サレベカラサルモノアリ、殖民地獲得費、殖民地騷亂鎮定費、國防費、聯絡交通機關費、殖民地監督費并ニ殖民地中央行政費ノ如キ是ナリ。

殖民地獲得費ハ殖民地ヲ獲得スルニ當リテ要スル經費ナリ、買收費若クハ賠償費、反抗者鎮定ノ軍費、殖民地ノ舊主若クハ特權會社ニ對スル年金等ヲ包括ス、是等ノ經費ハ母國一般ノ利益ノ爲ニスルモノト謂ヒ得ベク、母國ノ負擔トスベキモノナリ。

殖民地騷亂鎮定費ハ殖民地獲得ノ際ニモ之ヲ必要トシ、又殖民地獲得ノ後ニモ之ヲ必要トス、前者ハ自ら獲得費中ノ一項ヲ爲ス、故ニ茲ニ論スベキハ後者ニアリ、殖民地獲得後ニ於テ土匪蜂起シ騷亂ヲ極ムルコトハ殖民史ニ於テ其例ニ乏シカラズ、其騷亂ハ普通ノ警察力ヲ以テ之ヲ鎮定スルコト能ハズ、多クハ駐屯軍隊ノ出動ニ待ツ、駐屯軍隊ノ出動ニ關スル經費ハ駐屯軍隊ヲ支フル經費ト關聯シテ之ヲ見サルベカラズ、是ニ於テ國防費ノ所屬ヲ明ニセサルベカラズ。

殖民地ノ國防費ニ關シテハ海軍費、駐屯軍隊費、殖民地民兵費ヲ區別セサルベカラズ、海軍ハ由來母國ノ海岸ヲ衛ルニ止ラズ其臣民ノ到ル處ニ從ヒ天涯萬里ニ於テモ之ヲ保護セサルベカラサルモノナレハ、殖民地ヲ守ルモ亦母國海軍ノ當然ノ職責トナサザルベカラズ、從テ海軍費ハ母國ノ負擔タルベキモノトス。駐屯軍隊ハ殖民地騷亂ニ備フルモノトスレハ其經費ハ殖民地

之ヲ負擔セサルベカラサルガ如シト雖トモ母國軍隊ノ殖民地ニ駐屯スルハ更ニ進テ外國ニ對シテ領土ノ防衛ヲ爲サントスルモノナレバ、母國并ニ殖民地ヲ通スル一般利益ノ爲ニスルモノト謂ハサルベカラズ、從テ駐屯軍隊費ハ母國ノ負擔トナスヲ穩當トス。殖民地ノ民兵費ニ至テハソガ其地方ノ警備ニ任スルヲ目的トスル限り殖民地ノ負擔トスルヲ妨ケズ。

聯絡交通機關費トハ母國ト殖民地間、殖民地相互間并ニ殖民地ト外國トノ間ヲ連絡スル交通運輸機關ニ關スル經費ナリ、此ノ如キ經費ハ單ニ殖民地ノ發達ノ爲ニ必要ナルノミナラズ、母國ガ殖民地ヲ統治スル上ニモ又母國并ニ全體ノ殖民地ノ一般利益ノ爲ニモ必要ナリトス從テ此種ノ經費ハ母國ノ負擔タルベキモノトス。

殖民地監督費ハ母國ニ於ケル殖民地監督機關ニ關スル經費ニシテ殖民地中央行政費ハ殖民地ニ於テ母國ヲ代表スル中央行政機關ニ關スル經費ナリ、蓋シ殖民地ハ如何ニ發達シ自治主義ノ下ニ統治セラルト雖トモソガ母國ノ領土ニ屬スル以上ハ母國ハ之ヲ監督ヲ爲シ進テハ殖民地ニ於ル中央行政ノ組織ニ關與セサルベカラズ、殖民地監督費殖民地中央行政費是ニ於テカ存ス。殖民地監督費ハ母國ノ一般利益ノ爲ニ支出スルモノト見得ベケレハ、母國ノ負擔トナスベキコト論スル迄モナシ、殖民地中央行政費ニ至テハソガ母國ノ代表トシテ母國ノ利益ヲ擁護スル限リ母國ノ負擔トナスヲ正當トスト雖トモ、亦殖民地ノ利益ヲ進ムルコトヲモ職責トスルカ故ニ

其範圍ニ於テハ殖民地ノ負擔トナスコトヲ得ベキガ如シ、サレハ殖民地中央行政費ハ一般利益ト殖民地利益ト何レヲ重シトスルカニ依テ之ヲ決セサルベカラズ、普通ノ場合ニ就テ之ヲ見レハ、上級地方團體ノ最高機關ガ國家機關タルカ如ク、殖民地中央行政機關モ亦母國ノ行政機關トシテ、其經費ヲ母國ニ負擔セシムベキモノトス。

三、以上論スルカ如ク殖民地獲得費、殖民地騷亂鎮定費、國防費、聯絡交通機關費、殖民地監督費并ニ殖民地中央行政費等ハ理論上母國ノ負擔トナシ得ベキガ、反面ヨリ觀察スレバ、是等經費ノ支出ノ結果ハ殖民地ノ利益ニモ歸スヘキガ故ニ殖民地ヲシテ其經費ノ一部ヲ負擔セシムルモ亦不當ニアラズ殊ニ殖民地ガ財政上ノ餘裕ヲ有スル場合ニ於テ然リトス、此クシテ殖民地ガ本國費タルベキ殖民費ノ一部ヲ負擔スルモノヲ分擔金ト稱ス。

分擔金ハ殖民地ヨリ母國ニ支拂フモノナルガ故ニ殖民地ニ取リテハ一ノ經費タルコト論ナシ、母國ヨリ之ヲ觀レバ、收入ノ外觀ヲ呈スレトモ、直ニ殖民地ニ關係セル一定經費ノ支辨ニ充ツルカ故ニ、其實支拂ノ仲介ヲ爲スニ過キサレナリ。

分擔金ハ特定經費ニ關シ殖民地ヨリ母國ニ支拂フモノナルガ、殖民地ハ又特定經費ヲ指定セズシテ母國々庫ニ一定額ヲ提供スルコトアリ、之ヲ獻納金トナス。

獻納金モ殖民地ヨリ母國ニ支拂フ以上ハ殖民地費ヲ形クルモノト謂ハサルベカラズ、而シテ

殖民地ガ優ニ之ヲ支出シ得ルニハ殖民地財政ガ剩餘ヲ存スル場合ナラザルベカラズ。殖民地財政ガ剩餘ヲ存スルコト多キニ從ツテ其獻納金ヲ増サバ、吸利主義ノ實現トモ見ルコトヲ得ベシ。

四、殖民地ヲ有スル諸國ノ實際ニ就テ之ヲ見ルニ、何レモ母國ニ於テ殖民地監督機關ヲ有セザルハナク、其經費ヲ母國ノ負擔トナサザルハナシ。尤モ殖民地監督機關ハ國ニ依ツテ必ズシモノナラズ、或ハ外務省ヲ以テ之ニ充ツルアリ、或ハ獨立ノ殖民省ヲ設クルアリ、或ハ尙進ンデ特別ノ殖民地ニ對シ特別ノ機關ヲ設クルアリ。第一ノ場合ニ於テハ外務省費ノ一部ガ殖民費ヲ爲シ、其額比較的少キヲ得ルモ、第二第三ノ場合ニ於テハ殖民省費又ハ特定殖民地省費ハ全部殖民費ヲ形クリ、其額比較的多カラザルヲ得ズ。

(註)獨逸ニテハ其初メ外務省ニ殖民局ノ一局ヲ存スルニ過ギザリシガ、後殖民省ヲ置ケリ、膠洲灣ハ海軍省ノ管轄トセリ、獨逸ガ平和條約ニ依テ殖民地ヲ失フニ至テ殖民省モ亦自ラ廢セララルニ至レリ。
英國ニテハ外務省ハ殖民ノコトニ干渉セズ、外ニ殖民省、印度事務省ヲ置ク。
佛國ハ外務省ノ外ニ殖民省ヲ置ク。

殖民地監督費ノ外、母國ガ如何ナル經費ヲ負フカニ至リテハ、國ニ依ツテ異リ、一概ニ論ズルコトヲ得ズ。

英國ニ於テハ殖民地補助、殖民地中央行政費并ニ國防費ヲ本國費トス、尤モコハ總テノ殖民地ヲ通シテ然ルニアラズ、大殖民地ニ至テハ國防費迄モ母國ノ負擔トナサズシテ自己ノ負擔ト

ナスモノアリ、印度ノ陸軍費ニ於ケル、加奈陀ノ海軍費ニ於ケルガ如シ、濠洲モ海軍ニ就テハ分擔金ヲ母國ニ支拂フ、民兵費ハ何レモ殖民地ノ負擔トナス。

佛國ニ於テハ國防費(憲兵費ヲ除ク)共通費(殖民省費ノ外、海陸電線補加費ヲ含ム)民政費(司法宗教博物館、殖民地補助鐵道補助等)懲治費等ヲ母國ノ負擔トス、但シ印度支那ニ於テハ殖民地自ラ國防費ヲモ負擔ス。

革命前ノ獨逸ニ於テハ、殖民地豫算中ニ陸海軍費ヲ存シタリシト同時ニ一般會計中ニ國防費并ニ帝國補助金(主トシテ國防費ニ關係ス)ヲ存シ、殖民地ノ國防ノ爲メニモ支出スルコト、ナレリ。サレバ革命前ノ獨逸ニテハ殖民地ノ國防費ハ大體、母國ノ負擔スル所トナリシナリ、其他行政費、共通資金ナルモノモ殆ンド母國ノ負擔ニカ、レリキ。

第二款 我國ノ殖民地費ト本國費

我國ノ殖民費ハ一般會計ニ屬スル經費ト各殖民地・特別會計ニ屬スル經費トニ區別スベシ。

一般會計ニ屬スル經費ハ本國費ヲ形クリ、特別會計ニ屬スル經費ハ殖民地費ヲ形クルモノトス。

一、一般會計ニ屬スル經費ハ殖民地監督費、國防費并ニ補充費トス。

殖民地監督費トハ殖民地監督機關ニ關スル經費ナリ。殖民地監督機關トハ拓殖務省若クハ拓

殖局等ヲ指ス。我國ニテハ臺灣領有後、間モナク拓殖務省ヲ設ケシコトアリシモ、其後又忽チ

ニ之ヲ廢シ、殖民地監督ハ或ハ之ヲ内務省ノ所管トナシ、或ハ之ヲ内閣ノ直屬タル拓殖局ノ所轄トナシ、幾多ノ變遷ヲ經テ以テ今日ニ至レリ。而シテ今日ニ於テハ拓殖局ハ内閣ノ直屬トシテ

朝鮮、臺灣、樺太、及關東州ニ關スル事務并ニ南滿洲鐵道株式會社ニ關スル事務ヲ掌ル。

國防費ハ、陸軍ニ於テハ朝鮮、臺灣、樺太、滿洲ニ於ケル師團若クハ駐屯軍隊并ニ憲兵等ニ關スル諸費ヲ含ミ。海軍ニ於テハ鎮海、永興ノ防備、馬公要港部旅順鎮守府等ニ關スル諸費ヲ含ム、皆本國費ヲ形クルモノトス。

補充金、臺灣、朝鮮、關東州、樺太ノ財政上ノ不足ヲ補充スルモノニシテ、實質ヨリイヘバ其領土權ヲ得タル當初ヨリ之ヲ支出シ、形式ヨリ云ヘバ其新領土ニ特別會計ヲ設ケタルトキヨリ之ヲ支出ス。

(1) 臺灣ニアリテハ明治二十九年ニ於テ約七百萬圓ヲ補足セシガ、翌三十年二月二十六日法律二號ヲ以テ臺灣總督府特別會計法設ケラル、ヤ、補充金ノ名ヲ以テ年々六七百萬圓ヲ一般會計ヨリ繰入レ以テ明治三十七年ニ及ベリ。明治二十八年以後ハ補充金其跡ヲ絶チ所謂財政ノ獨立ヲ見ルニ至レリ。然リ而シテ一タヒ財政ノ獨立スルヤ、臺灣ハ本國トノ財政關係ハ全ク反對ノ方面ニ走り、臺灣ノ財政ノ剩餘ヲ以テ本國ノ財政ヲ助クルコト、ナレリ、即チ明治四十一年

ヨリ臺灣關稅收入ヲ一般會計ニ繰入ルルコト、シ、後、臺灣關稅收入ヲ一般會計ノ收入トシ、其一半ヲ徵稅費并ニ公債費トシテ、臺灣特別會計ニ繰入ル、コト、シ、以テ今日ニ至レリ。此關稅收入ノ繰入ハ形式ヨリスレハ補充金ノ如クニシテ、實質ヨリスレハ却テ獻納金拂戻ト見ルコトヲ得ベキナリ。

(2) 朝鮮ニ在リテハ、明治四十年年度以來統監府經費トシテ現ハレシガ、同四十三年合邦後、補充金ノ名ノ下ニ之ヲ支出スルコト、ナレリ。其額ハ初ニ於テ千五百餘萬圓ナリシモ、爾來累減シテ大正八年度ノ豫算ニハ其跡ヲ絶テリ。是レ財政獨立ヲ期スルノ政策ヨリ出デシモノナルガ、恰モ警察制度ノ改革其他一般行政ノ刷新ニ際會シ、再ヒ逆轉シテ巨額ノ補充金ヲ要スルコト、ナレリ。

(3) 關東廳ニ在リテハ、補充金ハ、明治四十一年度ニ初マリ其額ハ參百餘萬圓ニ上リ、爾來次第ニ減ゼシガ、世界戦後ニ至テ再ビ頭ヲ擡ゲ、大正十年度ニハ四百餘萬圓トナレリ。

(4) 樺太廳ニ在リテモ、明治四十年年度ニ於ケル六拾餘萬圓ヲ以テ初マリ年々累減セシガ、世界戦争終了ノ頃ヨリ逆轉シテ又大ニ増シ來レリ。
今我殖民地經費補充金ノ累年額ヲ示セハ左ノ如シ。

年 度	臺灣補充金	朝鮮補充金	關東州補充金	樺太補充金	計
明治二九年	1,230,000	—	—	—	1,230,000
三〇	1,230,000	—	—	—	1,230,000
三一	1,230,000	—	—	—	1,230,000
三二	1,230,000	—	—	—	1,230,000
三三	1,230,000	—	—	—	1,230,000
三四	1,230,000	—	—	—	1,230,000
三五	1,230,000	—	—	—	1,230,000
三六	1,230,000	—	—	—	1,230,000
三七	1,230,000	—	—	—	1,230,000
三八	1,230,000	—	—	—	1,230,000
三九	1,230,000	—	—	—	1,230,000
四〇	1,230,000	—	—	—	1,230,000
四一	1,230,000	—	—	—	1,230,000
四二	1,230,000	—	—	—	1,230,000
四三	1,230,000	—	—	—	1,230,000
四四	1,230,000	—	—	—	1,230,000
四五	1,230,000	—	—	—	1,230,000
四六	1,230,000	—	—	—	1,230,000
四七	1,230,000	—	—	—	1,230,000
四八	1,230,000	—	—	—	1,230,000
四九	1,230,000	—	—	—	1,230,000
五〇	1,230,000	—	—	—	1,230,000
大正元	1,230,000	—	—	—	1,230,000
二	1,230,000	—	—	—	1,230,000
三	1,230,000	—	—	—	1,230,000
四	1,230,000	—	—	—	1,230,000
五	1,230,000	—	—	—	1,230,000
六	1,230,000	—	—	—	1,230,000
七	1,230,000	—	—	—	1,230,000
八	1,230,000	—	—	—	1,230,000
九	1,230,000	—	—	—	1,230,000
十	1,230,000	—	—	—	1,230,000
十一	1,230,000	—	—	—	1,230,000
十二	1,230,000	—	—	—	1,230,000
十三	1,230,000	—	—	—	1,230,000
十四	1,230,000	—	—	—	1,230,000
十五	1,230,000	—	—	—	1,230,000
十六	1,230,000	—	—	—	1,230,000
十七	1,230,000	—	—	—	1,230,000
十八	1,230,000	—	—	—	1,230,000
十九	1,230,000	—	—	—	1,230,000
二十	1,230,000	—	—	—	1,230,000

此表ニ依テ之ヲ觀レハ、殖民地費ハ舊王家歳費、殖民地中央行政費、地方費、警察費、司法費、教育費、勸業費、交通運輸費、作業費、土木費、財務費、并ニ是等ノ經費ニ關聯シテ生スル公債費(國債整理基金繰入金)豫備費等ヲ包括ス。理論上母國ノ負擔スベキモノヲ殖民地ノ負擔トナセルヲ見ルベシ、此クシテ各殖民地ハ國防費外務費ノ外、殆ンドアラユル經費ヲ網羅シ財政上ヨリシテ宛然一小國家ヲ爲スノ觀ナキニアラザルナリ。

第八章 經費膨脹ノ法則

近世文明諸國ノ經費ハ歲月ヲ逐フテ愈々膨脹スルノ趨勢ヲ示ス。其趨勢ハ洋ノ東西ヲ問ハズ、其國ノ國體政體ノ如何ヲ論セズ、等シク之ヲ見ル所ナリトス。是ニ於テ吾人ハ經費膨脹ノ趨勢ヲ歸納的ニ論證スルコトヲ得ルナリ。然ラバ文明諸國ノ經費ハ何故ニ此ノ如ク膨脹スルカト云フニ、其理由ハ之ヲ尋メルニ難カラズ、是ニ於テ吾人ハ經費膨脹ノ趨勢ヲ演繹的ニ論證スルコトヲ得ルナリ。經費膨脹ノ趨勢ガ歸納的ニ演繹的ニ論證スルコトヲ得バ之ヲ經費膨脹ノ法則ト云フモ不可ナシ。

經費膨脹ノ法則ハろつせる之ヲ唱道シ、えーへべるぐ、わぐねる、るろあ・ぼりゆう、れをん・せー、ばすてーぶる、あだむす、いりー、ばろつく、につち、ふろら、ぐらちあに等之ニ和シ、

1) Roscher-Gerlach, F. W. 5. Aufl. § 110 Eberberg, F. W. § 23. Wagner, Grundlegung. B. VI. K. 3. Leroy-Beaulieu, Traité Part II. Ch. 6. Bastable, Public Finance Bk I. ch. 8. Adams, Science of Finance. Bk I. ch. 4. Ely, Studies in the Evolution of Industrial Society. Part II. ch. 8. Bullock, The Growth of Federal Expenditures. (Political Science Quarterly. March. 1903) Nitti, Principi di scienza delle finanze. 4 edit. pag. 545-85. Flora, Manuale della scienza delle finanze 4 edit. pag. 37-55. Grziani, Istituzioni di scienza delle finanze pag. 145-168.

財政學者間ノ定論トナレリ。

余モ亦茲ニ歸納的ニ諸國ノ財政史ニヨリテ經費膨脹ノ大勢ヲ證明シ、演繹的ニ其原因ヲ究ムル所アラントス。

第一節 財政史上ニ於ケル經費膨脹ノ趨勢

經費膨脹ノ趨勢ハ歐米ノ財政史ニ於テモ又我國ノ財政史ニ於テモ之ヲ證明スベシ。

第一、之ヲ歐洲ニ就テ見ルニ一七八六年歐洲ノ人口ハ一億七千五百萬人ニシテ其經費ハ九億六千七百萬圓ニ過キザリキ (Koldb氏ノ計算ニ據ル)。然ルニ一九一一年ノ初ニハ人口ハ四億二千六百萬人ニ増加シ、經費ハ百五拾億圓ニ上レリ。一八八三年ヨリ一九一一年ニ至ル二十四年間ノ經費ノ増加ハ實ニ尙九拾億圓ノ多キニ及ブ。¹⁾

今歐米諸國ニ就キ別々ニ觀察セントス。²⁾

一、佛國ニ就テ見ルニ、Foville氏ニ據レハ左ノ如シ。

年次	經費額	年次	經費額
一四三(留易九世)	1,131,000,000	一七三(留易十四世)	4,740,000,000
一五五(ふらんそあ一世)	2,288,000,000	一七八九(留易十六世)	10,400,000,000
一六〇七(顯理四世)	3,117,000,000	一八二〇(しやある十世)	20,000,000,000

留易十四世ノ時ハ人口千九百六十六萬九千三百二十人ニシテ現今ノ人口ノ半ニ過ギザリキ。而シテ其經費ハ八千七百餘萬圓ナリシガ、大革命ノ初年ニハ倍以上ニ増加シ、一八二〇年ニハ四倍トナレリ。其後十年ナラズシテ、終ニ十億法(參億八千七百萬圓)ニ達シ、大ニ時人ノ驚倒セシガ、時ノ大臣 Villèleハ爾今爾後再ヒ此大數ヲ見ルコトナカルベシト辯ヅクリシモ、事實ハ全ク之ニ反シ、爾後經費ハ時ヲ經ルニ從ツテ増加シテ已マザリキ、即チ左ノ如シ。

年次	經費額	年次	經費額
一八四〇	1,607,000,000	一九一〇	1,615,000,000
一八八六	2,227,000,000	一九一三	1,828,000,000
一八八九	1,131,000,000	一九一〇	10,318,100,000
一八九九	1,185,000,000		

近來佛國ノ人口ハ殆ンド増加セズ、而モ經費ノ増加ハ斯ノ如ク急ナリ。各人ノ肩上一荷ハル負擔ノ愈々重クナレルヲ知ルベキナリ。

(二) 佛國ハ政體屢々變シタレトモ而モ常ニ中央集權タルヲ失ハザルノ國ナルガ、之ト全ク反對ノ標本ハ之ヲ英國ニ求ムベシ。即チ英國ニテハ地方分權盛ナレトモ王朝ハ依然トシテ變ズルコトナシ、此ノ如ク佛ト大ニ異ル所アレトモ其經費増加ニ至テハ殆ンド軌ヲ同フス。今其經費累加ノ統計ヲ見ルニ左ノ如シ

1) Levasseur et Bodio, Statistique de la population des contrées de la terre (Bulletin de l'Institut International de Statistique Tome XII. II. P. 106-)
Juraschek, Hübners Geographisch-Statistische Tabellen für das Jahre 1910. S. 99-
2) Nitti, op. cit. ノ研究ニ據ル
Flora, op. cit.

年次	經費	年次	經費
一六九一	三九,二八三,〇〇〇	一八九七	九九五,八三〇,〇〇〇
一七四七	一〇九,九九三,〇〇〇	一九〇一	一,七六六,六三九,〇〇〇
一七九七	五五六,二五〇,〇〇〇	一九一〇	一,八四一,五二五,九〇〇
一八六五	六三四,九五〇,〇〇〇	一九一三	一,九二八,一三三,〇〇〇
一八八一	八二八,八五五,〇〇〇	一九二〇	二,一五六,五六七,〇〇〇

英國ニ於テハ人口ハ一六八八年ニ於テ五百五十萬人ニ過キサリシガ、一九一二年ニハ四千五百五十萬人トナレリ。二百二十餘年間ニ於テ人口ハ八倍セルガ、經費ハ六十餘倍ノ多キニ達セリ。

三、英佛ハ共ニ民衆主義ノ勝レル國ナルガ其經費ノ増加此ノ如ク甚シ、然ラバ君主主義ノ盛ナル國ニ於テハ如何ト云フニ、是レ亦同様ノ趨勢ヲ存ズ、君主ノ權力ノ強キハ世界戦前ニ於ケル普露ヲ以テ最トスベシ。

普露ニ就テ之ヲ見ルニ其經費ノ増加ハ左ノ如シ

年次	經費	年次	經費
一八五四	一三,一三三,〇〇〇	一九一〇	二,四七五,九三六,〇〇〇
一八六九	三三,七,六九六,〇〇〇	一九一三	二,一六六,七六一,九一六
一八八二	五四,九,九三三,〇〇〇	一九一四	二,四一七,〇〇〇,〇〇〇

次ニ露國ニ就テ見ルニ、十九世紀後半以來世界戦ノ前ニ至ル間ニ於テ經費ノ増加殊ニ甚シキモノアリキ。

年次	經費	年次	經費
一八〇三	一三,四八八,〇〇〇	一九〇〇	一,四四九,四八八,〇〇〇
一八四〇	一三,九八四,〇〇〇	一九〇七	二,五二七,五六八,〇〇〇
一八六〇	四〇,六五六,〇〇〇	一九一〇	三,二七二,五三三,〇〇〇
一八八〇	八八,三七六,〇〇〇	一九一三	三,五三四,五七六,九一六

四、君主ノ權力革命前ニ於ケル普露ニ及ハザルモ尙立憲君主制度ヲ採レル國ヲ伊國トス。伊國ノ大戦前ニ於ケル財政ハ消極主義ノ模範トシテ稱セラレシト雖ドモ、而モ亦經費増加ノ大勢ニ漏レザリキ。其現時ノ王國ノ建立セラレシ以來、經費ノ増加シタル跡ヲ見ルニ左ノ如シ。

年次	經費	年次	經費
一八六二(Venets + Roma 入ラズ)	三八,五六二,〇〇〇	一八九〇	六七一,四四三,〇〇〇
一八六七(Veneto 入ル)	五五九,一三六,〇〇〇	一九〇五	七二五,三三八,〇〇〇
一八七一(Roma 入ル)	九二〇,〇〇〇,〇〇〇	一九一〇	九六八,一五二,〇〇〇
一八七五	一,一四〇,〇〇〇,〇〇〇	一九一三	一,一八八,一三三,〇〇〇
一八八〇	一,一八八,〇〇〇,〇〇〇	一九二〇	一,四一〇,〇〇〇,〇〇〇

此間一八九〇年代ヨリハ消極政策勢力ヲ得テ、幾分カ經費ヲ減ジタリシモ、尙十六億利即チ六億圓ヲ支ヘ、世界戦前ニハ既ニ相當ニ經費ヲ増加セリ。是ガ故ニ戦前消極的財政ヲ策ヲ以テ

鳴リタル伊國ニ於テモ亦經費ノ膨脹ノ趨勢ヲ肯定セザルベカラズ

五、以上ハ歐洲大國中ノ單一國家ニ就テ云ヘルモノナルガ、複合國家ニ就テ之ヲ見ルモ亦同シキモノアリ。複合國家中最モ大ナルモノヲ獨逸及ヒ世界戦前ニ於ケル奧匈トス。

獨逸ニ帝國ノ建設以來、經費ハ非常ノ勢ヲ以テ増加セリ、即チ左ノ如シ。

年次	經費	年次	經費
一八七四	331,116,000 円	一九〇〇	1,090,122,000 円
一八八〇	331,900,000 円	一九一三	1,241,927,000 円
一八八八	475,600,000 円	一九二〇	1,280,822,000 円

コハ帝國經費ニ就テ見タルノミ、支分國ノ經費ヲ加ヘバ、更ニ甚シク膨脹スベシ。

世界戦前ニ於ケル奧匈國ニ就テ見ルニ、其國家聯合 (Saatenbund) ノ成リシ翌年ヨリ世界戦勃發ノ前年ニ至ル迄ニ於テ經費ハ倍加セリ、即チ左ノ如シ。

年次	經費	年次	經費
一八六八	49,820,000 円	一九〇八	1,241,000 円
一九〇二	108,020,000 円	一九一三	100,120,000 円

コハ奧匈共同政務ニ關スル經費ニ過キザルガ、奧匈兩國ノ經費ハ一九一三年ニ於テ、奧國拾貳億七千六百九拾五萬四千九百八拾六圓、匈國八億四千參百六拾壹萬八百七拾八圓ナリキ、之ニ共同政務費ヲ加フレハ、實ニ、貳拾貳億參千八百五拾萬圓ニ達シタリ。

六、以上ハ歐洲ノ大國ヲ觀察シタルモノナルガ、小國ニ於テモ亦同様ニ經費増加ノ趨勢ヲ認メ得ベシ。聯邦タル瑞西、單一國家タル白耳義及ヒ和蘭ニ於テ之ヲ證セン。

國名	年次	經費	年次	經費
瑞	一八八五	11,111,000 円	一九〇〇	11,851,000 円
	一八八六	11,111,000 円	一九〇〇	11,851,000 円
西	一八八五	11,111,000 円	一九〇〇	11,851,000 円
	一八八六	11,111,000 円	一九〇〇	11,851,000 円
白耳義	一八八五	11,111,000 円	一九〇〇	11,851,000 円
	一八八六	11,111,000 円	一九〇〇	11,851,000 円
和	一八八五	11,111,000 円	一九〇〇	11,851,000 円
	一八八六	11,111,000 円	一九〇〇	11,851,000 円
蘭	一八八五	11,111,000 円	一九〇〇	11,851,000 円
	一八八六	11,111,000 円	一九〇〇	11,851,000 円

七、斯ノ如ク歐羅巴ノ大小國、統一シタル國、地方分權ノ國、好戰國、平和主義ノ國、民主國、君主國等種々ノ國ノ例ヲ見ルニ、皆等シク經費ノ増加ヲ示セリ。然レドモ是レ決シテ歐羅巴ノミノ現象トスベカラズ、北米合衆國ノ財政史ニ徴スルモ亦然リ、今其大體ヲ見ンニ、

年次	經費	年次	經費
一七九一	100,100,000 円	一八七〇	100,100,000 円

一八二〇	10,000,000	一八八〇	5,500,000
一八二〇	5,100,000	一八九〇	5,900,000
一八四〇	4,000,000	一九〇〇	9,700,000
一八五〇	4,000,000	一九一〇	1,000,000,000
一八六〇	1,000,000	一九二〇	8,700,000

三二八

八、以上ハ國費ニ就テ研究シタルモノナルガ、進ンデ地方費ニ就テ之ヲ見ルモ、尙同一ノ趨勢アルヲ知ルベシ、國ニ依ツテハ地 費膨脹ノ勢ハ國費膨脹ノ勢ヨリモ更ニ急ナルモノアリ。佛國ノ市町村費ノ發達ヲ見ルニ左ノ如シ。

年次	年次	年次	年次
一八三八	一八九〇	一九一〇	一九一〇
1,100,000	1,100,000	3,100,000	3,100,000

單ニ巴里市ノ經費ノミヲ見ルモ左ノ如シ。

年次	年次	年次	年次
一八一〇	一八九五	一九〇〇	一九〇〇
1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
一八一三	一九〇〇	一九〇〇	1,000,000
一八六九	一九〇〇	一九〇〇	1,000,000
一八八七	一九〇〇	一九〇〇	1,000,000

此經費ハ瑞典、諾威、丁抹瑞西、葡、塞、希等ノ小國ノ國費總額ヨリモ更ニ大ナリトス。次ニ英國ノ地方費ヲ見ルニ、亦甚シク膨脹セリ、即チ左ノ如シ。

年次	年次	年次	年次
一八六八	一八九〇	一九〇〇	一九〇〇
1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
一八七四	一八九八	一九〇〇	1,000,000
一八八〇	一九〇〇	一九〇〇	1,000,000

倫敦市ノ經費ノミニテモ、一九一〇年ニ壹億五千九百七拾壹萬圓ニ上レリ。伊國ノ地方費ヲ見ルニ亦左ノ如ク増加セリ。

年次	年次	年次	年次
一八七一	一八八九	一九〇〇	一九〇〇
1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
一八八二	一九〇〇	一九〇〇	1,000,000

忠林市ノミノ經費ノ増加ヲ見ルニ左ノ如シ。

年次	年次	年次	年次
一七九七	一八七五	一九〇〇	一九〇〇
1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
一八二五	一九〇〇	一九〇〇	1,000,000
一八五五	一九〇〇	一九〇〇	1,000,000

三二九

巴里、倫敦ハ最モ富メル國ノ首府ニシテ而モ人口集中最モ甚シキ大都ナレバ、其經費ノ増加ハ敢テ怪ムニ足ラズ。然ルニ人口少クシテ而モ政治上ノ中心タラザル忠林市ニ於テモ亦經費ノ増加ヲ見ルナリ。

經費増加ノ趨勢ハ大市ト小市ト政治上ノ中心ト否ラザルト同ハズ總テ之ヲ概論シ得ベシ。

第二、我國ノ最近財政史ニ就テ之ヲ見ルモ亦歐米ト同ジク經濟膨脹ノ大勢ヲ肯定シ得ベシ。

今財政統計ノ示ス所ニ依テ經費膨脹ノ跡ヲ見ルニ左ノ如シ。(豫算)

年 度	經 費 額	年 度	經 費 額
明治 元	110,100,000	大正 三	229,596,131
一	107,900,000	四	227,088,821
二	103,112,000	五	210,421,108
三	97,833,000	六	200,275,863
四	91,802,000	七	190,800,952
五	87,712,000	八	186,821,022
六	82,133,000	九	182,899,632
七	77,556,000	一〇	179,152,018
八	72,979,000	一一	175,404,404
九	68,402,000	一二	171,656,790
一〇	63,825,000		
一一	59,248,000		
一二	54,671,000		
一三	50,094,000		
一四	45,517,000		
一五	40,940,000		
一六	36,363,000		
一七	31,786,000		
一八	27,209,000		

年 度	經 費 額	年 度	經 費 額
二九	168,856,508	四	588,269,852
三〇	133,678,842	五	590,795,352
三一	119,777,526	六	592,320,852
三二	105,876,210	七	593,846,352
三三	91,974,904	八	595,371,852
三四	78,073,598	九	596,897,352
三五	64,172,292	一〇	598,422,852

此表ニ依テ之ヲ觀レバ、我國ノ經費ハ日清戰役後ニ於テ億圓ノ臺ニ上リ、日露戰役後ニ至テ四億圓ニ突進シ、爾來五六億圓ノ間ヲ往來セシガ、世界戰ニ入りテヨリ累次ニ増加シ忽チニシテ拾億圓臺ニ進ミ、大正十年度ニハ拾五億八千餘萬圓ノ多キニ及ベリ。之ヲ明治初年ノ貳千萬圓ニ比スレバ、實ニ八十倍ノ増加ナリ。其間僅ニ半世紀ニ過キズト雖トモ、亦隔世ノ感ナクンバアラズ。然レドモ、コハ一般會計ニ就テ計算シタルニ過キズ、特別會計ヲ加算スレバ更ニ甚シキ膨脹トナルベシ。試ニ大正十年度ノ豫算ニ依ルモ、一般會計特別會計ヲ通計スレバ、其額ハ約參拾億圓ニ上ルナリ。1)

我國々費ノ膨脹ハ以上述べタルガ如ク戰爭ニ因ルコト少カラズ、即チ日清戰爭、日露戰爭、日獨戰爭ハ經費膨脹ノ上ニ一階段ヲ劃シ、其戰後ニ於ケル經費ト戰前ニ於ケル經費トノ間ニ非常ノ相違ヲ來セリ。戰爭ノ結果并ニ戰後經營ニ關シ年々巨額ノ經費ヲ要スルニ至リシガ故ナ

1) 拙論、大正十年ノ豫算ヲ論ム(經濟論叢第十三卷二號)

リ。然レドモ戦争ナシトスルモ、我國經費ハ増加シタリシコト疑ヲ容レズ。地方費ノ増加ニ見テモ其一斑ヲ知ルベシ。

我國地方費ノ膨脹シ來レル跡ヲ見ルニ左ノ如シ。(*豫算)

年 度	經 費 額	年 度	經 費 額
明治 二四	四三,八八一,三三三	三 九	一七,五三九,九六
二 五	四七,五三〇,三六六	四 〇	二〇,二二九,四〇八
二 六	五〇,〇七五,五八八	四 一	二二,八四二,五八二
二 七	五三,一七二,三〇二	四 二	二五,三三三,三三三
二 八	五八,三三六,七八五	四 三	二八,七〇八,四八一
二 九	七〇,八〇〇,八八一	四 四	三九,七五〇,〇八一
三 〇	九〇,五五三,八〇一	大 正	
三 一	九八,七二六,七七一	元 四	七九,七七一,四三三
三 二	一〇三,一〇七,七七一	二	八二,七七一,七七一
三 三	一〇三,一〇七,七七一	三	八二,七七一,七七一
三 四	一〇三,一〇七,七七一	四	八二,七七一,七七一
三 五	一〇三,一〇七,七七一	五	八二,七七一,七七一
三 六	一〇三,一〇七,七七一	六	八二,七七一,七七一
三 七	一〇三,一〇七,七七一	七	八二,七七一,七七一
三 八	一〇三,一〇七,七七一	八	八二,七七一,七七一
三 九	一〇三,一〇七,七七一	九	八二,七七一,七七一

地方費ハ國費ノ如ク戦争ニ依ツテ大躍進ヲ爲サズト雖ドモ年ヲ逐フテ増加シテ已マザル

ヲ見ルベシ、最近ノ經費ヲ日清戦争以前ノ經費ニ比スルニ實ニ六倍餘ニ達ス。

論シテ茲ニ至リ、余輩ハ我國ノ經費モ歐米ト同シク非常ノ勢ヲ以テ膨脹シ來レルコトヲ断定セサルヲ得ズ、

第三、以上余輩ハ歐米并ニ日本ノ財政史ニ就テ、經費ノ膨脹シ來レルコトヲ數字的ニ説明セシムルガ、茲ニ問題トスベキハ、斯ル經費ノ増加ガ實質的ナリヤ假裝的ナリヤト云フコト是ナリ、實質的ニ經費ノ増加ヲ立證セントセバ、單ニ數字ノミヲ比較シテ足レリトスベカラズ、比較ハ宜シク同一標準ニ於テ之ヲ爲ササルベガラズ、然ルニ時ノ進ムニ伴ヒ領土ノ擴張アリ支拂方便ハ變化アリ自然經濟ヨリ貨幣經濟ニ移レルカ如シ、貨幣價格ノ低落アリ、是等ハ經費増加ノ外面ヲ裝フモノナルガ故ニ宜シク之ヲ除キテ經費増加ノ内面真相ヲ探ルヘキナリ。

若シ永キ期間ヲ取リテ經費ヲ比較センカ、是等ノ外面的條件ヲ取除キテ考ヘサルヘカラスルカ故ニ真相ヲ得ルコトハ或ハ難カラン、然ルニ一八七〇年後今日ニ至ル約五十年間ニハ領土變更モ甚タ少ナク支拂方便ノ變化モナケレハ比較的真相ヲ得ルニ庶幾シ、只貨幣價格カ低落シタルコトハ事實ナレハ素ヨリ之ヲ差引カサルヘカラス、之ヲ差引クモ此期間ニ於テ經費カ非常ニ膨脹シタルコトハ何人モ異議ヲ挿ムコト能ハサルナリ。

第二節 經費膨脹ノ演繹的説明

經費膨脹ノ大勢ハ國家ノ目的若クハ職分ノ擴張増大ヨリ之ヲ演繹スベシ、近世ノ國家ニ就テ見ルニ其目的若クハ職分ハ種類性質ニ於テ擴張シ分量ニ於テ増大セルコト第一章ニ説キシガ如シ。

一、國家ノ目的ガ威力目的ノ法律目的ヨリ文化目的ノ福利目的ニ進ムルハ種類性質ニ於テ職分ノ擴張セルコトヲ意味シ國家ノ行動範圍ノ擴張トナリテ現ハルナリ、國家ノ行動範圍ガ擴張スレバ國家ノ經費モ亦増加シ來ラサルヘカラズ、國家ノ行動範圍ノ擴張ハ同時ニ官廳ノ増設官吏ノ増加ヲ意味ス、官廳ノ増設ハ營繕費廳費ノ増加トナリテ現ハルナリ、換言スレバ物件費ノ増加ナリ、官吏ノ増加ハ俸給費等ノ人件費ノ増加トナリテ現ハルナリ、サナキダニ各官吏ノ俸給、恩給、遺族扶助料等ハ日ヲ逐フテ増額ノ必要アルニ官吏ノ増加ニ依リ巨額ノ俸給費ヲ要ストセバ人件費ノ増加ハ尋常ノコトニアラサルナリ。

人件費、物件費ノ増加ハ一般經費ノ増加ナリ、サレハ一般經費ノ増加ハ國家職分ノ擴張ヨリシテ自然ニ之ヲ論結シ得ベキナリ。

二、國家ノ行動ハ同一職分ニ就テモ亦其分量ヲ増シ來レリ、隨テ同一事項ニ關スル國家ノ經

費モ増加セサルヲ得ズ、試ニ軍備擴張ニ就テ見ヨ、列國ハ武裝ノ平和ナル名ノ下ニ軍備ヲ擴張シテ互ニ後レサランコトヲ期スルニアラズヤ、此ノ如ク同シ目的ノ爲ニスルモノモ次第ニ事務ハ繁雜トナルノ傾向アリ、然ラバ何故ニ此ノ如ク同一目的ノ爲ニスル經費ガ其量ヲ増スカト云フニ、ソハ一方ニ國家ノ職分ガ禁止の原則ヨリモ豫防の原則ニ進メルニ因ルト同時ニ他方ニハ單ニ社會進歩其モノニ因ルト云ハサルヘカラズ。

社會進歩ノ反影トシテ國費ヲ増加セシムルモノ之ヲ三分ツベシ。

(一) 人口ノ増加 人多ケレバ事務繁ク、國家ノ處置ニ待ツモノ次第ニ多キヲ加フベシ、從テ警察署、裁判所、學校等種々ノ官廳ヲ増設セサルヘカラズ又之ニ要スル官吏ヲ任命セサルベカラズ、經費ノ増加ハ自然ノ結果トシテ現ハルナリ。

(二) 技術ノ進歩 技術ガ進歩スレバ新シキ財ヲ生ス、新シキ財ガ生スレバ國家ハ舊來ノ財ノ用ヲ終ラサルモ尙之ヲ採用セサルヘカラズ、ソハ陸海軍ニ於テ最モ甚シ。

(三) 國家自體ノ進歩 近世ノ國家ハ一方ニ、年々同シ生活ヲ繰返シツツアルト同時ニ他方ニ臨時事件勃發ノ爲ニ時ニ躍進ヲ試ムルコトアリ、戰爭ヲ爲シ又ハ行政ヲ改革シ官營主義ヲ行フ等ノ如シ、此等ノ目的ノ爲メニ國家ハ巨額ノ公債ヲ起ス、然ルニ一旦公債成立セバ少クトモ年
年利子ヲ支拂ヒ又時アリテハ元金ヲモ償還セサルヘカラズ從テ其元利支拂ノ額ハ財政上非常ナ

ル負擔トナリテ現ハルルナリ、之ヲ公債費トス、昔ニアリテハ公債費ハ國家經費中之ヲ見ザルカ或ハ極テ僅少ナル額ヲ見ルニ過キサリシガ近世ノ國家ハ何レモ非常ニ大ナル公債費ヲ有スルヲ常トス。

人口ノ増加ハ人間ノ發達ナリ、而モ文治費ヲ増スコト極テ大ナリ、技術ノ進歩ハ人智ノ發達ニシテ而モ國防費ノ増加ヲ來スコト甚タ急ナリ、公債ノ増加ハ國家發達ノ自然ノ結果ナリ而モ公債費ノ増加ヲ促スコト聲ノ響ニ應スルガ如シ、此三拍子ガ揃ヒテ經費増加ノ音樂ハ奏セラルルナリ、果シテ然ラバ人間ノ發達、人智ノ發達、國家ノ發達ガ經費ノ膨脹ヲ促スルモノト云フヘキナリ、此人間ノ發達、人智ノ發達、國家ノ發達ヲ余ハ假ニ名テ社會ノ進歩トイヘルナリ。

人或ハ經費ノ膨脹ヲ以テ官僚政治ノ罪ニ歸スルモノアリ、素ヨリ官僚政治ハ經濟上ヨリ批難シ得ル點多々之アルベク節減シ得ル冗費モ少カラサルヘシト雖モ、假令冗費ヲ除去スルモ尙經費膨脹ノ趨勢ヲ防止シ得サルヘシ、余輩ハ如上諸原因ヲ尋ネ來テ到底經費膨脹ノ法則ヲ否認スベカラサルヲ信ス豈之ヲ官僚政治ノ結果ノミニ歸スルヲ得ンヤ。

人或ハ經費膨脹ノ原因ヲ民主主義ノ傾向ト技術ノ進歩トニアリトスルモノアリコーン(Cohn)ノ如シ民主主義ノ傾向トハ社會的立法カ次第ニ多キヲ加ヘ貧者ニ同情スル設備ノ成レルヲイフ故ニ是等ハ福利ノ目的ノ爲ニスルモノトナスヲ得ベシ、技術ノ進歩ハ余ノ既ニ述ベシ所ナリ、

此論ハ經費膨脹ノ原因ヲ盡サス而モ尙其今日ニ於ケル最モ顯著ナルモノヲ捉ヘタリト評スベクン。

余ハ説テ茲ニ至テ一言につちいニ此カ經費膨脹ノ原因トナセルモノニ論及セサルベカラス、氏ハ十九世紀殊ニ其後半ニ於ケル經費膨脹ヲ肯定シ其原因ヲ求メ(1)、國防費ノ連續的增加(2)、公企業(3)、公債ノ増加(4)、社會防衛方法ノ進歩(5)、勞働階級ノ増加從テ國家行動ノ増加ニ歸セリ、然ルニ氏ノ謂フ所ノ第二、第四、第五ハ國家職分ノ擴張ト見ルコト得ベク第一第三第五ハ同一職分ノ分量的增加ノ中ニ數フルコトヲ得ベシ。

第三節 經費膨脹ノ批判

經費膨脹ハ前述ノ如ク、歸納的ニモ、演繹的ニモ之ヲ證スベク、之ヲ爭フベカラサル法則トナスベシ、事實ハ曲クベカラズ、然レトモ之ヲ是非スルハ全ク別問題ナリ、學者ノ之ニ對スル批判ハ一ナラズ、或ハ悲觀スルアリ、或ハ樂觀スルアリ、其悲觀スルモノノ代表者ヲ佛國學者レオンセイ(Lion Say)トス、氏ハ佛國財政ノ發達ヲ研究シ其經費膨脹ヲ肯定シ之ヲ以テ一般ノ害惡(Mal universel)ト斷シ殊ニ民主國ニ於テ最モ危險ナリトセリ、蓋シ其論據トスル所ハ經費増加ノ三分ノ二ハ國防費ニシテ三分ノ一ハ官業費、教育費ナリト云フニアルガ如シ。

此悲觀說ニ對シテ樂觀說ヲ爲スモノヲ獨逸ノ學者トス、彼等ハ經費膨脹ノ事實ヨリシテ國家行動範圍ノ擴張ヲ推論シ國家行動範圍ノ擴張ハ即チ國家ガ次第ニ國家社會主義ヲ行フニ向テ進ミツツアルノ證ナリトセリ (Bluntschli)。

余輩思フニ國家行動範圍ノ擴張若クハ國家社會主義ノ實行ナルモノガ果シテ喜フヘキモノナリヤ又ハ悲シムベキモノナリヤハ別問題ニ屬ス、茲ニ問題トスヘキハ其膨脹セル經費ヲ支辨スルニ當テ人民ノ經濟的苦痛如何ト云フ點ニ存ス、換言スレバ經費ノ負擔力如何ト云フ問題はナリ、經費ノ負擔力ハ人口ノ増殖、富力ノ増加ト對照シテ之ヲ考察セサルヘカラズ。

經費膨脹ノ法則ハ既ニ説明セルガ如ク動カスヘカラサル眞理ナリ、然ルニ人口ノ増加、國富ノ増加モ亦經濟學者ノ肯定スル所ニ屬ス、若シ經費膨脹ガ人口ノ増加、國富ノ増加ト足並ヲ揃フルモノナランニハ、經費膨脹ハ必ズシモ悲觀スヘキモノニアラザラン、之ニ反シテ經費膨脹ガ人口増加、國富増加以上ニ進メルモノナランニハ、經費膨脹ハ必ズシモ樂觀スヘキモノニアラサルベシ、然ルニ人口増加、國富増加ノ程度ハ國ニヨリテ異リ、從テ經費増加トノ對照ハ總テノ國ヲ通シテ一様ニ律スルコト能ハサルナリ。

之ヲ財政學ヨリ見レバ經費増加ノ善惡ハ問題ニアラズ只要ハ經費膨脹ノ法則ヲ認ムルニ在リ、財政學ニテハ經費ハ出發點ナリ、收入ハ經費ニ適應セシメサルヘカラズ、若シ經費膨脹ノ

法則ヲ認メバ收入増加ノ必要ヲ認メサルヘカラズ、更ニ切言スレバ收入ハ經費ト相並行シテ膨脹スルモノタラサルヘカラズ、即チ收入制度ハ經費膨脹ノ法則ヲ認メテ之ヲ定メサルヘカラサルナリ、夫ノ租稅ガ近世諸國ノ收入ノ骨髓ヲ爲ヌニ至レルモ亦之ガ爲メニ外ナラズ、租稅ガ國家收入ノ骨髓ヲナストセバ吾人ハ租稅收入ノ増加ハ果シテ經費膨脹ト並行シテ進ミツツアルカヲ研究セサルヘカラズ。

此ノ如クシテ經費膨脹ノ法則ヲ認メハ、收入制度上種々ノ問題ヲ惹起スルナリ、是レ余輩ノ收入論ニ入ルニ先チ茲ニ之ヲ論究セル所以ナリ。